

武將感狀記

67
478

67-478
1200501281689



始



67
478

武將感狀記

削除濟



武將感狀記



67-478

解題

本書は足利氏の末葉より、織田、豊臣を経て徳川氏の初期に亘り、元龜天正を中心として戦國時代に於ける武人の事業性行等の優劣、得失、成敗等の事績を研究し、此れに間々著者の見解を加へて、武人平生の用意を説述したるものである。文章は簡潔にして雄健、議論は著實にして親切。本書内題には「近代正説碎玉話」とあるので、單に「碎玉話」とも稱せられる。正徳六年の刊行で全部十卷ある。著者能澤正興は平戸の藩の儒臣で、通稱は猪太郎、淡庵と號す。著はす所、應兵記、秀眞國美論等あり。就中本書が最も世に行はれて居る。

卷
目
録



碎玉話叙

伊蒿子有言曰、列國地醜德齊。獨備州之有人何也。蓋其先主羽林君某、性孝義而好古、國中有兩學舍、民間有師儒、儒風聿興、異教寢息。若淡庵子、乃值乎其教化隆盛之時。是以平生所事、主忠義、學文勉武而已。夫人有誠、則言不誕。頃者、剽闕氏鏤其纂集、碎玉話於梓。是信其說人之多也。余採見之、將帥之得失、與勇武之優劣、蓋斟酌得於文獻之事跡、以成編。有所諱乎。故有論也。然仔細看過、則有取捨予奪之意而存也。講武之士有執于此、豈謂無益乎。

正德丙申孟夏浪華散人操觚於醉醒亭

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

碎玉話序

有^リ勇^ハ無^キ義^ハ君子之所^レ惡^ム也。雖^ド有^リ勇^ハ有^リ義^ハ、不^レ知^ル用^フ武^ノ之^術、則^チ又^リ有^リ暴^ハ虎^ハ馮^ハ河^ノ之^讖、可^ク不^レ謹^マ哉。欲^セ知^ル用^フ武^ノ之^術、觀^テ古^ノ人^ノ本^ニ忠^ニ孝^ノ之^心、而^シ侵^シ難^ク衝^ク敵^ヲ、生^レ而^シ不^レ幸^ト、死^シ而^シ不^レ悔^ム、臨^シ事^ニ而^シ懼^レ、好^ク謀^ヲ而^シ成^ス者^ハ、可^ク以^テ爲^ス法^ト矣。

近^キ世^ニ自^リ天^ノ文^ニ至^ル慶^長之^間、天^ノ下^ニ鼎^沸、列^國之^群、牧^割據^シ于^州郡^ニ、日^々爭^ヒ土^ノ地^ヲ、月^々動^ス干^ノ戈^ヲ。當^ル時^ニ將^卒共^ニ皆^シ生^レ于^戰場^ニ、死^ス于^戰場^ニ。故^ニ察^シ兵^ノ機^ヲ、運^シ計^ヲ、策^ヲ、論^ヲ、剛^ニ弱^ヲ、評^シ優^劣、無^ク精^ニ於^此時^ニ焉。實^ニ可^ク爲^ス武^ノ門^ノ之^準的^者乎。

記^ス其^ノ事^ノ迹^ヲ之^書、多^ク流^ル布^ス于^世、然^レ纔^ニ錄^シ興^亡之^梗、槩^ヲ與^テ勝^敗之^大段^ヲ、未^ダ得^ズ曲^ヲ暢^ク旁^ヲ通^ス、惜^シ哉、志^シ士^ノ勇^者、致^シ忠^ヲ守^リ節^ヲ、肝^ヲ腦^ヲ塗^レ地^ニ、義^氣動^レ天^ヲ、可^ク流^ル芳^ノ百^ノ世^者、猶^ホ頗^ル湮^ス晦^ス矣。備^州熊^澤氏^ノ憂^レ之^也、深^ク於^茲考^シ家^ノ家^ノ之^傳、記^ス聞^ク故^ノ老^ノ之^口碑^ヲ、拾^ヒ遺^ヲ、闡^ク幽^ヲ、輯^シ集^ス成^ス帙^ヲ、名^ヲ曰^ク碎^玉話^ノ、而^シ後^ノ前^ノ史^ヲ、

脱漏存^ス二什一^ヲ於千^ニ百^〇堪^レ可^ニ嘉尙^ス矣。方^一今天下將士幸浴^ニ太平之化^ニ、
 重褥^ヲ而坐^シ、高枕^ヲ而臥^ス。冀^{ハク}閱^ニ是^一等之書^ヲ興^ニ起^シ重義^ヲ、輕^レ命^ニ之心^ヲ而不忘^ル、
 在^ニ溝壑^ニ焉。攝州書林將^ニ壽^ニ梓^ニ索^ニ序^ヲ於予^ニ、於是乎書^ス。
 正德 丙申 端午 午 日

岡山 晚進 和田正尹 識

武將感狀記

淡庵子編輯



大坂冬陣池田越前守、命を受けて尼崎の城を救ふ。兵寡うして而も大坂に迫りければ、請に依りて松平武藏守利隆・周左衛門督忠繼と相共に計りて加兵をやる。利隆は宮城筑後、忠繼は南部越後なり。いづれも武功の士たるに由つて擧げらるゝ者なり。各々騎士三十人鎧炮百挺と相定む。筑後は先立ちて尼崎に至りて南部を待てども未だ來ず。二三日過ぎて後、使を以て今日參着の由を筑後に云ひ遣はす。悦びて中途まで使を出し、我二三日以前より此に來る。旅宿なれども少しは居馴れたれば、今晚從僕まで残らず一飯を侑むべしと云ひ送る。南部便ち懇情少からず、承意に従ふべしと返答す。筑後遙に出で迎へ、打ちつれて尼崎に抵る。南部筑後に向ひて、貴殿は此より歸られよ。我は先づ此の邊を打ち巡りて、頓て跡より行くべしと云へば、宮城は歸る。南部從者をば皆遣して鎗持・馬

取・歩者二三人にて郭外くわくがいに乗り出す。已に日暮に及びて南部歸り來る。宮城南部に何ぞ遅おそかりつるやと問ふ。南部又と云ふも延々なれば城の構へ、地の利、萬委よろづかしく見たりと答ふ。飯後はんごに南部宮城に問ふ。口々の手分、所々の番人等はいかにと、宮城が曰く、貴殿を待ちて未だ令せず。南部又問ふ。船場の用心、敵の寄すべき道筋をば見届みとけられたりや。宮城が曰く、獨り決しがたくして未だ見ず。南部が曰く、已に怠おろそれり、片時も忽ゆるがぜにすべからずとて、即ち筆取を呼びて役付を定む。某の口々は騎士何人、足輕何人、其の法はかくくも也。餘は遠淺とほあせにて船の著すくべき所に非ず。既に定りて後、南部敵の情は量はかりがたし。敵只今にも寄せ來らば爲めに敗やぶらるべし。貴殿此こゝに來りて、二三日の間手分なきは我を待ちて評議ひやうぎせんとの事なるべし。されども、事を譲らん時に非ず。もし故ありやといへば、宮城愧はづる色あり。南部云ひふくむべき事あり。町々の目代に來れとて呼びよせければ、目代ども四五人來る。宮城座敷に居て此にと云ひけれども、南部子細しさいの候とて庭の戸口を明けさせ、白砂しろすに呼び入れたり。目代共、宮城南部を敬せず、立ちながら手を組みて、我等に何の御用が候と云ふ。南部怒りて目を瞋いらして曰く、苟くも源君の命を蒙りて、宮城南部池田家の援兵えんべいとして此に來れり。身不肖みふせうなりとも源君を重んぜば、我儕わがらを敬せざらんや。若し一戦に及びて、身方利を失うはば、汝等盡く敵の爲めに斬虜ざんりよせられ、貨財くわさいは盜ぬすの有とならん。今我儕わがらを侮あなづらば敵までもなし、忽

ち汝等を斬斷せんざんする事我儕わがらにありと。其の時目代等、大に恐おそれて皆膝を屈め、首を低たれて額ひたいに汗す。南部が曰く、我今日の來路きらいちに見る所、往還やうわんの町口はそこと、そこと也。又此の外にありや。目代が曰く、是のみ。南部が曰く、其の口々に番人を置きて、往還やうわんの旅人あらば一飯の支度ばかりにて一夜も宿せしむる事なかれ。番人の中一人是を見送りて、上りならば上口の番人に理れ。下りならば下口の番人に理れ。晝夜のかはり時を定めて、少しも違ちがふ事勿なかれ。番人のみを恃たとせされ。汝等一人必ず代かるべく番所に居て相戒めて知らせよ。若し怠おろそ弛しあらば、即ち汝等を戮りして宥ゆるさじ。早く歸り令せよと。目代等、一々承りぬとて出づ。其の一人を使として、町奉行の所に對談たいだんの上にて萬申合ふべきにて候。それへ參るべしや、これに入來にらあるべしやと、云ひ遣つかしければ、奉行頓とて來る。南部一禮の後、今まで町口の番もなし。與ともに謀かりて後、令を下す事本意なれども、遅おきに及ぶの條、暫時も早き事、身方の爲めなれば申付けし也。目代の懈怠けだあらば、即座に斬罪せんざいに處せん。命令嚴ならざれば軍に利なき事御存じの通りにて候、といへば、町奉行尤なりと云ふ。即ち誘ひ出して番所に到れば目代見えず。之を呼ぶに傍かたはらより出でたり。南部が曰く、汝怠れり。必ず一人は此の所を去られ、休息きゅうぎの場に非ずと堅かく令して歸る。それより宮城と相議あひぎして、日夜二三四度俱ともに自ら番所に至りて怠おろそるや否いなやを相聞あひきひて常式とす。然れども時を定めず。兩人番所より歸る時舟場ふねばに潮満ちた

り。宮城が曰く、此の所敵船の著くべきか、番を置きて守らすべしと。南部が曰く、昨日我よくこれを見る。船の著く所に非ず。奥少し深けれども口淺し。若し船を著けば歸路に泥まん。却て味方の獲ならんと。宮城又曰く、向に大なる竹藪あり。焼き拂ひて遠く見透さば可なりと。南部、我これを計る、敵よせ來らば大軍ならん。竹藪を待みて兵を匿すべき理なし。却て身方伏を置くに便あり。如し大軍にて竹藪を待むの意あらば是れ弱敵なり。恐るるにたらず。況んや是れ民の産なるべし。故なくして焼き拂ふは身方に仇するに似たり。宮城二事ながら南部にとられずして赤面す。南部又宮城と議して小屋の前に柵を付くるに、宮城は下僕に令し、南部は自身これを見る。南部、宮城が柵を見て謂つて曰く、貴殿の柵は弱くして駒よけの如し。何ぞ自ら見ずして下僕に令するや。宮城、南部が柵を見るに、小屋より二三十間ばかり出して付けたり。柵際にわら筵を敷き、足輕に下知人の士を加へ、番人を置きたり。其の體嚴整侵すべからず。南部が曰く、此の柵を待みてあなたち敵を防ぎ止めんとには非ず。第一用心に怠らざるは敵を威する處なり。貴殿の柵内狭し。鎗鎧炮のふり廻し自由ならじ。然らば利すくなきかと、宮城歸りて柵を付けかへたり。大坂の兵尼崎によせんとす。其の備ある事を聞きて止む。是れ南部が力なり。宮城も聞ゆる武士なれども、此の時は南部に及ばざる事遠し。宮城後に人に語りて、南部の如きは、一にして千に當る者と謂つべし。實

に國の重臣とするに恥づべからず。我棧しても及ぶ所にあらずとて、大に嘆稱したり。

同多陣に木村長門守重成、信貴野堤に軍す。後藤又兵衛尉基次、重成と善し。是の故に人衆は其の陣所に殘し置き、馬廻十人許りにて重成が備に來る。重成が足輕、敵に打ちしかれ、堤の陰に伏して頭をも出し得ず。基次持たせたる鎧炮を取り、堤の上に延びあがり、立ちながら二つ放し打ちて黒し。者共かくうてと恥ぢしむる。此の競に由りて足輕共堤の上のぼりて、一齊に打ちたたてければ、敵又却て打ちしかれて、堤の陰に平伏す。基次左の小指に傷つきぬ。重成見て手を負はれたるやと問ふ。基次鼻紙にておし巻き、我吉例なりと云ふ。重成基次に向ひて荐に其の陣所に歸られよと云ふ。其の心を察するに、重成は若武者なれば偏に基次に取り飼れたりと、人にいはれん事を思へる氣色なり。是れ又器量あり。重成が従者後にこれを語る。

同多陣に眞田左衛門佐幸村、天王寺口の出丸を守る。加賀の師之を攻むること甚だ急なり。士卒勇みて突いて出でんと請へども、眞田制して許さず。門を閉ぢ、柱に凭りて、默然として睡るが如し。是れ兵氣を一つにし、士力を儲ふるの術なり。加賀の師、已に近付きて乗り入らんとするに及んで、眞田大に呼びて士卒を勵し、敵を壘にして、武夫の名を成すは此の一舉にあるぞとて、弓砲齊しく放ち、鎗刀共に撃たしむ。加賀の師、死傷千餘に及べり。眞田僅の出丸に在りて、敵を四方に

受けながら恐るる色なし。此より敵漫に攻めず。

同冬陣に松平武藏守利隆は神崎に軍し、弟左衛門督忠繼は尼崎に軍す。忠繼、人衆推出し矢野兵庫・佐分利九之丞を物見として蜷江の地形を覘はしむ。二士歸りて兩方沼にて前狭く末廣し。身方の爲めには利鮮く、敵の爲めには便ありと白す。又由井伊豆・丸山豊後・渡瀬淡路を差遣す。三士は却て身方の利あらんと云ふ。忠繼、矢野・佐分利が言と相齟齬するを以て其の故を問はるゝに、三士君公人衆を推出させ給ふは、合戦を望ませらるゝに非ずや。身方大軍なるを見て、敵地の利なき時は必ず怖れて出づべからず。君公合戦を挑まるゝとも得べけんや。敵地の利を恃みて出す處を、身方は大軍なり。長々と出させて後、急にこれを撃たば、勝つ事按の内に候。如し人衆を向けられなば、早きを善とす。利隆公の備、續き候はゞ、敵見おぢして、未だ戦はざるさきに引き返し候はんと申せば、忠繼汝等が云ふ所尤なりとて、即ち蜷江に向ひ、神崎を涉り造作もなく敵を追ひ拂はる。利隆はこれを見て、勇み進むといへども、目付城和泉守永盛、源君の命なりと云ひて強ひて之を制す。利隆憤を抑へて兵を收めんや否やと思惟する處に、阿部四郎五郎、諸手を巡りて此に来る。利隆此の由を告げらるるに、阿部兄弟の身と云ひ、眼前の敵と云ひ、忠繼若し克たされば是れ兄弟を棄てたる也。忠繼又これに克たば、是れ自ら怯の毀を取るなり。兩ながら武家の恥辱なれば、

只進むに如かずと云ふ一言に力を得て、永盛制すれども用ひず。利隆の將、利隆始めより貳あらず。何をか疑ひて、沮み止めらるゝや、敵を見ながら卻て兵を收めば、師を起して此に来る者何の爲めとかする。源君決して此の如きの非理の命あるべからずと云ふ。永盛齒を切み、小躍して汝等吾言を輕蔑す、其の罪重し。必ず言上を遂げて、一々腹切らせんと大に怒る。利隆の將勿論の事也。士たる者、其の君の爲めに腹切らん事は、本より甘んずる所なりとて、中津川を涉りて横すぢがへに蒐る。敵、此の兵勢を見て、中途より引き入れて合戦に及ばず。大坂没落の後、利隆搦貳を懐き、兩陣の中に居て、主客の勝負を料る。是れ弱を叛きて強を扶けんとする者也と讒言に遇うて、源君、利隆を譴責せらるべきの沙汰あり。利隆、番大膳を以て毫釐も不忠の志、非義の事なし。皆永盛が所爲なる事を陳ぜらる。番は廝狼の卒より經のぼり、騎士の將と爲つて、政を興り聞く程の者なれば、始終少しも驕かず辯舌審に子細を演べたり。源君始め簾を隔てて利隆何をか陳せんと怒らせ給ひけるが、番が言ふ所理明かに、證正しうして疑盡く解ければ、簾の外に出させ玉ひて、段々聞召し届られぬ。以後を慎めとの上意也。番、頭を疊に付けて拜して肯て立たず。本多佐渡守正信御前に在りて罷りたて、忝なき上意なり。早く歸りて此の旨申し聞かせよとありけれ共、番猶ほ立たず、正信、事済みて起たざるは故あるかと尋ねらる。其の時少し頭をあげ、正信の方を見て、憚多

き申す事に候へども、以後を慎めとの上意は、利隆が誤なき段未だ聞召し届けられざる處あるかと存じ候。是よりさきに嘗て過差なく候へば、以後も亦唯今の通りに候。別に慎む可きの事候はずと申す。源君重ねて既に利隆の誤なき事をしれり。更に疑を遣さずとの仰なれば、其の時頓首再拜して歸る。正信以下座にある人々大に番を嘆美しける。

同冬陣、和團に成りて、源君洛に歸らせ給ひて、和團の印に惣塹を埋めらる。本多上野介正純等奉行たり。外塹一重埋め畢りて、又内塹を埋むる處に、城より總構の堀一重の約束なり。内塹の事に非すと制すれども、正純等總様の塹皆埋むべし。一重と云ふは心得の誤なりとて耳にも聽き入れず。こはいかにと驚きて淀殿よりお玉の局を使として、正純等まづ役人を止めよと云ひ出されければ、正純、お玉の局に對して、兎角の返事をば言はず。あはれ美女なる哉、願はくは盃給らんと云ふ。お玉の局、野州は狂するや、何ぞ無禮なると怒りけれども、猶ほ豔語のみなるに由りて、詮方なく城に歸りて爾々と申す。淀殿京師に使を立てられ、成瀬隼人正政成に就きて源君に訟へんとす。政成、我等は始めより此の事をば存ぜず候。本多佐渡守、令を聞きて其の子上野介に下知いたし候。正信に就きて達せられよとて取りあはず。正信の宅に至れば、病と稱して對面せず、使の往復日數をふる間に、篠丁を増して塹は残らず埋みたり。其の時、正信大坂に往きて之を見、驚く

まねして、愚子壯年なるに由りて何の思慮もなく、かゝる粗忽を仕り候。老臣折節あしく病みて此の事を詳に承り届けず候。後悔今は益なく候。又改めて此の塹を掘らるるは埋むるより十倍の費に候。已に和親の泰平の上は再び兵を動かさずとの吉瑞なるべし。何の御心を勞せらるゝ事か有らんと云ひて歸りぬ。

攝州野里村の三右衛門は農人なれども勇を好んで勢ひ強し。茲に由りて、一度兵を起さば隣邑悉く之に屬す。片桐東市正且元、故ありて大坂を出で茨木の城に入る。大坂の兵、泉州堺の政所を攻むると聞きて歩騎二百許りを遣して、政所を救はんとするに、三右衛門、近邊の郷民を催し聚めて大半撃ち捕りたり。且元齒を切みて怒れども力及ばず。源君、天下を定め玉ひて後、且元鬱憤猶ほ解けずして之を訟ふ。さるに依りて三右衛門を召して決斷所に於て其の事を責めらる。三右衛門且元を睨みて貴殿故太閤の重恩を荷ひて權を取り威を逞しうす。されば死を守りて志を盡さるべきに、危難の時に方つて君を忘れ、身を顧みて城中を躁動せさせらるゝ事、武臣の本意にあらず。此の時貴殿敵とも身方とも更に其の心中を測り知らず、我等貴殿の士卒を討ち捕つたる事、あながちに罪とすべからず。道に叛きて富貴ならんよりは、義を存して滅亡するにしかじ。貴殿自ら慙ぢざるのみに非ず、却つて人を讒言せらるゝ條、顔の厚きなりと、憚る所なく申しければ、且元も閉口す。源君、

三右衛門が言ふ所、辨才あり、勇義あり、たゞ者にあらず。之を帥ゐるに道あらば、所のよき縮りにも成る可しとて、宥免せさせ給ひき。

大坂の夏陣に、源君種々の奇策を運し玉へば、之が爲めに城中の將心々に成りて守計さらに一決せず。人々没落近きにあらん事をあやぶむ。天王寺に於て城兵千許り圓く備へたるが、切りぬけて一筋に逃げんと思ふ體なり。窮寇なれば其の勢疾きに由つて、東師之れを懼れて避けんとする者あり。稻垣攝津守は牧野右馬允、土井大炊頭、酒井左衛門尉と一所にありけるが、身方の敗形あるを見て、わざと相備を離れ、一町ばかり引きのきて陣す。按の如く城兵直ちに切つて入りしに、乍ちつき立てられて皆散亂する處に、稻垣こゝぞと思ひ、僅に百五十人横に之を衝けば、城兵たまらず敗走す。此の功に依つて一萬三千石の加増を賜りて、大坂の城を守らせらる。

同夏陣に、五月五日の朝、眞田左衛門佐幸村の物見、先より駈け歸りて、旗三四十本、人衆二三萬許り國府越より此方に踰え來り候と告ぐ。是れ伊達陸奥守政宗なり。士卒すはや只今此の備を推出さるゝかと勇める氣色なり。されども障子に靠りて片膝を立て居たりしが、徐に應へて、さあらんとばかりにて、外に言を出さず。日午なる時、物見又駈け歸つて、今朝のと旗の色替り候が二三本、人衆二萬許り、松陰にて定かには見えず。龍田越を押しおろすと告ぐ。是れ松平上總介忠輝卿

なり。幸村そら睡して居たるが目をあけ、よし、いか程も踰えさせよ。一所に集めて撃ち敗りたらんは、大に快からんものをとて、一向是に取り合はぬ體なれば、皆はやりたる氣も稍、しづまりぬ。是れ大敵を恐れしめじ、身方を躁せじとの事なるべし。夕炊畢りて後、此の陣所は戦ふに便りなし。いざ敵近くよらんとて、一萬五十餘、正奇を紊さず前後を混ぜず、騎士歩卒次第を整へて推し出せば、敵縦ひ十倍なりとも、惧るに足らずとぞ思はれける。其の夜、道明寺表に陣を取つて、營法軍令嚴なれば、敢て侵掠すべからず。明くれば六日の早旦、野村邊に到る。渡邊内藏助糺は幸村に先だちて水野日向守勝成と戦ふ。糺、勝成を切り靡ける事五六十歩、勝成もり返して糺を撃ち卻け、互に力闘三度に及んで、糺深手を負ひければ、人衆を脇に引き取り、備を立て直し、幸村に使を遣はして、只今の迫合一創を被りて復戦ふ事成りがたし。然る故に貴殿蒐引の妨ならんと存じ脇に引き取り候。且つ横を撃たんとするの勢を見せて控へ候。是れ猶ほ貴殿の一助たるべきかといへば、幸村御働きの程、目を驚かし候。此より我等受け取り候と返答して軍を前むれば、政宗の多兵蒐り來る。野村の地形は、前後は、岡にて、岡の上平なり。中間十町ばかり卑くして、道の左右田疇に連れり。幸村の先鋒、岡の上に半すぎ推しあげたる處を、政宗の騎馬銃炮八百挺を一同に打ちたてたり。此の騎馬銃炮と云ふは伊達家の士の二男三男壯力の者を選び、本より仙臺は馬所なり、駿足をすぐりて乗らしめ、奥州

にて所々の戦に馬上より鐵炮一放と定めて撃たするに、中らぬ玉は稀なりけり。打ち立てられて敵の備亂るゝ處を、鐵炮の烟の下より直ちに乗り込みて駈けちらす。馬蹄に蹂躪せられて、敵敗績せずと云ふ事なし。此の時騎馬鐵炮先手より一二町も前に進みて連發するに、鉛子の飛ぶは電の如く、火薬の光は電に似たり。烟は忽ち雲霧と爲りて、丈尺の間も見え分ず。されば岡上に推しあげたる幸村の兵士多く死傷したれども、幸村鐵炮の烟の中より先鋒に馳せ來て、爰を怵へよ。大事の場ぞ。片足も引かば全く歿すべしと下知する聲、耳に徹す。村々立ちたる松原を楯となして、槍の柄を握りながら、平伏に成りて後に退く者はなし。始め兵を合せんとする時、幸村令を下して、胄を著せず槍を取らせず、馬の傍に引つ添へて下知せん時を待たせたり。敵合十町ばかりになりければ、幸村使番を以て、胄を著よと云ふ。是に於て、皆持たせたる胄を取つて打ち著、忍の緒を締めたりければ、勇勢新に加つて、兵氣愈々盛になる。敵合已に二町ばかりあるらんと思ふ時、幸村又使番を以て槍をとれと云ふ。是に於て手々に一槍を取りて、ほさきを敵の方にさし向けたれば、面々何なる勁敵堅陣なりとも撃ち摧かんと、別に魂を入れたるが如し。ひた／＼と鐵炮にうち斃されながら、一足も退かさざりしは、胄を著、槍を取りたる氣勢壯なるに由つてなり。敵は倍々而も累代恩を得て、義を守り忠を思ふの士なり。身方は寡少、殊に元來撫循したるに非ず。新附假合の徒なり。勝算彼

に在りて、敗形我にあり。然るに此の如くなるは、幸村良將の器、大阪城中勇知第一たるべし。さて政宗の騎馬鐵炮の士、馬を入れんと駈け寄せけれ共、折しきたりと見てたゞよふ處に、炮聲も絶々になり、烟も稍、薄くなれば、幸村其のしほあひをや計りけん。大音を揚げ、再拜を振つて、かゝれと云ふ詞の下より、皆起き立ちて直に突いてかゝり、政宗の先手を七八町追ひ崩す。後備の將秋甫刑部と幸村の兵士西村孫之進と鎗を合はす。刑部が子甚平、父を討たせじと、中に隔たる處を、初鎗に綿嚙のはづれを撞き損じてあがりたると思ひ、二の鎗に草摺の間を撞きてはね倒し、首を取らんとする所を、甚平が從者二三十人、西村を斬る事、幾刀と云ふ事を知らず。鎧の上にて傷かさるを、其の中に鎗をもつて腰の骨を刺され、痛手なれば、目眩いて已に絶え入りけるが、幸村の總軍競ひかゝりて追ひ拂へば、西村が首をもとられず、甚平が首も取り得ず。甚平は其の創にて陣屋に歸りて死す。西村は幸に死せざる事を得たり。是に於て、勝成政宗を勸めて復戦はしむ。政宗我師已に疲れたり。合戦は今日に限るべからずとて聽かず。勝成小敵を目前に置きながら、忠輝卿政宗縮り居るは恥にあらずやと、又忠輝卿をいさめ立つれ共、忠輝卿果さず。勝成は兵少きに由つて、獨り戦ふ事あたはずして已みぬ。未の刻まで幸村合戦を持して居たりしが、其れより繰引に引き取りたり。其の體肅然として追ひ討たんとせば却つて爲めに挫かるべし。東師の見る者感嘆す。西村が手

負ひたる時、馬取彌右衛門と云ふ者、是ほどの手にて弱ると云ふ事や候とて、あとに歸る。西村は幽に其の聲を聞きて、見捨て、逃げたりと思へり。少間ありて、腰手拭を水に浸し持ち來て口にしぼり入れ、氣を付けて肩にかけ、營陣に歸れり。七日の戦には、西村創を病みて出でざりければ、幸村討死の場を苟も免れたるに非ず。尤も奥深し。

眞田安房守昌幸、關原の後、高野の久戸山の麓禿の宿に潜居し、常の志秀頼卿と源君との戦あらば、大坂に與して、關東を亡さんと欲するにあり。圍碁を好みて、幸村と戲奕す。是れ圍碁にあらず、備立人衆配りを試むるなり。重病を受けて將に死なんとす。因りて歎息して、我れに一つの秘計あり。用ひずして徒に死なんやと云ひけるを、幸村傍に在りて之を聞き、思召さる、旨あらば、家訓後學のため承り置き候はゞやと尋ねけるに、昌幸、汝が及ぶ所にあらずと云ひて語らず。幸村身不肖に候へば、仰せ置かれたりとも、かひなき者と年來御覽じ捨てられけるにや、素より庸愚にして人がましく申すべきにあらず。返すくも自ら愧ぢ入り候ひぬと、深く恨みたる氣色なり。昌幸、汝恨むる事なかれ。我汝をもつて庸愚なりとして、我が志を言はざるには非ず。我れは老功ありて人に信ぜらる。信ぜらるゝ時は言聽かれ、謀用ひられん。汝が才器縱ひ我に増されりとも、軍陣の數を積まさるに依りて名顯れず。名顯れされば金言も聞かれじ、良策も用ひられじ。同輩異

論を立て、口々心々ならば何事も無益ならん。然れども胸中に思ひこめて空しくせんも又なげかはし。されば汝が爲めに語らん。三年を過ぎずして關東大坂合戦に及ぶべし。然るに於ては必ず大坂より我を招かれん。招きに應じて出づるならば我をもつて、謀主とせられん。其の時兵二萬許りを請うて、青野が原邊に出張りし、關東の軍勢を支へん。汝之を知るやと云ふ。幸村暫く思按して、要害の地に據るにもあらず、堅確の城を守るにもあらず、隣國の援ひを恃むにもあらず、二萬許りの兵、而も國々のかり武者、關東十倍の銳騎健卒を、平坦の曠野にて禦がん事、存じ寄りも候はず、不審に候といへば、昌幸我も亦禦ぐべき手段なし。然りといへども我が武略のほどは豫て源君に見せ申したる事なれば、吾二萬許りの人衆を督きて道に待つと云はんに、十萬廿萬の猛勢なりとも、行なりに輒く撃ち破らんとは思はれじ。とかくの評議あらん間に、四五日は過ぎぬべし。我れ奸細を付け置き、敵を料りて軽く引き取り、又勢多の橋を墮ちて此にて又一支へせば、凡そ十餘日は攻め上る東師を所々に遯滞せしめん。幸昌こそ關東の大軍を支へ得たれといはゞ、畿内西國の諸將、關東にや附かん、大坂にや與せんと兩端を持する者、多くは大坂に歸せんか。然らば大坂の兵、内に取りて七八萬には及ぶべし。其の時、人を遣して二條の城を焼き拂ひ、盡く大坂の城中に引き籠りて郭外に柵を付け、弓鐵炮を備へて堅く守り、夜警、信烽、偵邏怠らず。敵縱ひ荐に戦を挑むとも應ぜ

ず、屢、我が師を辱かしむるとも怒らず、そゞろに城兵を僞引くとも出でず、愈佚をもつて勞を待ち、久しく持ち、日をむなしうするの謀をなさば、東師多くは退屈して惰りあらん時、或は夜撃ちに、或は朝蒐にして、身方の勇を備へて、敵の心を惱まさば、大軍糧乏しく氣疲れ、城は名城なり。敵怒りて力攻めにせば、柵の内、櫓の上より目當を打つが如くにして、敵のみ日々死傷せん。是において書を通じ、使を遣し、故太閤恩顧の諸牧を招かば、始め關東に屬したるも、志を變じて、大坂に従ふ者あらん。是れ其の力を借らずとも、かかる習ひ、關東の師相猜ひて戦必ず務むべからず。虚を見、覷を窺ひ、心を一にし力を戮せて、大に擧げて合戦を遂げば、東師を百里の外に追ひ卻けん事掌を指す如くならん。寔に我が師を全うして敵の軍を挫くの奇籌に非ずや。汝我が志を繼ぎて大阪に籠り、此の理をもつて、人に説くとも、修理主馬が徒、兵術不鍛鍊の者なれば、聽き用ふべからざる事必せり。方々に人衆を分けちらし、名城の要地を離れ、無謀の戦を好みて滅亡を求めん。汝以後を見よと云ひけるが、果して其の言に忤はざりき。

大阪の夏陣に五月六日、木村長門守重成は若江に陣す。勇は生れ付きたれども、陣數に鍊れざる將なれば、其の持口を固めず、此所には敵なし。敵のあらん處に向はんとて八尾に赴く。此所にも又敵なしとて、本の陣に歸り來るを、藤堂和泉守高虎其の首を撃ち、井伊掃部頭直孝其の尾を撃つ。

重成首尾の敵に挟まれ、拒ぎかねて敗れたり。此の時、直孝の臣般若内膳物見に出で、重成の備の未だ整はざるを見て、敵に撃つべきの虚顯はれ候。里程の積り、夜深に出でずば、八尾に往きて、今此に歸る事を得べからず。敵途に疲れ、兵糧をつかはん處をうたげ、利あるべしとて、二度まで使を立つれば、直孝心得たりとて、切つて蒐る。庵原助右衛門は軍奉行にて、士卒を指揮す。一番鎗八田金十郎、二番鎗戸塚左太夫たり。二士、源君より感牒を賜ふ。庵原かゝるべき時分を見すまし、再拜を振つて若者どもに功名を遂げさせ、自身も鎗取つて進む處に、さわやかに見えたる武者あり。即ち撞き伏せ、股を二刀斬り、冑に付けたるはぐまを引き切つて、腰に挟めば、安藤長三郎後より來る。其の首を安藤にとらせて庵原はなほ進み行き、又敵に遭ひて、之を刺し首を得たり。始のは重成なり。後のは重成の親類木村新十郎と云ふ者なり。満座七右衛門、川手主水は八田戸塚より先だちて、鎗を合せたれども、庵原かゝれと云へる下知なき以前なり。八田戸塚はかゝれと云ふ聲の下より、直に進みて、鎗を合せたり。されば源君軍法を正させ玉ひて、満座川手は拔懸と云ふものなり。過は功に準じてこれを宥む。一番鎗には非ずとて感牒を賜はらず。尤も味あり。

寛永十四年十一月、肥前島原耶蘇の賊起りて、有馬の古城に據つて叛く時、小笠原右近將監忠政の從臣高田又兵衛功あり。ある時賊夜討す。夕炊過ぎて後、暮に及びて飯を炊ぐと見えて、烟多く

立てり。是によつて高田夜討あらん事を測り知りて、豫め備へたり。是の故に少しも躁動せず。十五年の春、又鍋島信濃守勝茂明日城を攻めん事を察す。いかにといへば、勝茂の陣所、毎朝旗の霜を拂ひて立て直すを其の曉しかしたり。さるに依りて心がけ、明日群を抜いて、城にのり、首七つ取る。とらば、いかほども取るべけれども、其の後は取らずと語れり。

同耶蘇の賊起る時、寺澤兵庫頭、其の臣原田伊豫、並河九兵衛に令して唐津より天草に赴きて、村民の人質を取りて賊を鎮めしむ。原田・並河共に祿千石、天草に着く時、松倉長門守の居城島原を取らんとしたる賊等、長州の士に強く捍がれて取り得ず、肥後の富岡の城を取らんとて、賊六千人小舟に乗りて天草に来る。原田・並河本土にて行き逢ひたり。唐津の兵士、不意に遭うて、人衆寡ければ、皆賊に挫れて敗亂し、多くは舟にてまづ此の地を引き退く。原田六千人の賊を引き受け、本土と富岡との間、五里の道を十一月十四日の辰より申まで、且つ戦ひ且つ卻け、賊に敗られずして、富岡の城に入る事を得たり。原田が差物茜のしなひに鉛子七つ中る。八つめは竿に中りて、半より折れば、絹を取りて腰に挿む。此にて原田に従ふ兵士鬪死する者九人、古橋權太夫、衆に抜でて、佛坂にて蹈みとめ、賊を突きたてたる勇勢目を驚かす。原田は古の原田が末葉なり。其の被官筋の士ども、腰兵糧を付けて來り従ふ者五十餘人、原田が前に立ち塞りて力戦す、賊此等に撃たれたる者多

し。是の年來、原田が俸米を受けたるに非ず、又原田これを招きて然るに非ず。節義を闕かざる筑紫士の風俗此の如し。原田、城を巡り士卒を勵して守備を固うす。舟にて引き退きたる者、並河多左衛門を始め、原田に使を以つて此の城保つべきや否やと云ひやりければ、原田速に城に入らずして、舟よりの使其の意を得ず、城を守るの評議、使の口上に決すべきやとの返答なり。此の言に恥ぢしめられて皆城に来る。原田衆中に向つて、戌將三宅藤兵衛は吾未だ此所に到らざるさきに、城を棄てて逃亡せり。並河九兵衛は討死したりとも云ひ、鐵炮に中りて創を病めりとも云ひ、いづれにしても憑むべからず。吾君命を受けて此の賊を鎮めんとす。存生の中に退くべきの理なし。各唐津に歸れば、吾此の城を死所と定めたる旨を傳へられよとて、其の詞を紙面に書いて判をすゑて出す。皆原田が義に感じて、其の紙に連判して同じく誓つて守らんと云ふ。我々持にて將なき時は謀一決せじ。誰をか將とせんと云ふに、年比と云ひ、家高と云ひ、殊に今日の働、拔群なればとて、原田を推して將とす。原田、晝は士を勞ひて義を勸め、夜は卒を戒めて怠を匡す。賊十九日に城を攻めんと簡に書いて、濠邊に立て置きたり。其の期に至りて竹束を被きつれて攻め近づく。鐵炮を放ちて之を拒げども、竹束透らす。原田、諸手に使番を以つて種島を五十挺ばかり聚め、一所を目當として連發せしむ。乍ち竹束を打ち破りて賊大に崩れたり。此の時、原田が二士主馬又八等、大手の門

外の石垣際にて賊と鎗を合はす。澤木七郎兵衛、竹束を打ち破りたる勢に乗りて、聲を揚げて搦手より突いて出づれば、主馬又八等愈々力を得て、百餘人を撃ち捕りたり。賊又廿二日に城を圍みて攻むる處を、八十餘人を斬りて城兵の死する者なし。是に於て賊、城の固うして抜く可らざる事を知つて、有馬の古城に據らんとて、廿三日の未明に引き退く。原田、賊の陣を遙に見て、其の形氣を察し、賊は引き退くぞ、撃ち留めよとて、城門を開きて追ひつめ、三十餘人の首を得たり。城に入りたる者、俄事たれば鼻紙に事かきたり。原田、我が聞き置きたる事ありと云ひて、から紙を破りて見れば、其の中皆鼻紙なり。取り出して之を配る。寺澤志摩守廣高の爲しし所なり。賊、十九日に敗られて、廿一日の暮、大工小屋に失火ありて、城中遽て躁ぐ。豫ねて火消の役人を二與定め置きたれば、當番の者かけ付くる。原田、使を諸手に走らせて偽りて此の大工小屋は賊火矢を射ん時、燒草と成るべければ、燒き捨てさせ候ひぬ。始めより各々にも申すべきを不念にて告げず候。別事なし。鎖まられ候へと云はせければ、さぞあるらんとて鎖まりぬ。原田、見めぐらすに一僕あり。あの者捕へよと下知して捉めさせて、懷中を探れば火うちつけ木あり。城中に在りながら賊に心を通ずる者なり。餘人は氣も付かざるに、原田何と見とがめて知りたるぞと之を奇しみ、一言の謀にて躁動を鎮めし事、寔に卒に應ずるの知あり。賊亡びて後、並河三郎兵衛、今度兵士の勇性を論じ

て、或は逐斥賞罰を行ふに、兵庫頭愚昧にして並河に任せければ、最員の沙汰となりて賞罰多くは顛倒す。原田は並河が權威に諛はざるに由りて、大なる殊功を立てたれども、さまでの褒美なし。此によつて諸士原田を推し立てて軍功を論ぜんとす。原田、古より家中二つにわかれて、相争ふ者主人の家恙なきは少し。此を省みざるは不義に候。吾に於ては屈辱を忍びて唵嘿するのみぞと諫め止めければ、皆憤を抑へて已みぬ。時過ぎて後、原田は事を他に託せて暇を請うて唐津をさる。原田が如きは亂るゝ時の良將、治まれる時の忠臣と謂つべし。

大猷院殿の御時、榊原飛騨守は祿僅に千七百石、常に士を好みて加藤清正・加藤嘉明・福島正則など、武功の家の浪人を招き聚めて扶助し、面々身上方附くまでの中宿と云うて、俱に淡飯を食うて、朝夕譚話の友とす。故に甚だ貧乏なり。財用給らざるを諫むる者あり。我給らざるも給る所あらん。人の足るも足らざる所あらん。各々其の主意あり。彼等と平生武道の事を語る其の樂、萬金にも換へずと云ふ。ある時、浪人どもに向うて、人々胎を下りて啼叫する時より、武家に生れ付きたれば、先づ武職を知るを急務とす。好む所にひかれて、これを忽にするは非なり。今天下無事なり。さるに由つて徒に榮貴の樂に耽り、飽暖の安きに處て、金革を布くの苦み、矢石を侵すの危きに遇はざるが故に、士卒を帥ゐる道を失ひて、多くは心を離し怨を生ずれども、下情に達せざれば解らず。

事の變あらん時、攻守和伐の勢、盛衰虚實の理、治兵振旅の法、正奇首尾の節、一旦に講じて其の意に通すべけんや。戦の勝負は瞬息の間に分れて、治世の政に異なり。年來練習の中より臨機應變の奇計を出すべしといへば、皆これを感じ服す。耶蘇の賊起る時、飛州は細川越中守忠利の手の監視として有馬に赴く。子息左衛門佐も同道す。是に於て浪人皆年久しく厚恩を辱しとて従うて行く者二十七人。此等は先知千石・五百石・三百石取りたる者にて力量才智ある士なり。寛永十五年二月に至りて賊糧乏しく、兵憊れたるを見て、諸手總攻に議定す。左衛門佐、浪人共を會して一番乗をせんと欲す。時に十九歳、酉より亥に及ぶまで未だ決せず。藤田市左衛門席に進みて何れも評議を承るに、城を容易くのり取つて、無事に歸らん謀と聞え候。身方、雑卒を合せて僅に百三人なり。三萬餘必死に爲りて守る城にのらんとする者、身を全うすべき理少し。討死をきはめずして一番の志は思ひもよらぬ事に候。談合に時移れば、事泄るる習ひにて、制せられて半より止めんも見苦しかるべし。壯年の御身にて、一たび口に出されながら、此のまゝにて置かるべき義なく候間、只速に思召し立たれよと諫めければ、戸川定右衛門尤に候。誰をかくこそ存じつれとて、皆一同に總攻の前一日、廿八日の早旦と約束して、互に最期の盃を取りかはし、終夜飲んで寅の刻に出で立ち、湊際に忍び寄りて、明くるをまつ。小笠勘助、車の旗を竿に巻いて之を持つ。飛州はこれを知り

たれども、そら知らずして未明に忠利の陣に往きて、左衛門佐はとく小屋を出で候が、城の方に参りたると申し候。定めて物見のためなるべしと云ふ處に、左衛門佐、城に乗りて関の聲を揚げ、車の旗押立てたり。飛州、車の旗は別になし、左衛門佐、軍法を背きたると覺え候。父子は功罪同じがるべし。此の上は坐ながら見がたしと云うて走り出で、續いて城にのれば、諸手より四方均しく進みて、即日城を屠り、老稚男女を盡殺す。左衛門佐は右の耳を鐵炮にてうちきられ、左の大指を鎗にて突きさかれたり。廿七人の者共、或は戦没し、或は創を被り、鎧も甲も鎗刀の創十廿なきはあらず。今度の武功は偏に飛州、士を愛して眷遇の篤かりければ、士も飛州に懐きて、勇義の熾なるに由りてなり。

卷 之 二

和田伊賀守は攝津二郡を領す。荒木攝津守、和田と隣にて信長の旗下につき、時々相戦ふに、和田、五六と云ふ要害に據りて荒木多くは利あらず。和田しばし克ちに慣ひて驕色あり。ある時和田、五六を離れて三里出で馬塚に陣す。和田が師は八百人、荒木が師は三千五百人、永井隻人は齋

藤山城守道三の甥にて時に和田が所に客たり。和田に向つて敵を味方に比すれば四五倍せり。小を以て大に勝つの術は要害に據るにしくはなし。今貴殿湮をほり、柵を結びても敵をなやます計をこそせらるるべけれ。幸にある五六の要害を守らずして馬塚まで出張ること、一には敵を侮りて軍備を固くせざるの失あり。二には勝に慣ひて心怠り、色おごるの失あり。三には別に良策なくして、足長に地の利をはなるゝの失あり。是れ皆古より敗を取り擒となる所なり。願はくは五六に退きて、我が勝つべき敵の虚あらば打つて出づべし。否なる時は固く守つて敵を疲らさんこと今の圖に當れりと、諫むれども、和田わが勁士利兵のよく敵を摧くを見られよ、何の事の有るべきぞとて聽き用れず、永井此の上は力なし。貴殿に我が一命を與へて、年來の義を終るまでなりと云ふ。和田が家臣郡兵太夫、つねに敵陣に近づきて敵人とかたる。敵人敢て害せず。此の時敵人郡殿、今日なんぞ強ひて戦を挑まるゝや、天の時、地の利、兩ながら宜からず候と云ひければ、郡尤に候とて、馳せ歸りて和田を諫む。和田怒つて郡を罵る。郡、眞先かけて重手を負うて倒れたり。從者肩に引つ掛けて三町許り退ぞきたるとき、氣づきて眼を見開き、なんぞ我が上卷を敵に見するや、本の所につれてゆけと云うて則ちそにて死す。和田も又遂に討ち捕られ、永井も同じく戰没す。是に相續いで命を殞す者九人。みな果敢驍銳の士なりければ、時の人これを悼惜して、後その場の死所段々に墳をつきて、面々の名をあらはす。第一は永井第九は郡なり。從者たすけて退きしがゆゑなり。中川瀬兵衛、和田が首を獲たり。始め荒木、五百石の地を以て和田が首を募る。これを獲る者には必ず其の地を與ふべしと書き立てたる下に、中川瀬兵衛と姓名を、みづから記せり。その詞にたがはず、和田を撃ち捕りて五百石の地を領す。是れ中川が初知なり。後に人其の事を以て何たる思慮ありて此の如くなりや。外より思へば迂濶なるに似たりと尋ねれば、和田、諸卒の眞先にすゝみ、乗り巡つて下知すること敵を人とも思はぬ體なり。命を賭にして一勝負せば、多分撃ち得ん。もし討ち得ずんば戦場の土塊と成るまでよと思ひ定め、小高き所のありける其の陰に伏して和田を待ちしに、例のごとく荒木が兵の先がけしたる者を追つ立て、心よげに只一騎、衆をはなれて進み來るを、間近くなりて躍り出で聲をかけて、鎗を合はせ撞き倒して首を斬りぬ。和田輕々しき將にあらず、縮りて弓矢をとらば手近くよせつけじ。物具、馬の毛も見しられまじ、何と思ふとも力に及ばざることなり。我が目當は茲にありとぞ答へられぬ。

小野木縫殿助、江見源三兵衛は共に丹波の郡主なり。是故に年々地をあらそひ相戦ふ。江見が勢ひ次第に迫りて、わづかに孤城を守る。小野木かこみてこれを攻む。誰か江見が首を獲んと云ふ。井戸龜右衛門時に十七歳、傍に在りけるが、席に進んで、賤臣江見が首を獲んと申す。其の兄軍評

定して居たりけるが、これを聞きて縦ひ心に思ひ設けてもあはひあしければ手に廻らぬ物なり。若輩のいたす所、且つ無禮の至りなり。御前を退けと、あらゝかに云ひければ、井戸、今賤臣が申す處、全く浮氣にあらず。相撲を好んでとり候に、世は廣ければ他國は存ぜず、丹波一州に於ては、片手に足る者も候はず。地をはしるに越足さらに賤臣に似たる者も候はず。劔術に於ても又皆恐るるにたらず候。賤臣いまだ勝負の理、虚實の形のごときは辨へず候。これ將帥の任なり。敵を斬り、首を取るとは勇力の者の業にて候へば、何ぞ他にゆづり候はんや。賤臣ならで、又誰か能くし候ふべき。詞に似ると似ざるとを疊の上にて論じては極るべからず候と、匄言を吐けば、小野木兄が戒めも、弟を愛するの心にて遠慮あり。然れども彼が面相かならず仕損すまじきぞと、先づ一理をぞ付けられける。是れ又將の本意なり。井戸はかく云ひ放ちたることなれば、江見が首を捕るか、我が首をとらるか、二つの間ぞと思ひ定め、その夜中に忍び入り、縁の下に伏し居たり。曉方になりて江見いまだ鎧を著ず、小具足ばかりにて縁に出でたる所を、折節あたりに人はなし。走り出でひしと執らふ。江見四つ手に引組んで、縁の上を前後二三返押し合ひたり。そこにて相撲の手を思ひ出し投げ付け、をり重なりて首を掻き落せば、味方も城際にはや攻め近づく。塀の上を躍り踰えて、井戸龜右衛門、江見源三兵衛を撃ち捕つたりと、大聲を發してぞ名乗りける。城兵、敵を拒がんとす

るに、圖方を失し、戦ふに及ばずして逃げ散りければ、其の一つ首にて城すなはち陥りぬ。後人に對して、生得剛強なる者は世に希なるべし。我江見が首を取らんと云ひて、詞を違へざりしかども、縁の上を一二返押合ふまで、相撲の手をわすれ居たるは、是生得の剛強にあらずと覺えたりとぞ語りける。後に細川越中守忠興入道三齋に仕へて、祿二千石を受けたり。増田藏人と知音たり。是れ増田が父死するに臨んで、深く頼み置きしに依つてなり。増田は祿六千石、家つねに困乏にして一金の貯もなきことあり。井戸、度々諫めけれども、尤と請けながら更に其のしるしなし。増田、一年江戸に往きて歸る。井戸歸路をはかりて上り、桑名にて行き逢ひたり。歩者の健なるを、十人許りつれて馬を乗り立て、通る。増田見て何故に今江戸には赴かるゝぞと、問ひければ、頓てはななくしきことを見すべし。一言の間も惜むぞ。その故は早く小倉に至りて問はれよと、云ひ捨てすぐれば、増田、馬を引き返へし井戸が跡にのりつき、日來の知音は此の時なり。ひそかに我には告げられよとて、従僕は皆あとにさけ、只一騎一里ばかり慕ひ行く。井戸、その時馬より下りて片時もさきを急げども、此の上は申すべし。大坂に色を立て候。君も近日御出船あるべしとの陣ぶれありと云ふ。増田大に驚き、此れ少しのたくはへも無きことは、貴殿の豫て知るところなり、何として人並に出陣をすべきや、殊に江戸もどりなれば、小倉に行きつくにも金銀足らざるほどなり。唯

茲にて腹切らんにはしかじと云ふ。井戸つねに軍役をかゝじ、君の祿を空しうして、又こゝにて犬死せんこと、何の益ぞやと、従者を扶持する儲へなくば、只一騎敵に遭うて撃死せられんまでぞ。然れども死して人に笑はるべきのみ。加々山隼人は貴殿と同じ知行なり。兵船數艘、騎歩三四百人不日に打ち立つべき用意なり。貴殿これに劣らば、口惜しかるべきことなりと云ふ。増田せん所を知らざれば、惘然たるばかりなり。やゝありて、井戸その難義に迫りたる色を察して、さきの言は偽なり。然りといへども、天下已に亂のきさしあり。時安けれども危きを忘れざるを武備とす。夏日衣を製りて寒にそなへ、晴天に傘を張りて雨をまつ。凡そ物豫めせざれば、卒に應ぜられぬ理なり。明日にも此の變あるまじきに非ず。もし胃の緒をしめ、鎗の柄を握ること出で來らば、必ずかくのごとく驚かるべしと、強く諭戒しければ、井戸が爰まで來りし深思厚情を感じ、また其の言の切實なるを以て、終に驕を抑へ、儉を守ること三年の後、果して大阪の亂あり。増田六千石の格を闕かず、一陣を務めたるは井戸が力なり。井戸が勇は猶ほ及ぶべし。井戸が諫は及ぶべからず。井戸七旬にあまりて、弓を射ること毎日矢二三十。或る人その心を問ふ。井戸われ分まで鎗・薙刀・腰刀等は皆用いたたり。未だ弓をもつて敵を射たることなし。老後の戦ひ、手痛き働はなるまじ。せめて鎗脇を志すがゆるるなり。弓は聖作にて神威ありときけば、武藝の重器なり。一度用いたて

たくてのことぞと云へり。まことに武道に専らに、武職を知るとは此の人をぞ云ふべき。

伊賀は分國にて、郡主六七人たがひに相持し相敵す。信長これを攻むるときは力を合せて、これを捍ぐ。此の故に久しく信長の手に入らず。或る時、信長の將柘植三郎右衛門三千許りを卒めて、伊賀を攻む。勸行寺勘介と云ふ勇士あり。わづかに二三十人にて向ひしが、巖をつたへ、木陰をくぐり、鐵炮を以つて柘植を馬上より打ち落す。郎黨ども走りより、抱きのする處を又打ち落す。殘卒みな小笹原に逃げこもりたるを火を放ちて焼き殺せり。信長大にいかり大軍を起し、みづから伊賀を攻む。男女ともに撫で切にし、上野に城代を置きて、守らせらる。此より三年の後、分散したる伊賀の士千人ばかり相かたらひ、不意に推し寄せて、城代を斬つて又伊賀を取りかへす。信長、瀧川・六角二將に命じて、伊賀を攻めらるゝに、せいさいの塞に百人許り、ほろの谷に百人許り、或は百五十人、或は二百人、こゝかしこに潜居せり。二將兵勢盛なるを見て、せいさいの塞は退き去る。二將ともに一宿して明旦ほろの谷には石・大木を積み重ねて待ち設けたる處に、二將山七八分に攻め登るとき、巨石を轉ばし、大木を落とし、死人を以て谷を埋めたり。二將わづかに免れて、せいさいの塞に引き取りけるを、伊賀の士相計つて夜撃す。塞より出でて拒げば、さと引き、塞に入れば攻めよせ、一夜に七度まで夜討して、息をも繼がせざりけるに由りて、七度目には遂に二將を追ひ

落して、せいさいの塞を取り返しぬ。

河内士に名を顯はしたる遊佐左衛門佐と云ふものあり。攝津と河内と鄰疆たるによつて防戦止むことなし。中川瀬兵衛清秀が従兵木村七郎右衛門、守口の堤下を行くに、遊佐たゞ一騎物見に出でたりと見えて乗り來る。木村堤下より聲をかけて、不意に躍り出でければ、遊佐鎗を取り直すところを刺して馬上よりはねおとし、堤下に倒るゝと均しく押へて首を斬る。立ちあがらんとするに、敵七八人鎗を提げて進む。木村遊佐と戦ひて力疲れ、息喘ぎて勝負を決しがたし。然れども自ら勵み大に呼はつて撫切を始むるぞとて、堤の上に飛び上るとき、總勢あとより續きたり。敵これを見て引き退く。木村後に人に語りて惣勢つゞかずば童子にも討たるべし。遊佐が首を取りたるとき、させることにあらざれども、初度に力疲れ息喘ぎて、後には危しと云ひき。或る人の曰く、此によつて論ずるに、人の働き心得あるべきことなり。大軍と戦ふとき此の理を解せば、備配りを以て豈に擣とせざらんや。

尾張に木全と號する武士あり。信長の時、美濃境に一揆起つて、尾張の地を掠む。人數千あまり郷士二百三百づつ駈け合はせられたれども、備を固めたる中に、離々に足を亂して、馳せ入りければ、皆鎗だまに揚げられ、的に成つて射られたり。木全、手の者わづかに百許り卒ゐて、松の茂りたる

小山の中に入り、これを見る者、いかに木全殿、敵に遭うて山に籠られ候ふは何の意ぞ。味方をば救はずして、只一分の用心かと詞をかくれば、我等ごときの者は中へんに構へ候ふと云ふ。是れ一揆の勝つても負けても經るところの道筋なり。一揆十分に勝ち奢つて、彼の小山の下を引き取る時、半ばかりやり過して、一度に鬨聲を揚げば、山に響きて多兵のごとし。一揆不意に遭うて驚き躁ぐところを、十許りを三つに分け、一手はまづ松の間よりさか落しに突いてかゝれば、忽ち敗れ散ず。取つて返して戦はんとするところに、又一手、聲を擧げて駈け出づ。又一手、跡に續きて聲を合すれば、兵の分限はしらす、思ひもよらぬことにはあり、氣を奪はれて多く死傷す。殘兵は皆後を見ずして潰奔せり。是より木全が鎗にて、中へんに構へたりと云うて、時の人美號す。

謙信家の士斑鳩平次と云ふ者、浪人して諸國を巡る序に、加藤清正の將庄林隼人が所に立ち寄りたり。清正其の武功を聞き及んで鈎引せらる。隼人問うて曰く、當家に仕へらるべしや。平次が曰く、願ふところなり。隼人が曰く、祿の多少いかん。平次曰く、わづかの俸米にて足りなん。隼人平次は謙信家にて二千石餘の身上なりときけば、今の詞誠しからず思ひ、強ひて其の分限を定めんと云ふ。平次、謙信家にて功勞を積み、とりたる祿を當家に來りて未だ少しの功勞もなきに舊祿を銜ひて、自らむさぼることは謙信家にて曾て聞かざることに候。まづ無足にて召し出され、此の後、

戦場の首尾を合せ候はゞ、一度の鎗を五百石に定められて下さるべし。是れみだりに與ふるにあらず。空しく受くるにあらず。追首等は勿論その數に入るべからずと申せば、面白きのぞみなりとて、其の願ひに任せらる。朝鮮陣中に衆に抽んでたること七度ありて、三千五百石に取り揚げたり。平次、若き人に對して武士の働に一つの習あり。此の武功によつて名譽を取り、榮貴にほこらんことを慮り、其の餘慶を子孫に遺さんことを料るの欲心あれば、勝れたる働はならざる者なり。かならず戦場に臨むごとに、此を死所なりと思ひ定めて、身命をかへりみざるときは、自然に武功となる。利害存亡の思按をして見合せ、聞き合はする間に、手後れに成りていつも人にさきを超えらるゝ物ぞと云ひき。

結城と多賀谷と郡縣をあらそひて、年々相戦ふ。そのころ金井善立とて、越後の上杉三郎に仕へたる士なりしが、景勝、軍に勝つて後、日光山に引き籠りてぞ居たりける。年は七旬にあまり、二三十度の場數ある老功の武者なり。結城これを招きて崇敬せらる。一日多賀谷方よりかつ田に出づるを、結城の士、聞くとひとしく駈け付け十餘人討ち取りけり。善立、一番に出合ひ、取りたる首を手に提げて、結城の傍に候す。結城見て憚ばざるの色あり。壯士段々に首を持ち來りて一、二を記す。結城家軍法正しきが故、二番と記さるゝ者、臣は二番なり。一番は善立にて候と云ふ。結城、

善立を責めて今其方を扶持すること、上杉家に於て弓矢の功者なれば、我が左右にありて、若輩の者どもを下知し、詞を添へ、力を付けて功名をもさせらるべきためなり。今日の一騎働き、大に義にあたらす。其方二三十度に及んで、世人に知られたる武名あり。おとなげなく是れ程の小事に先を争はる者かなと氣色を損じて規されければ、善立謹んで跪づき、仰畏まり入り候。さりながら臣が所存は此に異なること候。少しの心馳ありと申せば、古主上杉家にてのこと候。他家の功を街ひて、當家に賣り候事は士の道に背けり。臣七十有餘、まことに若氣に相似候へ共、當家にては今日初陣に候。是を以つて、たゞ手をふさぎ候はんと存じ候ひつるに、不慮によわ者にわたり合ひ、首を捕りたるにて候。かさねては仰にこそ隨ひ候はんと申しければ、結城大に嘆美して、士たる者の鑒なりと云へり。

藝州吉田の城主毛利右馬頭元就、始めは僅に三千貫を領し、尼子民部少輔晴久の旗下なりしが、晴久に疑はれ、不和なるにより、大内介義隆へ従ふ。晴久大に怒つて、出雲・伯耆・因幡・備前・美作・備中・備後・石見・安藝半國の勢五萬餘騎を卒ゐて、吉田の城を圍む。大内家より後卷として大將陶五郎・副將笠井帶刀・左衛門尉、其の勢一萬餘騎にて出張し、山田山中に陣を取る。天文十年正月十三日、陶方より尼子晴久の本陣青光井山へ相働くべき由、尼子方にもこれを聞き付け、其の調略を

なしける。陶陣と尼子陣との中間に大河あり。其の河の本渡の道筋をもつばらに、尼子方よりありのまゝの人衆を悉くさし下し、段々に備を立て相待つところに、按外に陶人衆は陣所より南の山陰に下し、遙に廿町許り川上へ登り、大將晴久の本陣宮山を目にかけて一文字に切つて掛る。尼子の總人衆は遙かなる麓の本道筋へ下し掛けて、旗本無人なりければ、晴久一命危きところに、伯父尼子下野守切つて廻はり、敵數十人切り伏せぬるゆゑ陶が勢、一、二町ばかり退く。又笠井帶刀・左衛門正盛荒手を入れ替へ責め戦へば、つひに尼子下野守、討死して晴久あやふく見えしが、麓に下し置きたる大勢、此の趣を見付けて、片時ばかりが程に、本陣へ取り上り、陶方の大勢と、さんぐに攻め戦ふ。鎗下に陶、被官、深野、宮川以下宗徒の者共十餘人討死す。しかるところに、元就大勢にてかけ合はせ、兩方より入り違ひ、ふせぎ戦ふほどに、尼子方の大勢方々へ退散す。晴久かくの如き上は在陣成りがたしと思はれけるが、其の夜ことごとく敗北しけり。此の防戦に、大内家より大將陶五郎若きものなるゆゑに、笠井正盛を功者なればとて、相副へらる。正盛が籌策によつて、本道より向ふべき體を示して、脇道よりかゝりけるゆゑ、即時に大軍を敗北させたり。元就小勢たりといへども、名將なるによつて、大軍を引き請け、よく籠城して運をひらきたまへり。茲によつて備中、備後、安藝、石見、多分大内家へ従へり。

毛利元就、すでに九箇國を切り従へて、石見を攻むること數年に及べども、未だ手に入らず。石見は山國なるによつて、よき要害に小壘をかまへ、壘を攻むれば引き籠り、師を旋せば付き慕うて屈服せず。赤松家籌策の臣たりし安積宗澤と云ふ者、年老いたるによつて仕へを罷めて、明石に幽居す。宍戸備前守隆家これを聞きて、招待すれども、生質愚昧の上に、又老耄を添へたれば、召しに應じて参りたりとも、無益のことに候とて來らず。宍戸猶ほ宗澤が聞達に心なきことを、奥深き者に思ひ、みづから明石に行き、宗澤方に至りて殷勤に請ひければ、此の上は辭するも却つて人がましく非禮に候とて、打ちつれて廣島に來る。宍戸かくと申して元就對面せられ寵遇すからず。ある時、夜話の序に、石見は小國なれども、我が士卒の死傷するばかりにて、今において命を聽かず、地の利によつて人の心剛し、何なる奇策ありて切り取らんやと問はれければ、宗澤命のごとくに候はゞ、なほ十を以て一を攻むとも容易く勝つことを得がたく候。治には慮り亂る。亂には慮り治むと申す軍識の語を御存じなきやといへば、元就手を拍つて尤なり。石見は早や我が有と成りぬと欣悦斜ならず。宍戸と謀つて、石見の巨酋星合と云ふ者を姪婿として親昵を結ばれければ、星合ほどなく歸服す。星合が領地五萬石餘は皆沮み拒ぐに及ばずして、半年にも過ぎず石州ことごとく従へり。赤井悪右衛門は本小身の士たりしが、武略をもつて漸く盛になりて、後、丹波半國を領す。但馬



の比賀美に一將あり。二萬石ばかり、驍勇にして而も要害の地を前に當てて拒ぎければ、赤井攻むれども利あらず。赤井古の兵書を読み、地を攻めて人を攻めずと云ふ語あり。是に心を得て、彼の勇將を要害の地よりおびき出し、一戦に大勝してその首を斬り、其の地を取る。

近江の姉川合戦に、朝倉は淺井を助け、源君は信長を救ひたまふ。源君の先手榊原小平太康政、酒井左衛門尉忠次、信長の旗本に使を立てて、戦場の地利あらず候。左の方にめぐるに便ありとて、田間の細道を行くに、信長十騎ばかりにて乗り來り、敵を前に置きながら物詣の如く細道を並び行くは何事ぞと怒られければ、酒井が家人石原寸度右衛門と云ふ者あり。未だ戦はざるさきに泥田に入らんこと何の益か候はん。信長の先手は家康なり。家康の先手は酒井なり。酒井が先手は不肖なれども、此の寸度なり、只先手に任せらるべしとて、耳にも聞き入れず、戦に及んで敵酒井が横合に進むを見て、人衆を立て直すところに、榊原、田の中を一文字に切つてかゝる。敵又此に立ち合はんとす。酒井大に呼んで衆をいさめ、兵を縦ち撃つて朝倉を敗る。

此の合戦に信長は三萬ばかりの大軍十三段に備へたるを、長政四五千の小勢を以て切り崩し、信長の旗本まで追ひつめたり。義景一萬餘にて控へたるところに、源君、自ら精兵五千を卒ひてこれを撃つ。源君の先手と互に挑み戦ふ。信長の總軍敗れ走るとき、長澤藤藏斥候に往きて敵の虚を見

る。馳せ歸つてかくと申せば、源君すなはち先手の勝負にも目をかけず、二陣三陣の間を絶つ。義景の兵うら崩れして追ひ討ちにあへり。長澤が敵の虚を見たるとは、義景味方の勝を見て、先手力戦すれども後を推しつめず、備へ間遠になりて驕形怠氣あり。長澤これを見る。源君、直に二三の間に蒐けて大勝あり。後將此を以つて警戒とすべし。此の時信長、感狀を源君に與へらる。其の文に曰く、

今度於江北拔萃之功、雖十樊噲百張良不可同日而語也、誠爲當家之綱紀、武門之棟梁者也。

豊臣秀吉は天運に乗りたる人なり。織田信孝、岐阜の城に據りて秀吉を拒む。柴田勝家、信孝と通謀して曰く、堅く岐阜を守れ。秀吉かならず來り攻めん、我柳瀬より塞の後を廻つて、前後より挟み撃てば、一戦にして其の首を見んと約を定む。秀吉これを知らず。已に岐阜を圍まんとする處に、其の夜甚雨瓶水を瀉下するがごとし。呂久・郷戸二川、俄に激浪滔々たれば涉ることあたはずして川の此方に陣す。勝家、柳瀬を出づれば、秀吉川を涉らざるに岐阜を捨てて、すなはち柳瀬に赴く。浩水のゆゑに信孝、後を陥みて尾撃することあたはず。勝家の謀は却つて自ら不意に遇ふの端となれり、是れ天甚雨・浩水を以つて秀吉を祓くるなり。

凡そ大國あまた討ち取り、又天下の主となる者、義なきときは、其の碩功成りがたし。明智光秀

叛きて織田信長を殺せり。豊臣秀吉弔合戦と稱して諸將これに與しければ、不日に明智が首を獲て、遂に天下を掌に運らす。陶尾張守隆房（後、改めて晴賢と號す）其の君大内義隆を弑せり。毛利元就、義を唱へて叛逆を討つ。道ありければ、兵衆多く元就に附屬し、隆房をほろぼして十餘州に主たり。然れども是れ皆一日義の名ありて義の實なし。義の名あるも、なほ向ふに敵なきがごとし。若し始終義の實あらば、天下は定るにも足らずして、子孫に永く榮盛を遺さん。彼は是よりまさると云ふばかりにて、同じく其の心根は不仁不義の將なれば、何れを是とし、何れを非とせんや、其の中に元就は秀吉に比倫すべからずとある人の語りしは宜なる哉。

佐久間玄番盛政、志津嶽に向ふ時、中川瀬兵衛清秀の取出、昨今なれば、塀土も乾くべからず。これを攻めば定めて塀越の鎗ならん。十文字鎗などは此の時に利少かるべしとて、皆長柄の數槍を諸手に配る。按に違はず塀越の鎗ありて、長柄に利を得たり。玄番が家人に老功の武者あり。玄番が前に来て、中川は勇をこのむ將なり。敵よすると聞かば、坐ながら待つべからず。必ず中途に逆へ戦はんに、弟久六安次・源六正頼いまだ若輩なり。たとひ勇ありとも入り亂れての戦は、進退合離の節打ち任せがたし。間道を歴て、寝小屋を焼かしめよ、中川火を見て、跡にたゝかひありと思ひて、引つ返さば、道に伏兵を置きて討ち捕るべしと云ふ。神戸兵右衛門をして久六・源六に相副へ

てこれを焼しむ。遂に中川を斬る。近藤無一と云ふ者、その首を獲たり。老功の武者の謀はたがはざりき。

柳瀬にて中川瀬兵衛撃死すれば軍中躁動し、所々の付城ども保ちがたき體を見て、神子田半左衛門大音聲にて、明日秀吉大軍を帥ゐ來りて、此の急を救はんとす。人々かたく守りて少しも氣を喪はざれとふれまはりければ、落支度したる者、此の一言に勵まされて怵へたり。神子田が當意の計策なりけれども、明日秀吉果して馳せ來れり。秀吉中川が討死の註進を聞きて、玄番は引き取りたるかと問はれけるに、いや本の陣に候と申す。秀吉聞きもあへず、腰刀を抜いて額に當て、八幡合戦は勝つたるぞと、五六度ばかり跳りあがり、馬ひきよせ、ひたと乗り、たゞ一騎かけ出で、道々我は秀吉なり。必勝の謀ありて速かに馳せ向ふぞ。追々來らん軍兵共に食物をあたへよ。是れ我に志を歸するの驗ならんと呼びく、打ち過ぎられければ、跡より一騎がけに追ひ付く者終夜引きもきらず、其の邊の庶民粥糝などを煎て、持ち出であたへたり。此の時黒田官兵衛孝高壘を守つて、敵つよく攻めて味方の援なくば鬪死までぞと思ひ極め、家臣栗山四郎兵衛を呼びて、汝は吉兵衛を具して、此を通して、我が後嗣を絶つべからず。吉兵衛僅に十歳あまり、虎口を避けたりとて、家の瑕となる理なし。却つて我が深慮ありとせんと云はれければ、栗山辭すれども、今吉兵衛を無事に

のけたらんは、此所に留まつて討死せんよりは百倍の忠節なり。此の時移るぞと急がるゝによつて、栗山已むことを得ず許諾し、吉兵衛を先に立てて、行く事一里許りにて、吉兵衛、我をば何方に具するぞと問はれけるに、栗山爾々と答ふ。吉兵衛聞くより早く父君を離れていづくにか往かん。武士は北ぐると云ふ事のなきものぞと、父君の常に教へ玉ひしものをとて、乗りたる馬を蹴たて、轡を引つ返さるれば、栗山まことに父の御子かなと感涙を流し、従ひて壘にかへる。希代の譽なり。便ち是れ黒田甲斐守長政なり。

相模の小田原の役に、堀左衛門督秀政先づ人を遣はして伊豆、相模、駿河、遠江にて牛數十頭、買ひ置きたり。秀吉箱根の嶮路にかゝるとき、秀政牛を以て糧を運ぶ。他の軍は是に迷惑すれども秀政獨り豫備したるがゆゑに患なし。ある夜、風雨はなはだしく、天地暗し。秀政の曰く今夜必ず盗あらん。我が士卒の馬、鞍、兵糧等盗人に取られんより、其の怠りを窺ひて、我みづから取るべしと、士卒此の言を聞いて寝る者なし。其の夜三度陣中を巡邏す。他の陣は多く盗みにあへども、秀政の陣は盗入ることを得ず。

秀吉二十餘萬の大軍を督攝して、北條氏政、氏直入朝せざるの罪を討つ。天正十八年三月下旬、沼津に宿陣す。小早川左衛門佐隆景の従兵、河田八助、檜崎十兵衛とて大力の名をあらはしたる者あり。

八助は大指物、十兵衛は十八端の母衣を掛けて通る。秀吉はるかに見て、使番を以て其の姓名を問はせらる。命を承けて乗り付け、馬上より主將の仰せに候。おのゝ姓名を申されよと云ふ。二士願みて返答なし。力及ばず。馳せ歸りてかくと申せば、秀吉さては汝下馬なくて名のれと云ひたるならん。御教書など帶するか、兩陣勝負にかゝる時か、其の折には佛神の前にも下馬せぬ作法なり。さなくては何ぞ人に勝れたる大指物をさし、普通に超ゆる母衣を掛けたる士に下馬なきは無禮なり。返答せぬこそ理りなれとて、餘人を以つて下馬して問はせらるれば、二士も又下馬して各々其の姓名を云ふ。其の後、朝鮮陣の時、この母衣指物は異國の者も目を驚したりと云へり。

秀吉兵五萬を分けて、まづ山中の城を攻めさしむ。秀次將たり。戌將松田兵衛太夫、援兵北條左衛門太夫、間宮豊前守、朝倉能登守これを守る。城兵大手より突いて出で、鎗をはじむるところに、左衛門太夫氏勝が従士、渡瀬小次郎助と名のりて、只一騎真先にすゝみ、茜染の袖なし羽織を著、金の切割の幣を腰にさし、其の上に白母衣をかけ、直鎧をよこたへて來るを、少將秀勝の家士、三宅平太夫、黒糸の鎧を著、小田原臈の星鉤に風車の立物にて、衆を抽んで坂中に於てわたり合ひ、たがひに詞をかけ、渡瀬は坂の上、三宅は坂の下より鎧をまじへて勝負を決す。三宅、渡瀬を撞き伏せ、短刀を抜きて首を掻き、味方の陣に五十歩ばかり引きけるが、母衣を添へてとらざるを後れた

りと思ひ、立ち歸りてつひに母衣を取つて來れり。三宅が二十三歳の時なり。秀勝の前に首を持参し、其の首尾を申せば、一番鎗と云ひ、物頭の首と云ひ、もつとも比類すくなしと詞の褒美ありて、秀吉の本陣に行かしむ。市橋下總守披露す。秀吉の前に召し出され、首帖に記さるゝに、秀勝には一番、總軍には三番なり。されども物頭の首に母衣を添へたるは是れ始めなり。秀吉感ぜられて金錢をたまふ。秀勝には大和當麻の鎗、并に黄金十兩をあたへらる。其の後一番鐘の感牒を出し、祿をまして一部の將にせられたり。

山中の城を攻むるとき中村式部少輔一氏、從兵數内匠は、度々ほまれある剛の者なり。一氏の手よりは一番に城下に附きたり。されども本陣遠きによつて秀吉これを見ず。其の跡に藪が友、渡邊勘兵衛鳥毛の半月の大指物をさし、黒の馬にのり、只一人、山の尾崎より城に乗りけるを、秀吉見て何者ぞと姓名を問はれて感稱にあづかり、武名を挙げたるは、大指物の故なり。或る人曰く、戰場には必ず軍事に監たる役ありて、戦畢りて後に、その主將諸手の別將と證を正し、例を引きて功名の品を論じ定めて、少しも偏頗なからしむ。然るに目に見るところのみを取つて、見ざる所をつまびらかに問はざるは非なり。これより下に戦功の實は少くして、節を飭り、名を售つて豊祿を得るに至る。若し正を以て士衆を帥ゐ、嚴を以て軍令を定め、虚名を措きて實功を挙げ、言辯を捨て、

行事を取り、上下枉げず、欺かざるの良將あらば、縦ひ倍々の人數なりとも、共に鋒をあらそふべからず。運に乗じて幸ひに勝つ者を則とする事なかれ、是れまことに軍事のみにあらず、州牧の治世に、下を御するも此の如くならずば其の國虚偽多くして武士の風俗廢れなん。

小田原の陣を攻むるに及んで、北國の兵士に強弓あり。城兵その矢にあたりて死傷する者多し。城中より傳へ聞く鎖西八郎爲朝、能登守教經も此の弓勢には増さらじ、とても事の面に其の面を見ん。今一矢とぞ旬りける。秀吉さらば射よとて、小高き所に立ち顯はれ、大弓大矢束滿引する處を、城上の女垣銃眼より二つ玉の鐵炮にてあへなく打ちころす。秀吉大に激怒して敵は軍の法を知らざるやと、射書を以て譴誚せらる。氏政これを知らず非義の至りとして、鐵炮を放ちたる者を斬つて、その首を秀吉へぞ送られける。

卷之三

秀吉小田原を攻むること數月にして抜けず。秀吉諸將の心を試みんために師を旋さんや否やと問はれければ、小早川左衛門佐隆景今師を旋されなば、氏政勢ひを得て復圍むるとき、守禦猶ほ固から

ん。謀を以てこれを攻め陥さんにしかじと諫めければ、秀吉本より其の心なる故に隆景を稱せらる。二十餘萬の兵を三手に分けて、一手を以て城に對して營陣をつらね、攻戰を罷めて軍備を堅うす。二手は間暇の體を示す。城中これに氣を屈す。宇喜田宰相、秀家の攻口は岩槻の城主北條十郎氏房これを拒ぐ。秀家城中に矢留を請ひて、使者を以て南都樽三荷、生鯛十尾を贈つて、貴君久しく守るの劬勞言ふべからず候。今贈るところの酒肴は此を以て士卒を慰められんことを欲す。貴君の守計、古の良將にも愧づべからざるのみ。今日好みを通ずるとも、明日攻撃の時、鄙生を斬らん者は貴君ならん。貴君を殺さん者は鄙生ならん。是れ私の憤あるにあらず。各々其の主の爲めにする故なりと云ひ遣しければ、氏房その志を感ず。氏房も亦使者を以て伊豆江川酒を秀家に贈つて報謝す。此より後しばしば使を通ず。秀家氏房に面談せんと欲す。氏房これを聞き、たがひに長陣の患困を云ひ、其の後面談して秀家ねがはくば和議を調へられよ、若し然らば京都において貴君を享し、具足胄を脱いで肩衣袴にて好會をなさば豈に樂まさらんやと云ふ。氏房同心して和議を調ふるに皆承引す。ひとり北條美濃守氏規のみ是れ秀吉の謀計なり。今成ぎを行はゞ、始めより戰はずして降るべし。敵を引き受くるほどならば、此の城を以て葬りの地とすべし。面々云ひかひなく擒と成りて、見苦しき死をせんと云ふ。氏規垂山を守るとき、敵外郭をのりとり。氏規自ら奮ひたゝかひて、

其の日其の時これを取りかへしたる驍將なり。氏政・氏輝截腹し、氏直高野山に趣き、小田原没落す。秀吉、氏規の勇義を感じて七千石をあたへて酒茶の料とす。其の子久太郎にも別に三千石を興へて近仕せしむ。氏規死して久太郎合せて一萬石を領す。徳川の御世に至つて北條の子孫此れを以て相續けり。

伊達左京太夫政宗二十四歳、小田原の陣に來りて臣従せんことを求む。諸將只今せむる氏政を患へずして、小田原陥らば其の次はかならず陸奥を征伐せられんと、却つて政宗を患へたる折ふしなれば、皆これを悦ぶ。秀吉おもひのほどに遲參を怒りて、政宗が胸中を商量するに、我と氏政との兵勢を規ひて、我よわくば來らじと密に人を付け置きたるところに、氏政の諸壘陥れられ、小田原も又抜かれんこと且晡にありと聞いて、今此に來るならん。實に心服するに非ずとて、使を以て責められければ、政宗敬屈の過ちを謝す。二三日すぎて秀吉具足羽織を著、牀几に尻かけて禮を受けらる。政宗拜謁して退かんとする時、秀吉遲參を惡むといへども、對顔を許すの上は念に止めず、此まで遠來の馳走に陣營を見せん。後の山に登れとて、先に立たれければ、政宗跡にしたがひて山に登る。奥州に於て小迫合には馴れたりとも、大合戦の人衆配りは未だ見るべからず。爰の營は此の理なり、かしの陣は此の意なり。見置きて手本にせよと一々指して教へらる。秀吉刀を政宗に

持たせ、童子一人具し、片岸に立ちて終に後を省みず、政宗を蠢蟲とも思はれぬ體なり、政宗後に、我小田原において秀吉に謁せし時かゝることあり。其の時たゞ恐れ入りたるばかりにて一念の害心起らず、大器にして天威ありし人なりと語られき。

太田三樂齋小田原の攻口にあり。松田尾張守が手を見て異心ありと云ふ。此の時、松田すでに秀吉に誘かれて内通す。三樂これを知らずして其の言當れり。秀吉これを奇みて曰く、何の見る所ぞ、三樂が云く松田が勇謀、人の恐るゝところなり。今日軍備を正さず、諸卒をいましめず、役所を巡らず、かれ素より臆すべき者にあらず。心を味方に通ずるが故なりと。秀吉嗟嘆して、源君に對して曰く、今此に二つの不思議あり。これを知るや、源君の曰く、一つは三樂ならん。二つはこれを解かず。秀吉の曰く、我匹夫より起りて天下に主たり。三樂が知ありて一國をも有つことを得ず。これ二つの不思議にあらずや。

明智光秀、山崎合戦に敗れて已に討たれたれども、明智左馬助は坂本の城に入りて猶ほこれを守る。秀吉將に命じて、かこみ攻むること急なり。城兵散亡して、やがて陥りぬべく見えければ、明日諸軍一同に四方より攻め入らんとす。入江長兵衛一番乗を心掛けて、曉方より屏下に附きて、明くるを遅しとぞ待ち居たる。左馬助櫓に上り、狭間の板を細めに披きて、見下しければ屏下に人あ

り。敵か身方かと怪むところに入江なり。入江は日來相識りて、したしかりしに由つて、如何に入江殿とこそ見て候へ。此の城陥り、我が身死せんこと今日を限りに候。末期の一言を以て願はくば貴殿に遺さんと詞をかくる。入江、櫓の上をきつと見て、さ承はるは明智殿か、何事にて候ぞと云ふ。左馬助鐵炮を以て貴殿をうたんことはいと易けれども、勇士の志を感じて止むのみ。我少かりし時より、戰場に臨むごとに、魁殿の功を心として、武名を揚げんと勵みたれども、畢竟是れ身を殺し、子孫の後榮を思ふにあり。然れども天命ちまるときは今日の吾なり。生前いくばくか危阨を侵し、艱苦を嘗めたるも、終に成るところなくして此の如くなりぬ。貴殿も亦かくの如くなるべきのみ。同じくは仕へを罷め身安きに處て危きを踏まされ。我貴殿に黄金を與へん。これを恒の産にせられよとて、三百兩入りたる革袋を投げ出す。昔三百兩は今の三千兩にもまされり。入江、其の詞を然りとして、軍はてゝ後、仕を罷め、京師に引き籠つて貨殖し、富家となり、歡樂を極む。然れども武夫の本意にあらず。

山崎合戦の時、高山右近薙刀の鞘を脱し、牀几に腰を掛けて、未だ兵刃を接へざるところに、高山が従士甘利と云ふ者、つねに寵遇なくして、末座にのみ居たりけるが、高山が前に來りて跪き、爰に兩義の決しがたきことの候。恐れながら尊公の判断を承りたしと云ふ。高山何事ぞ。甘利、勇

智の名ある者は、遠國、他家にあるをも傳を求めて招き來し、高知をたまはりて恩顧悱からず。況んや本より御家の子は、尊公の千城になるべきとだに御覽付けられ候はゞ、人並の御詞をも掛けられ候ふべし。小臣人數ならぬ體にて捨ておかるゝは、させる御用に立つまじきと思召すによつてなり。小臣今敵を斬り陣を破り候はゞ、御目がねに違ふこと是れ不忠にて候ふべし。又蒐るにおくれ、引くに先だち候はゞ、武士の名を失ひ、父祖を汚さんこと、是れ不孝にて候ふべし。不忠と不孝との罪、二つのもの、いづれ重からんと按じわづらひ候と云ふ。高山つらく見て應へず。敵合すに近くなれば、甘利たとひ不忠の罪ありとも拾ひ首にても仕り、手をふさぎ候ふにおいては、させる御惡みもなからんか。怯弱不孝の罪は重ねて補ひがたければ、彼を捨て是を取り候とて、衆をぬきんでて先登し、高山家の一番鎗を合はせ、冑首を獲たり。又明智光秀、敗軍すれば北ぐるを追うて、光秀が甥明石儀太夫を討ち取りたる剛の者なり。直諫するの時にあらざれば、漫に君の非を言はず。甘利が言はまことに無禮なり。然れども其の無禮を尤めて自ら反せずんば暗君なり。

長篠合戦の時、諸卒武田の武威を惶れて勇める氣色なし。源君、盃を出し興をもよほして、酒井左衛門尉忠次を召して、蝦すくひの狂言を仕れとありければ、即ち立つて是を爲す、忠次もとより上手なるによつて、座中咄とわらひ、鬱も開き、屈も伸びる、其の競ひをぬかさず軍の評議を定め

らる。本多・神原等美方原の證を引いて、合戦あやふからんと申せば、源君、昔は信玄なり。今は勝頼なり。必ず憂へなげんと仰せられしが、勝頼果して大に敗れて、此より武田の武威衰へぬ。

勝負の理少しの競ひ後れあり。長久手の役に、源君、討ち勝ちたまへば、秀吉の師おそるゝ色あり。秀吉衆を督めて出で戦はんと、勇め立てられければ、衆奮激の氣を生ず。源君の兵、秀吉の目に餘る大軍を見て驚きたる體あり。源君、明日軍中に令して馬揃へをしたまへば、味方敵を呑むの心を起す。良將の爲るところ知んぬべし。

秀吉越中の牧、佐々陸奥守成政を攻めらるゝに、前田肥前守利家前鋒たり。成政兵をつかはして逆へ撃つて、利家の先手を敗る。利家これを見て我が先手の將追ひ立てらるゝとも、必ず返さん者は山崎庄兵衛なるべしとて、自ら親軍を帥めて競ひかゝる敵に駆け向ふ。庄兵衛後に名を長門と改む。剃髪して閑齋と號す。親軍間近くなりたるとき、按の如く、山崎、馬の頭を旋し、勝ちほこりたる敵に當り、たちまち切り崩して追ひ討ちにす。利家山崎を呼びて、今日汝がちからを以て勝利を得たり。然れども何ぞ返すことの遅かりしやと、問はれければ、山崎、臣も速に返し合はんと存じ候ひしかども、道廣くして親軍遠し。返したりとも、士卒恐るゝ氣ありて戦危からん。されば十分に引つけてと存じ、左右に目をくばり候ふところに、幸に田間道細くて兩方泥深く見え候へば、

敵、兵を分けて引き包むに便りあらじ、親軍すでに近づきて、將士色を直したるしほあひを料り、聲を勵し旗を還して、君の威を以て切り勝ちたるに候といへば、利家、汝兵を用ふるの味ひを知りたること我に勝れりと稱美せらる。山崎が差物は銀の菖蒲なり。

佐々成政、一萬許りの人衆を率ゐて、能登の末守の城代奥村助右衛門を攻むること急なり。前田利家邊報を聞いて、七尾より四千餘を卒ゐて後援たり。利長も出であはれぬ。利家、戸田與五郎を使として原彦次郎・不破彦三に告げて末守に來らしむ。戸田、深夜まづ原が宅に到つて、しきりに門を叩けども、門番熟睡して起きず。時移るばかりにて門を開きたり。利家の命をつたへて、又不破が宅に至る。不破早速出であひ、心得候ひぬと返答す。戸田それより馬を早めて利家に追ひ付きたり。利家、汝壯男、何ぞ遅かりつるぞと責めらる。戸田謹んで原が門を開けざることを云へども、利家聞かれずして怒られければ、戸田、心中に悪しき使にさゝれて辱められぬ。今度一番鎗して責めを塞ぐか、討死するか、二つの間ぞと思ひ定めけるが、果して一番鎗を合はせければ、利家加増をあたへらる。是れ利家、士を激勵するの術なるべし。激勵と慰勞と俱に用ふるは士を御するの道なり。成政は利家神速の後援に遭うて敗軍す。此の時本多三彌正重、武者修行して利家の備へを借りて居たりしが、利家逃ぐる士卒を制して部伍を固めらるを見て、三彌馬を乗りよせ、高聲に

恐れあることながら勝に乗るに如かずとは此所ならん。敵崩れたちて一足を返さじ。御下知あるべきことなりと云ふ。利家、汝何を知らんとて大に罵りて、つひに城に入り兵を收む。是れ勝を残りし師を全うするの意なり。成政軍を引いて後、利長に語るべき事ありとて、同道して七尾にかへり、飯酒畢つて利長に向つて、我三彌が諫めを用ひざること思慮あるゆゑなり。凡そ武者修行の者は、己が功を立つるを主として、實の忠なきものなり。己が一言を以て敵を逐ひ拂ひ、大利を得たりと他家の譽にせんためなり。縦ひ我負けても三彌が負けにならず。假合の徒なるに由つて三彌が身に損なし。其の上一昨日、末守の城を圍みたるに、今朝後援に赴きたれば、飛脚道の往來を考へても、我が兵三四千に過ぎじとは知るべきことなるに、其のつもりなきは成政が失なり。一旦は不意に遭うて敗れはしるとも、成政が志を料るに、如し又後援人衆少なる事を知らば、吾追はずとも彼返すべし。況んや急に追ふときは總返しにかへさん。返されては必定、我が師の負なるべし。是を以て追はずと語られぬ。

長久手の戦に、秀吉は十萬餘騎を領して青塚に陣し、源君は二萬五千餘騎を督して小牧に陣す。秀吉の前鋒森武藏守長一は信長の愛童森蘭丸が兄なり。猛勇の名ありて、時の人、鬼武藏と號す。羽黒に陣せしが、其の先手間遠に備へたり。酒井左衛門尉忠次これを見て、武藏が先手味方をはな

れたる將も部下も兵法に鍊れざるものなり。今これを撃つて、鬼武藏と云はるゝ者の鋒を挫かば、身方勝利に乗つて、敵銳氣をうしなはん。今少し御旗本を寄せられれば、臣が手勢を以て衝き崩し候はんと、源君に申しければ、即ち望み請ふに任せらる。左衛門尉、衆に向つて首を取ることもなかれ。斬り捨てにせよ、白旗を挙げば、軽く引いてしたるく敵を追はざれと、軍令を定めて静々と切つてかゝり、武藏守が先手を撃ち取つたり。武藏守怒りて、駈け向へば、左衛門尉已にはや引き取りぬ。武藏守齒を切めども力なし。是を以て備配りの心得、前後相すくふの便りを辨ふべし。

秀吉小幡に赴くとき、本多平八郎忠勝、八百ばかりをひきゐて、山に傍うて道より向ひを相弁ひて行く。秀吉無類の勇將かな。なんぞ彼が小勢を以て我が大軍に當らんや。撃たば討たんすれども、助け置きて、後を見んとて是に取りあはず。後、忠勝此の事をつたへ聞きて、秀吉と共に鋒を争ふべきに非ず。然れども我を討たんとならば、大軍を引き受け、三度も四度も衝き卻け、せり合ひ、時をうつすべし。其の間には、先の合戦已にをはりて、秀吉、後至るとも利なからん。吾これを慮るが故なりと云へり。忠義勇烈兩つながら備はりたる人なれば、源君の恩遇、他に異なるも理りなりと覺えたり。

長久手の戦に、鳥井金次郎は井伊兵部少輔直政の寄手の兵とあらそひ、進んで一番鎧を合はす。

平松金次郎は旗本の眞先きにて、一番鎧を合はせたり。これに由つて兩金次郎一二を論ず。源君、平松が鎧は我が眼前に見る所なり。誰か共に功を争ふべきやと仰せらる。鳥井、臣は兵部が手に屬きて前鋒にあり。兵部が備へと旗本とその間遠し。旗本にて鎧を合はせたる者、定めて其のはたらしき強からん。然れども一番をいはゞ、他に譲るべからず。臣なりと云ふ。汝鳥井、復言ふことなかれ。今日の鎧一番を已に平松に極めたりと仰せらる。鳥井重ねて武功は直を以て論ぜさせ給ふべきに、君ひとへに平松を最負し玉ふは何事ぞや。大軍諸隊の鎧、君の一身兩眼、ことごとくよく御覽じ届けらるべきや。其の見るも見ざるも公論を以てこそ一二を定めらるべけれ。徒に見る所を取つて、見ざるところを捨てば、明君と申すべきや。臣が今日の鎧は泥土に捨てたりと云ひて、其の座より出奔す。後、前田利家に招かれて、祿八千石を受く。又蒲生氏郷に仕へて一萬石を領す。

平松金次郎は生資驍勇にして外貌温順なり。或る時一友、平松を悪口することあり。平松こたへず。人皆恒弱なりと思へり。長久手合戦の前に、平松朱柄の鎧をこしらへたりと云ふ。人、相見て是を笑ふ。白柄の鎧を以て敵と鋒をまじへ、鎧に血付くこと度々に及んで後ならば、朱柄の鎧を持たせざる日域の武夫の法なり。平松、長久手に於て、旗本の前にて衆を離れ、獨り進んで一番鎧を合はせたるに、其の後へに繼ぐ者なし。これに由つて源君、新知二百石を賜ふ。平松衆人の

中に出でて、男子の勇とするところは只戦場の働きにあり。喧嘩を好むは下僕の業なり。我、今度長久手に於て年來出さざる勇を出せり。我が後にだに繼ぎたる人なし。人各々能あり、不能あり。我れ喧嘩には誠につたなし。敵と相合ふときは人より勝れぬと云ふ。是に對ふる者なし。祿少きがゆゑに平松不平を懷く。秀次これを聞きて一萬石を以て招かる。平松出奔して秀次に仕へんとす。源君、坂部權右衛門に命じて追うて、これをころさしむ。平松かへつて坂部を斬り退くところに、服部半藏、掛川の城番に代る道にて此の山を聞いて、組の鐵炮を引きつれ追つかけ、其の籠るところの村里を圍む。平松免れざることを知つて切腹す。

長久手の戦に成瀬隼人正成十七歳なりしが、敵軍に乗り込み、冑首を取りて源君の御目にかくる。汝は勇士なり。旗本の兵すくなし。先づ爰を守れと仰せられければ、御馬の前に在つて、息をつぐところに、先手の辟易するを見て、又駈け出さんとす。馬取、轡を執へて、すでに功名を遂げられたり。敵の中に入り、命をほろぼして何の益ぞやと云ふ。隼人大に怒り罵れども手を放さず、刀を抜いて胸打し、小利をむさぼり大義を失ふは武士の道か。今日の戦は敵やぶれ陣陥り、にぐるを追ひつめて後止むべし。名もしらぬ首一つに身をかへりみんやと、鞭うてどもあふれども猶ほ放たず。源君三十間ばかりにて御覽ありけるが、身方足をためかねたり。壯士の死戦すべき處は爰ぞ。

只其の志に任せよと仰せらるれば、馬取、其の時轡を放つとひとしく、眞一文字に乗り入つて又冑首を獲たり。東西を馳せ廻り、身方を恥ぢしめて、君間近く進退剛怯を御覽せらるゝ處に、黒く逃げ走りては、何の面目ありて、後人に見えんやと勵まされて、引色なる者も蹈みとめ、進める者は愈々いさむ。源君、其の年の暮に根來五十人を預け玉へり。隼人が長久手のはたらきは宿將老師にも愧づべからずと感仰せらる。徳川家、十七歳、將と成りたる者は隼人のみ。

美方原の戦に、參河の師敗れければ、甲斐の兵、跡より急に追ひかくる。源君、馬を引き返し自ら追騎にあたらんとしたまふ處を、夏目長右衛門、大將の身を捨つる所に非すと諫むれども、猶ほ鞭打つて進ませたまへば、夏目馬の轡を執りて、身方の方に口を引き向け、鎗の柄をとりつて、馬の三頭を叩けば、誤りて其のあまり、源君の御冑に當る。馬おどろきて駈け出で、追つかくる敵と遠さかる。夏目我已むことを得ざるのことといへども、主君を打ちたる罪道るゝところなし。且つ義に於て、一支へはさゝへたり。死を以て君の難をすくひ、我が罪を贖ふべしとて、大軍の中にかへ入り鎗のをるゝほど戦ひて、遂に討死をぞしたりける。

此の時、甲斐の師、源君を追ふこと猶ほ急なり。鳥井四郎左衛門、内藤四郎左衛門これを兩四郎左と號す。二士ともに源君に従ひて引きけるが、鳥井此の體を見て、内藤に向ひて、われは此に踏

みとめ、敵をふせぎて討死せん。貴方は殿を助けて退れよと云ふ。内藤危きにのぞみて、命を隕すは其の所なりといへども、貴方は我より少し。未だ久しく殿の爲めに忠義を盡されよ。今日の撃死は我が任なりとて、引き返さんとする處を、鳥井、内藤を押し止め、忠義を論ぜば、貴方と我と同じ。然れども、我すでに言を出せり。言を喰むは士の道にあらず。貴方と我と共に討死せんは、是れ殿を棄つるなりと制しければ、内藤義に折れてこれを可く。味方此に捍ぎ、彼にさへ、所々にて鬪死する其のひまに、源君、鹽市口七八町になりたる時、甚だ危急なりければ、内藤其の子彌九郎に謂つて曰く、汝殿の御命にかはらんや否や。彌九郎が曰く、諾、是れのぞむ所なり。内藤我返して討死せんことは易けれども、殿に従へる者みな若武者なり。この所はたゞ恙なく、引き取るを善とす。若武者、血氣剛ければ、北ぐるを恥とせん。我討死せば殿かならず危からん。返す處は此の地なり。返すことを知つて、地を知らざるは利なし。此こそ拒ぐの地なれといさむれば、彌九郎その詞の下より即ち引き返す。内藤かへりみて、愁ふる色あり。彌九郎競ひ掛る敵に馳せ合はせ、撞き卻け遂に此にて討たれたり。源君、退き得て、濱松の城に入りたまへり。彌九郎が首は秋山が従者鹽路と云ふ者これを得。彌九郎殊に力戦して敵を斬り、鹽路にも數箇所の手を負はせたり。軍散じて後、信玄秋山を呼んで、今日何ぞ備へをみだして、北ぐるを逐ふ事法に過ぎたるやと、問はれければ、秋

山黒鹿毛の馬にのり、再拜を腰にさし、鎗をば持たず、やゝもすれば還り鬪はんとする武者あり。其の體嚴にして家康と見なしたるに由つて、急にこれを追ふと答ふ。信玄理ありと云ひてこれを尤めず。

薩摩の島津修理大夫久義、其の子島津兵庫頭義弘をして豊後の宗像を撃たしむ。島津中務少輔豊久前鋒たり。宗像が師しきりに勇みかゝる。是れ大星を得たるを恃むがゆゑなり。豊久士卒をばけまして宗像が懸り口猥りなり。一當あてたらば敗れ易からん。大星は虚なり。軍備は實なり。彼れ今實をわすれて虚を信ず。是れ兵法に鍊れざる者ぞ。何をか疑ひ惶れんやとて、相がかりに徐にかかりて、齊整を以て紛擾を撃つて、果して大に宗像を敗る。

島津義久降つて後、秀吉肥後を以つて佐々陸奥守成政にたまふ。成政國を治め民を帥るに苛酷なり。故に一揆大に起りて、其勢ひはなはだ熾なり。成政みづからこれを伐つ。兵を率ゐて出で、高陽の地に備へて、先づその銳氣を避けんとす。一揆等三千許り競ひかゝりて攻め上る。成政佚を以て勞を撃つの利を計りて徐にこれを待つ。一揆の稍、近づくを見て、山の左右に足輕をすませ、鐵炮を以て打ち立つる。成政下知して前にすゝむ者をうたずして、半より跡を打たせければ、乍ちうら崩れす。前に進むもの勇氣を失ひて、後を顧みるとき、山も動くばかり鬨聲を發すると均しく、

おとしかくれば、一揆大に奔潰して五六百人討たれたり。此より成政、屢、戦ひて一揆を伐ち平ぐ。秀吉、佐々成政が國を治むるの道にそむき、庶民の望みを失ふことを責められて遂に自殺す。是において秀吉、肥後を二つに分けて、加藤主計頭清正、小西攝津守行長を封ぜらる。行長の領分天草に一揆おこりければ、行長が居城宇土より天草に馳せ向ふ。清正同國たるによつて、これに力を戮せてこれを攻む。一揆の豪酋大山彈正、八百許りの勁兵を前後に率ゐて直に突いて出づ。前日の戦に彈正が長子を討たれ、且つ悼み且つ憤りければ今日身討死するか。子の仇を報ずるかと一途に思ひ定め、かさより撃つてかゝる。行長清正の先手突き立てられて、彈正勝に乗つて二三町ばかり追ひ付くる其勢ひはなはだ奮疾なり。清正冑の緒を締め直し、力足を踏んで、ゑい／＼と呼ばはる聲衆人の耳に徹す。壯氣面にあらはれ、先手の敗軍を餘所に見て其の所を動かす。旗本の兵、此にはげまされて、勝ちほこりたる敵を追ひ返さんとす。清正自ら彈正と鋒を接へ、加藤清兵衛は後備へたりしが、其の部下の士卒、身方の切り立てらるゝを見て、駆け合さんとするを乗り廻はし、下知して備へを亂さず、少し高き所に控へてしほあひを料る。彈正が清正と鎗を合はする時、こゝぞと云ふまゝに、咄と喚んで横さまにかゝり、旗本とさしはさみ撃つて遂に彈正が首を斬る。清正の十文字片鎗を掛けて折られたりしは此の時なり。後まで其の片鎗を持鎗として、家の美目に具へら

れける。

島津琉球を取らんと欲す。これを密せず。顯れて兵船、軍器の用意おびたゞし。琉球の商人薩摩にある者、歸りて國王に申す。琉球大に駭愕して海邊に壘をかまへ、備へを設く。夏の日、波頭穩かなるにいたつて、薩兵の老若を聚めて、數百の海船にのせ、旗旗目をうばひ、金鼓耳を劫かして次第々々に攻め近づく。初めは海岸一二里ばかりの外に在り。にはかに漕ぎよせずして進むこと一日に或は五町、或は七町、船數日々にかさみ、軍勢いよく盛なり。琉球、國中を空しうして皆此にあつまる。薩摩の精銳は別に輕舸に乗りて、はるかに東西よりまはり、琉球の後の方より夜まぎれに漕ぎつけ、明くるを待ちて俄に撃つて上れば、琉球の兵ことごとく渡口に在つて拒ぐ者なし。琉球不意を撃たれ、面背の敵に敗られて大に潰亂す。海上には舷を扣きて聲勢を張り、陸地には戈を揮ひて斬劉を縦にす。一戦に大勝を得たり。此より永く屬國となりて朝貢絶えず。

秀吉の師、朝鮮を撃つ時、唐島に番船を置きてこれを守る。藤堂佐渡守高虎ひそかに夜にまぎれて敵の小船二三艘を乗り取りたり。明日大に戦ふ。加藤左馬助嘉明は前夜、高虎にこされたるを憤りて、塙團右衛門に手段を云ひふくめ、物見船をやる。塙しきりに進んで歸らず。嘉明大に怒る體をして、軍法を破ること悪しき者どもかな。あれ制せよと聲々に呼びかけ、扇を揚げて招けども、豫

ての謀はかりごとなれば、塙後をもかへりみず、是に於て嘉明よしもと自身みづかみ早舸はやかほに乗りて、とまれくくと云うて追うて行く。嘉明の兵一同におし出し、大船多く乗り取り、其の日の功名諸將にすぐれたり。奉行横目此の合戦の次第を秀吉に註進するとき、高虎舟軍の先登は我なり。誰か共に争ふべきや。只高虎群たかこをはなれたりと書き記されよと申されければ、嘉明おし静めて、我今日の戦たたかひ、衆人の視るところに候。深夜敵の熟睡したる隙をうかがひて、少しく利を得られたれども、寝首を搔きたるに同じ。夜と晝と異なり、小と大と豈に同じからんや。佐州の働き、今日に於ては梯かきししても、我には及ばれまじき物をとあざ笑ひて、居られければ、高虎怒つて佩刀を抜きて斬らんとす。其の座にあり合ふ人々、高虎を押し止むる。嘉明は片膝を立て、柱に倚りて色をも變ぜず、貌をも動かさず、大難おほな刀の刃やいばのはづれたるが如く見苦しき仕形かたかな。人そばえして取り亂せるは丈夫のわざかと、いと躁がぬ體なり。これを見る者、その器量きりやう似も似ずと嘉明を感稱す。

赤松左兵衛尉廣秀も朝鮮を伐つの人衆なり。其の臣田路勘四郎強弓たるによりて、敵を多く射斃し追ひ拂ひて、小川の堤に傍うて馬を乗り行く處に、其の友衣笠宗兵衛が馬、堤の下を馳せ通る。衣笠は敵に討たれたるかと思ひ進み行けば、朝鮮人衣笠をとらへ胸を左の脇にはさみ、頸を右の手に握り、小川の流に頭を押し浸し、二口三口、水を飲ませては、引き上げ、水を飲ませては引き上げ

するところを、田路後より駈けよせ、刀を抜きて袈裟掛けに斬り殺し、衣笠を助けたり。其の首尾を如何と問へば、朝鮮人、我に敵せんと相向ふ處を、をがみ打ちに丁と切る。長き袖を舉げて刀を纏ひ、ひたと組み横抱きに抱きたり。力を出して奮脱せんとすれども、力更に出でず。彼が力何人力と云ふことを知らず。たゞ二三歳の小兒を抱きたるが如し。此の川におりて右の如し。我がつらを見て笑ふこと數次。無念類ひなかりしに貴殿の力によつて不慮の難を免れぬと云ひて、打ちつれて營に歸る。

加藤主計頭清正、蔚山に於て漢南の兵に圍まるゝ時、敵、山野に満ちて幾千萬と云ふ數を知らず。城中兵少くして士卒色をうしなふ。清正の將、加藤清兵衛は勇智ある者なり。清正の前に出でて、敵、今新たに至つて、圍みいまだ合はざるさきに撃つて、手なみを見せ候はん。一には我が勇を知らせて、寡兵なれども侮りにくしと思はせん。二には身方に利を得させて、恐るゝ心を轉せん。然らずば士卒敵の大軍に氣を呑まれて、戦ひ必ず危ふかるべしと諫むれば、清正これにしたがふ。清兵衛五百人許りを率ゐて、門を開きて突いて出で漢南の兵に切り勝ち、しづかに引いて城に歸る。漢南の兵、此の氣勢にくだかれ、身方は敵を思ひこなす處あり。是を以てよく城を守つて屈せずと云へり。

清正、蔚山に於て援ひ來らず。糧すでに盡きて馬を殺してこれを喰ふ。兵力甚だ疲れざるさきに、切つて出で、鬪死せんと議するところに、漢南人も亦糧道繼がずして兵を引いて歸る。清正九死を出でて一生に遭へり。そのとき夜半に西洋砲一聲山川を震動す。城中には漢南人夜に乗じて攻め入るか、持口を固めて待ちかけたれども、其の後寂として人馬の音もなし。明くるに及んで、漢南人の陣を見れば、夜間に皆引き取つて、たゞ空營の跡のみ残り。城より十町にはすぎざるに、二三萬許りの人衆の引き取るも、城中に聞えざるは能く軍令の縮りたること倭兵の及ぶところにあらず。扱て陣屋の跡を見るに厠一つもなく、糞尿の汚れもなし。此の兩事もつとも名譽とす。

加藤清正の中備へ吉村又市、釜山浦に於て朝鮮の群賊と戦ひて、已に日暮におよぶ。清正衆人を引き揚げずば危ふかるべし。誰か可ならんと、其の邊を見廻はし、庄林隼人が、はるか末に居たるを呼びかけ、人衆を引き揚げさしむ。隼人承はり、再拜を取つて兩陣の間に乗り入れ、なんなく引き揚げて歸る。此の時森本義太夫傍に在りけるが、涙を垂れて怒れる色あり。清正彼が體をあやしとみて其の所存を問はるゝに、森本、君小臣を見ること庄林に如かず。是れ武士の恥辱に候。庄林と小臣と同じく君に従ひて、白刃を踏むこと庄林に劣らず。是れ君の眼前に御覽せし所なり。庄林、君の傍に在つて小臣居らずば恨みなし。小臣近く候をば御詞もかけられず、遙の末なる庄林を

召して命ぜられしこと、年來も斯くこそ優劣を分たれけめ。疾く知らざるも愚昧の至りに候と申しければ、清正わらひて、汝等は等しく予が股肱、腹心なり。使ふ處は其の器にしたがふのみ。今汝をやらば必ず敵に駈け合はせて、力闘すべき勇敢の氣あり。これ師を害ふならん。庄林がときは今見よ、難なく引き揚げてかへるべし。如し剛敵堅陣あらば、汝に命じて此に當らしめん。倍々の兵なりとも恐るゝに足らじ。群を抜き衆をこえ、撃つてこれを敗ること別人は及ぶべからず。是れ汝が長ずる所なりと、なだめられければ、森本、君さ思召し候へば、面目あるに似たりとて已みぬ。是れ清正假に辭を爲りて、森本が憤りを止めらるゝに非ず。實に清正、士を用ふる一代の心法なるべし。

清正朝鮮に赴く。其の跡にて薩人梅北肥後の地を侵掠す。堺善左衛門熊本の留後たり。肥後の國士多く梅北にしたがひて、兵勢愈々さかんなり。堺戦はんとするに力敵せず。一旦いつはりて彼に降服する體にして、刺し殺さんと思ひ、城を梅北にわたす。梅北城に入りて心をゆるさず。堺今日より臣禮を取るの始めなれば、祝詞のため御盃をいたゞき候はんとて梅北を享す。梅北が心を和げんことを慮りて、酌とりに美女を出す。梅北先づ飲んで、堺にさし、座を立つて肴を與ふ。豫て此の時斬らんとたくみしが、威にや抑へられけん、手後れて本座に歸れり。堺、此の期過ぎては叶はじと

思ひ、短刀を抜き飛びかゝりて刺し殺す。そこに在り合ふ者、手々に刀を抜きはなち、堺に切つてかかるるところを、堺、目を瞋らし聲を勵まし、汝等狂せりや、梅北は賊なり。彼に屬するは本意ならんや。我と心を同じうして、彼が黨與を撃たば、清正脇從の咎を宥めて、非をあらため、賊を伐つ功を賞せられん。否なるときは秀吉汝等が三族を梟首せられんこと數日に過ぎじ。汝等わきまへずやと云へば、これを聞きて皆堺と一所になる。梅北が手の者逃ぐるところを追ひかけて斬り伏せ、此の亂を鎮めたり。堺が本知二百石、清正後に十倍して二千石を與ふ。

秀吉、朝鮮を伐つとき、池田三左衛門尉輝政、船奉行中村九郎兵衛に令して、糧を肥前の名護屋に漕せしむ。中村挑燈二三百、大鼓三四十を買ひて名護屋に至る時、巳の刻にて潮もよし。されども玄海が島に止めてわざと日を待ち暮し、亥の刻になりて船を漕ぎ入る。二三百の挑燈に火をともしつれ、三四十の大鼓を敲き立つれば、火光海に映り、鼓聲城上に響きておびたゞし。秀吉使を遣はして何者ぞと問はせらるゝに、輝政が家禮中村九郎兵衛糧を漕するの船なりと答ふ。秀吉素より華美を好む。中村よく逢迎して甚だ秀吉の心に適へり。すなはち中村を朝鮮に渡海せしむ。中村、朝鮮に至れば軍すでに解けぬ。時に糧將に盡きんとす。諸將大にこれをよろこぶ。是れ誠に中村才略ありと云へども虚名なり。實功にあらず。君の爲めにして、自ら爲めにせざるときは少しくゆるすべし。

諸將共に朝鮮の南元を攻むるとき、宇喜多秀家は城の東面に向ふ。其の臣戸川肥後守達安、先登を心がけ、南にめぐる。達安が従兵六甘太郎右衛門、浦上三郎兵衛相并びてすゝむ。浦上は壯年、六甘は老功の者なり。六甘、浦上をして女垣に上り、城内をうかゞはしめ、後より手を出し助け引かれて上ると均しく、六甘太郎右衛門、南元南門の一番のりと名のる。秀吉、感牒を賜はりて兩國の逸物と云ふ詞を載せられたり。浦上は實の一番なれども、却て此の名譽を得ずして憤れども、かひなし。浦上、六甘に誑さるゝは愚昧なり。六甘、浦上をたぶらかすは姦邪なり。主將其の實を正さざるは無法無體なり。働き一二上下倒になれば、實功かくれ虚名を得る者多し。是れ大なる鋒の弱み、敗凶の基たれば、尤も主將の早くわきまふべき所なり。如し良將たらば、必ず六甘をしりぞけて軍中に諭すべし。一旦運にのり、幸に勝つことを恃むべからず。主將六甘が風を賞せば、血戰汗馬の勞より名を飾り節を銜ひて、上に得られ、世に用ひられて、豊祿を受け、殊寵に遇ふ者多からん。是に於て武備を講じ兵術を鍊り、正義の將を擧げ實を好むの士をえらべるの良將ありて與にたゞかはば、上下虚誣を以て相爲し、智諍を以て相酬ゆる者、潰亂せんこと必然なり。兵は詭道なりと孫武が論ぜしは格別の事なり。國郡の主これを思へ。これをおもへ。

北條と今川と相計つて遠州、武州の鹽商人を留めて、甲斐信濃に鹽を入れず。此を以て信玄の兵を困めんとす。謙信これを聞いて領國の驛路に令して、しほを甲信にはこぼしむ。我は兵を以て戦ひを決せん。鹽を以て敵を窮せしむる事をせじと云ひ送られければ、信玄受けられたり。是れ謙信の義にして、且つ勇なる處なりと云へども、必ず深慮遠圖あらん。信玄は謙信より先輩にして、北條、今川の地を掠め奪ふ者はまづ信玄なり。此の故に信玄を寇とすること、六國の秦に於けるが如し。信玄もし艱阨に迫らば、其の次は必ず謙信ならん。信玄諸牧とたゝかひて、兵久しく解けずば、其の間に北國を一圓に撃ち從へて、勢ひ盛大にならば、東海の國々、力を戮せ志を一つにするとも、恐るゝに足らずと思惟せられしなるべしと云へり。

氏政と源君と兩旗を以て勝頼に向はるゝに、勝頼却つて兩旗を壓すの意あり。源君は遠州大井川の下、伊呂に陣して居たまふ處に、折りしも二三日雨ふりつき、夜に入つて川岸にはかに崩れて、水中におちいる音おびたゞし。是を俗語に蛇崩れと云ふ。寢耳に聞きて、勝頼夜合戦にかゝると思ひ、先手も旗本も士卒躁ぎたちて、何と制すれども鎮まらず。旗本には勝頼、實によせて先手敗軍したりと思召され、源君、牧野半右衛門を以て、一向に早く引き取り濱松の城に一騎がけに駈せ入れと下知したまへば、愈々亂れ立つて前後もわきまへず。然るところに大久保七郎右衛門忠世まづ

旗本に大挑燈を高くさしあげさせ、慥かなる士を付け置きて、我がかへるまで此を去るなと云ひふくめ、先手に馳せ行き、大音聲にて旗本を以て二の身を撃たんとて已に備へを立て固めたり。其の證は、あの挑燈の動かざるを見よ。黒くして旗本の者に後わらはれては、何の面目かあらんと觸れ廻はりければ、各々これを聞いて一部々次第に備へを立て定む。忠世是にてこそあれと、一譽めほめて旗本に乗り歸り、先手は旗本にて二の身を撃ちたまはゞ、合戦を仕るべしとて、皆備を立て直し已に鎮まりたり。以後、先手の兵に恥ぢしめられれば口惜しかるべし。是は何事ぞとはげまされければ、旗本も茲に因つて亂れたる軍勢みな部曲を整へたり。是れ忠世が早速の奇策、智ありて且つ勇ある者にあらずは、これを爲ること能はず。

肥前の龍造寺隆信、威を近國に逞しうすといへども、筑後半國の領主蒲池重井隨從せず。隆信謀を以て重井を婿とす。三年の後重井の婦人女子を生めり。隆信、重井を婿とせしより以來、折にふれ事に就きて恫情あさからず。是に於て重井を龍造寺にまねく。同姓左馬助は叔父ながら家老なりければ、此の事如何あらんと異見を問ふに、すでに御子も候ふ上は、隆信虎狼たりとも、よも賊心は挟されじ。かく親しき御中に、いつ迄心をおかるべきとて、人衆上下三百ばかりにて龍造寺に詣る。隆信美味をもとめ、珍饌を陳ね、馳走なゝめならず。重井逗留二日、大鼓打の似我、折ふし

京都より重井の城下に来りけるを、龍造寺に誘引せらる。隆信悦びて能を促ほし、似我に太鼓を所望あり。二日の後、重井暇を告げて筑後にかへる。行く事一里ばかり。隆信歩者に一封書を持たせて左馬助につかはす。左馬助披見するに其の詞に曰く、今度重井を招くことは謀つて殺さんが爲めなり。曉天より銳兵三千、前路に伏せてこれを待つ。勁士三千、後を追うてこれを攻む。網魚檻獸いづくにか逃れん。然りといへども、貴方は年來相識るの好みあり。似我は天下の名人、罪なくして此の禍に罹らば、我本意にあらず。速に似我と共に逃げられよ。本領違變あらじとの趣きなり。左馬助は後に引きさがりて行きけるが重井にのり付き、其の書を捧ぐ。重井これを見て、我が命の盡くるところ、更に驚くべからず。只自害するまでぞ。子と似我とは速く去つて、害に遇はされと中々憂ふる色もなし。左馬助臣は君の貴戚に備へて、忝く骨肉を分けたる者なり。君の此の難に遇ふは臣勧めたてまつりて、龍造寺に行きしに由つてなり。苟も此を去つて武門の悪名を遺さんことは臣敢てこれを爲じ。初め人心を知るにくらし。今又人道を失はんやと云ひて、此の由を似我に告ぐ。似我今度假初めに罷り下り候うて、寵恩を蒙りたること甚だ深く候。今此の危阨を見て、死を逃るゝは我等猿樂の身たれども人倫の爲ざる所なりとて、強ひて逃れしむれども聽かず。思ひ切つたる體なれば、重井此の上は力なし。我に命を與ふること只生前のみならず、死後までも伴ふべき

契りにこそと云ひも果てぬに、前後より関の聲を揚げて攻め寄せたり。左馬助臣まづ冥途の露はらひを仕らんとて、多兵の中を駈け破り、向ふ敵を二三騎突き落し、鎗の柄半ば折れければ、刀を抜いて切つて廻はるに、死傷する者多し。遂に亂兵に斬断せらる。似我も思ふほど戦ひて能き敵と引つ組み刺し違へて死す。此の隙に重井は雜卒の手にかゝらじと一村の里にかけ入り、喉を截ちて失せにけり。隣國地を争ひてたゝかふとき、謀を以て敵の將を殺すことは武家の習ひ、功名とする所なり。是は敵の地を篡はんために、我が愛育するところの女を棄て、死間に用ふ。是をも忍ぶときは父を殺し君を殺すことも亦忍ぶべし。重井、龍造寺に来れば既に降服するなり。敵讐にあらず。これを睨じうして、急難相救はゞ隆信の領國と同じ。女の爲には夫婦の情あり、孫の爲には父子の親あり。始め隨従せざりし怒りを忘れず、終に横殺して其の地を利すること亂世の人心虎狼よりも甚し。虎狼も猶ほ其の子を乳養して餓うれども其の肉を喰はず。嗚呼隆信これを何とか謂はんや。秀吉、黒田官兵衛孝高に豊前を賜ふ。此の時切り取りと號して、敵國いまだ盡く服せずと云へども、太刀先を以て切りしたがへて、其の國を領することを許さるゝ事あり。豊前も亦切り取りの命を受けぬ。斯るところに、豊前の紀伊の谷は險阻の地なり。其の地の巨豪、要害をかまへて孝高をふせぐ。紀伊、孝高をおびき深入りしたる處を、險阻のつまりより不意に突いて出で、追ひ崩して

孝高を入れたてず。孝高、人に押し付けを見せたること、此の時のみと云ひて、死期まで自ら悔いられぬ。堅く守り能く拒ぎて、力攻めにも成りがたく、紀伊も要害を離るべからずと相戒めてしたるは付け慕はず。此の時後藏又兵衛尉基次、溝の中に突き落されたり。敵味方の亂れ合ひたることなれば、敵も突き捨てにし、身方もこれを知らず。人皆後藤は討死したると思ふところに、蘇りて溝中より上り、甲冑血に染りて歸りければ、孝高悦びて我汝を以て已に死せりと思ひき。今日の戦は我一世の不覺なりとて且つ憤り且つ愧ぢらる。後藤その事にはとりあはず、軍の評議はいかにと申す。皆明日たるべしと云ふ。後藤、明日かはる手段もなく、徒に戦はんとせば、敵は地の利を得て按内者なり。味方は鋒を挫かれて惶るゝ心あり。必定亦負け軍して前恥の上に後患を重ぬべし。是れ再び人に笑はるゝことを求むるなり。敵の怠りを夜討にせば、勝ちたるべしと諫む。孝高、衆皆力疲れ、氣屈せりとてあやぶまる。後藤、臣創を被り、今此に來りて、暫くも憩はず。臣御先を仕らんに誰か沮み撓むべきや。いさ急がせたまへとて、真先にのり出せば、皆是に勵まされて後藤に劣らじと駈け向ふ。紀伊が備へなきを撃つて追ひ拂ひ、色を直して引き取りたるは、偏に後藤が功によれり。其の後平を行ひて、縁を結びけれども紀伊敢て出です。三年を経て、今は別義あらじと孝高の城に來る。孝高饗應せらる。吉田六郎太夫酌たり。森但馬、其の時は多兵衛と云ひて殺

の役たり。二士は度々の功名ある勇者なれば、紀伊が盃を戴かん時、吉田初太刀を斬れ、森は助太刀をせよと定められぬ。一禮畢つて盃を出し、孝高紀伊に始められよとあれば、紀伊辭退す。孝高飲みて紀伊にさゝれけるに、首をさげず、刀を差しながら居なりに取つて戴けり。孝高、吉田が按に相違して斬りかねたる體を見て、心中に怒りをふくみ、森御殺をと云ふ詞の下より、次の間にて刀を抜き持ち走り出でて斬り付くる。思ふ所を切りはづして片そばに當る。紀伊心得たりとて刀を抜くと均しく、孝高、其の間に飛び入り、紀伊が頸を半ばかりかけて一太刀に斬り斃す。吉田と森とは人に名をしられたる者なりしが、紀伊が威にや吞まれけん、切り損じたりけれども、年來の軍功あれば、あながちに後れたりとせず。紀伊が従者は手當てをして、そこにて討ち留めたり。謙信、越後の土物、蠟燭、金引、鮭の鹽引、黄檗などの商人を作りて國々にやり、人情地形を窺はしめ、審に其のことを問うて自ら記し置きて常にこれを見る。故に、その主の淑慝、その將の能否、その國の虚實、その地の險易、其の兵の多少、百里二百里の外も具に知らずと云ふことなし。近き比、大和の郡山の城主、本多内記政勝、近習外様より士二十人をえらびて金銀をあたへ、商賈、虚無僧などになして日域六十餘州に分けつかはして、城地の山川、士民の風俗つぶさにこれを見しむ。

齋藤山城守道三、先手の兵士に三間柄の直鎗すなりを持たせ、鐘の鐸しづのきはを繩にて結び手がかりにし、鎗前に成りては人々是をかたげ、上よりおろしかけ、叩き立つれば、身方は乍ち上鎗みかたになりて敵は自ら仰形おのづかになる。仰形になりては蹈み留められぬ物なれば、多くは此を以て衝き崩し、勝利を得たり。

齋藤道三は美濃の土岐に仕へぬ。小身にして町はづれの草庵に居れり。内窄せまければ鎗を掛け置くべき所なし。門外に竹を立て、節をぬきて鎗を其の中に入れ、口を封じて雨露をふせぐ。土岐放鷹はうように出でられたるに、鷹此の竹の枝に居かゝりたり。怪みて故を問はるゝに、道三實を以て對ふ。土岐感稱して心懸の士とす。擧げ用ゐて試むるに、才智勇謀ありて將の器に當れば、後漸く歴上りて、國の執權となる。是に於て逆心を起し、土岐を楯出して美濃を押領す。道三の適子を義龍と云ふ。道三其の家臣稻葉伊豫守が妹を夫人とす。艷容比すべき者なし。然れども願ねがきこと六尺ばかり、義龍其の腹に生れたるを以てのゆゑか長六尺四五寸。膝をかゝめて坐せる處、その膝の高さ、一尺二寸の扇を立て雙ぶるにいまだ及ばざること手一束ばかりなり。膂力人に超え、勇銳倫を絶つ。外貌は蠢愚頑冥しんぐなるが如くにて、内心は實に穎悟明朗なり。暗に人情を察し、ひそかに時勢を謀りてよく勘辨す。道三の愛妾の腹に二男子あり。喜平次、孫四郎と云ふ。道三義龍を以て嗣とするに足ら

ずとして、これを疏んじこれを遠ざく。義龍をしりぞけて喜平次を立てんと欲す。義龍これを曉り、義龍は内城にをり、道三は牙城がじやうにをる。義龍、家老大臣をなづけ、士に下り卒を撫でて、大に人心を得たり。伊賀伊賀守、一の姓は安藤、竹腰攝津守、後剃髮のちていばつして道喜と云ふ。稻葉伊豫守、後剃髮して一徹と云ふ。氏江ト仙、四將みな義龍に服従す。其の機を計りて外叔父ぐわいしやくふなれば、先づ稻葉に密談し、いつはりて病と稱し、稻葉と懇切なる醫を近づけて誓紙を書かせ其の藥を服し、病ますゝ重くなりて愈々かたしと云はしむ。喜平次、孫四郎、元來不和なれば、問訊もんじんするに及ばず。稻葉二弟を諫めて、義龍の病日を逐ひ月に従ひて、疲れ衰へぬ。正しく二公の兄にあらずや。其の死期を問はざるは不義なり、不親なり。義龍死せば二公美濃を分けて領せん。不義不親の名一たび發せば、後その汚名を補定すべからず。外人は懼れず、家臣は服せじ。外人おそれず、家臣服せざるは危殆の道なり。主將の器うつはものを論ずるに信仁と説き候はずや。義と親とは寔に士庶人の心を歸するところなれば、二公、美濃をたもちて、威を敵國に奮はんと思召さば、かならず義龍を問ひたまへと云ふ。喜平次、孫四郎諫誨の理にあたるがゆゑに許諾して、明日病を問はんとす。稻葉かくと義龍に告ぐ。仕手してを日根野と云ふ壯士に令す。美濃一國にかくれなき有動刀うどうたうと名づくる大物ぎれを、日根野にあたへて二弟を殺す。早鐘を搗きて内通の者に示すに、牙城に聞えておびたゞし。將士常に牙城に至

つて道三に調す。道三夜話を好んで鶏鳴き漏盡くるに及ぶこと多し。此の時侍座の者ども大に驚く。道三是れ義龍が反するならんと云ふ。將士各々道三に與みせんか、義理に従はんかと云ふ處に、一老臣の曰く、道三は虎質狼心、殺を嗜むの殘夫なり。義龍は宏知達才、下を愛するの明主なり。これ面々の能く知るところなれば、何をかうたがはんとて、義龍に歸する者は一萬餘、道三に屬する者は二千許りなり。義龍は子たるを以て道三を攻めず。道三は兵寡きがゆゑに義龍を撃たず。相待ちて居たりけるが、道三牙城を危しとや思はれけん。是より一里半を去つて、地の利を得たる一邑あり。此に出でて陣を張る。かくて其の月もたちにけり。義龍侍臣に向ひて道三さへ我を害する心なくば、元來我攻め戦ふを好まず。つひに干戈を止めて和順にこそ成るべけれとて悦ばれけるが、道三鬱憤さらに解けがたくて、明日義龍を伐つべきにぞ定まりける。義龍聞いて城外に出で、兵を陳ねてこれを待つ。道三は二千許りを率ゐて一陣二陣を切崩すと云へども、義龍の中備、後備、左右旗本すこしも列を亂さず、奇正を整へて、しづかに進む。道三これを見て、義龍は未だ軍旅に錬れざる者なり。先手敗せば備みだりに成りて必ずそゝろに打つてかゝらん。然らば追ひ靡け、たやすく擒にせんと思ふところに、義龍が帥を指揮するてい、老功の者も及ぶべからず。我今日討死に極めたり。去りながら隣國の主、義龍を侵す者なくして美濃は全く齋藤家の有たるべし。是れ我死し

ても怨みなし。我始めより義龍を惡むにあらず、我その器量を見知らざるは不明なり。庶子にかへんとせしは家の爲めぞと思ひながら不順なりとて、大息を續ぎて控へたるところに、義龍二の身を打ち始め、破れたる一陣二陣も旗を返せば、道三の兵忽ち潰亂す。兵刃いまだ交へざるさきに、義龍將士に向ひて、汝等今日道三に遇はば如何にすべきやと問はれけるに、將士應ふる詞なし。其の比永井忠右衛門と云ふ大剛の者あり。鎗前に至りて勇なる者すゝめば備へ杉なりに成る習ひなり。永井何時も杉なりの先きに在りて、一二番を争ふゆゑに、時の人永井を謂つて杉先と號す。杉先、道三に敵對仕らんことは臣忍びざるところあり。恐れながら生捕り奉らん。父子は元來至親なり。然らば即ち一旦寇讐の如くなりとも、御憤りことごとく解けて、本の至親の中とならせたまふべし。臣不肖ながら御盃の挨拶を仕り、道三御隠居ありて、君公孝養を遂げさせ玉は、禍轉じて福とならんと云ふ。義龍悦べり。道三は例の黒具足に出で立たれたれば、などかは見まがふべき。杉先つと馳せ寄つて臣少しも害心なし。いざ義龍の陣に御入り候へ、御和親を申しなし候ふべしと云へば、道三さは云はせじとて、鎌鎗を以てつかるところを鎗の下をくゞり入つて生捕つたり。しかるに小牧源太ろしより走り來りて、あへなく道三の兩股を切落し、杉先を推しのけ首をとる。杉先、是非なく鼻を截ちて持歸りて憂ふる色あり。小牧ほどなく來りて道三の首を義龍にさゝぐ。始



め杉先が生捕り奉らんと云ひしとき、小牧傍より只、臣は御首を給はらんと云ひけるを、杉先、無道なる事な申されそと戒めけれども、小牧その詞を違へじと、かくはしたるなり。義龍杉先を呼びて、あれは如何にと問はれければ、杉先涙を流し、彼の若者、思慮なき仕形、言語に絶えたり。臣が本意達せずして、云ひがひなきことに候。生捕りたてまつらんと申せし印には御鼻を截ちて、是に候と、鼻紙入れより取り出し、義龍のまへにさし置き、これも亦罪戻通れがたく候へども、武士は詞の違ふを永代の恥に仕り候。臣一人は恥辱をも忍ぶべく候へども、臣が同姓親族の面を穢すに似たれば、已むことを得ず候。首尾は爾々に候と申せば、小牧閉口す。此より杉先、髪を斷ちて高野に赴く。信長は道三の婿なるによつて、師を發して弔ひ合戦をせんと欲す。義龍これを聞いて、美濃の國中、尾張よりの通路は道を作らせ橋を架けさせ、信長我を討たんとならば平場に引き受けてこゝろよく有無の防戦をとげ、無事には尾張へ歸さじと、あざ笑つてぞ居られける。信長氣をや吞まれけん、已に打ち出でたる師を旋して戦を止められぬ。義龍の時、美濃よく治まりて士懐き民樂めり。嗣子龍興の代に至つて、小牧源太、野木治左衛門兩臣權をあらそふ。冬日爐邊に坐す。小牧爐中にさし入つて火をかきおこす處を、野木、上に乗るかゝり小牧を斬る。小牧短刀を抜きあげさまに野木を刺して、兩臣立ちどころに死す。龍興、生質暗弱なり、兩臣の力によりて敵の爲めに侵されず、兩臣死して後、毎戦に利を失ひて、遂に信長にほろぼされぬ。

卷之四

齋藤龍興の臣、竹中半兵衛は一萬石を領して西美濃菩提の城を守る。沈勇溫毅にして人其の才器ある事を知らず。三老臣安藤、氏江、不破等これを侮る。竹中憤りを含みて、三老臣を殺さん事を計る。其の比、竹中が弟半平、龍興に愛幸せらる。竹中願はくは城中に半平が家宅を造りて、食浴の間も猶ほ怠らず、近侍の奉公を勤めさせばやと申し請ひければ、龍興即ち其の望みを許さる。是に於て竹中勇士二百許りを傭役の體にしなし、三老臣の一座に會するを待つて、其の座につと入つて、先づ一人を手の下に斬り、二人驚く所を又二人をも斬り斃す。傭役ぞと思ひたる者ども、いづくにか隠し置きけん。面々鎗刀を取つて城を守り門を固む。竹中、龍興の前に参りて、臣更に謀叛を企て候にあらず。只三老臣が驕奢を惡みて、君公に代りて誅を行ひたるに候。恐れながら此の城を御出で候へ。事靜まりて後、迎へ奉るべく候とぞ申しける。龍興力に及ばず、城を出されて、竹中遂に城に據りければ、齋藤家の士卒多くは竹中に歸す。竹中、後に龍興を迎へ、己れ相將の任に

處て、權勢日々に盛なり。信長、竹中が龍興を逐ふと聞きて、速に龍興を殺せ。美濃全州は貴殿に與ふるぞと使を以て云ひ遣はしければ、竹中悦ばず、我素より龍興に叛くに非ず。一旦家臣の罪を匡したるのみなりとて、さして返答もせざりけり。竹中が存生の間、信長敢て美濃を侵さず。竹中三十六歳にて病みて死す。手づから斬首捕虜の戦功一度もなし。然れども文教武策盡く竹中に決して、人々其の知に服せり。間暇ある時は常に好んで書を読む。其の器量甚だ世人に超えたり。

信長泉州の岸和田の城主香西を攻めらる。城固うして陥らず。已に引き取らんとする時、山崎左馬允が弟右京亮が家人川畑太郎右衛門夜深けて厠に行く。厠の向は麥畑なり。其の麥畑風なくて動きければ、之をあやしみて息をもせずこれを窺ふに、一男夫匍匐して来る。定めて敵の忍びの者ならんと思ひ、其の間一丈ばかりに成りたる處を飛びかゝり捕へて縛る。其の誰と云ふ事を知らず、引きたて歸りて右京亮に告ぐ。右京亮是を具して信長の前に至る。瞠目跛足なり。信長これを見て曰く、汝偽はる事なかれ。其目をあけよ、其の足を直せ、汝は是香西なりと終に之を剪斷して城即ち陥りぬ。川畑は密れなき勇士なり。鍾馗を畫きて差物とす。川畑が鍾馗の差物とて、其の比市童も皆これを知る。

謙信、自ら兵一萬餘を率ゐて、越中の地に入り、柿崎和泉に令して、別將を副へて邊塞を攻めし

む。引き取る時、成將出でて戦ふ。此の時柿崎が從兵大川十郎、左の腕を射貫かれたる矢をも抜かず、取りたる首を掲げて柿崎が前に来る。柿崎罵つて曰く、子元より首一つ取りかぬる者に非ず。何ぞこれを以て譽れとするや。子又、矢一と筋によわる者にあらず。何ぞ此を以て勇と思へるや。一步も進むべき所を知らずやと恥ぢしめたり。是の故に士卒首は斬棄てにして殊に苦戦す。首級を措きて鬪撃を先とする時は功名の先後倒顛するの患ひあらん。是れ士の怨みをふくむ端となる。又徒に此の患ひなからんとする時は、專一の場を引ききて鬪撃を罷めて、首級を貪るの蔽あらん。是れ兵勢を挫く基となる。是の故に良將は必ず軍に監ありて之を規す。

何れの處の戦にか、源君敵地に入りて斥候を遣はして地形を見しめ玉ふに、右の方に深田あり。馬の足も立たず、歸りて此の由を白す。源君、陣々に令するとも而も其所身方のかゝり口便りよければ、戦亂に臨みては誰も我れを忘れて馬を馳せ入れ、討たるゝ者有るべしとの御思慮にや。折ふし夏の初めにて白き袴を著ながら斥候の士を召し具せられ、深田はいづこぞ、此にて候と申す詞の下より、其の深田に倒れ入つて、腰の上まで泥淖に没し玉へは、扈從の人々、驚き走り寄りて引き上げ奉る。陣中かくと云ひ傳へて、諸手暫時が間に之を知る。合戦の時に至つて、士卒皆自ら戒めて深田近邊にもよらず、聞きて恐れざるも、見て懲る習ひを思召しける物ならん。

源君、遠州濱松より兵を出して、敵地を攻めさせ給ふ時、鐵炮頭多くの中に一人抽きいでて一番に城下につく。又一人足輕三人つれて馳せ來り鐵炮をうたせたり。後日に先後を争ふに及んで源君城下につく事少しの遅速はあるべけれども、衆軍の中より兩人抜けたれば其の勇均し。一人は足輕三人つれ來る。是れ其の武職を専らにする事、心がけ尤も勝れたり。始め進みて敵と矢合はせしたるも彼なりとて、兩人同じく御感にあづかる。

源君、遠州二俣の城を攻め玉ふに、一陣本多平八郎忠勝、二陣榊原小平太康政、三陣本多作左衛門重次、四陣大須賀五左衛門郎康高なり。時に内藤四郎左衛門正成誤りて足を折損して、師に従ふこと能はず。留りて濱松の城を守る。源公、二俣の地を侵して夜戦す。俄に甚雨疾風に遭うて進退分合自由ならざれば軽く濱松に引取り玉ふ時、忠勝、人を馳せて、源君只今御歸りなり。門を開かれよといへども、正成令して固く鎖して開かず。忠勝自ら至つて門を叩き、聲々によべども、正成門櫓に上り、何者ぞそこ卻け、卻かずば打殺せとて、鐵炮に火繩を挟ませて、下知しける間、後軍支へて進むを得ず、忠勝此の由を人を以て旗本に告げたりければ、源君一騎門際に乗り來り給ひて、四郎左衛門はあるか、我れ今歸りたりと仰せらる。正成御詞を聞き、狭間より挑燈を提げて慥によく見定めて後、門樓より急ぎ下りて自ら門を開き出迎へて入れたてまつる。源君正成をして城

を守らしめば、敵に謀將ありとも敢て干すべからずとて、再三稱譽したまへり。

攝津半國の主松山新介が勇將中村新兵衛、度々の手柄を顯しければ、時の人は是を鎗中村と號して、武者の棟梁とす。服折は猩々皮、兜鍪は唐冠、金纓なり。敵之を見て、すはや例の猩々皮よ、唐冠よとて、未だ戦はずしてさきに敗れて敢て嚮ひ避く者なし。ある人、強ひて所望して中村これを與ふ。其の後戰場に臨むに、敵中村が服折と兜鍪とを見ず。此の故に競ひかゝりて切り崩す。中村戈を揮りて敵を殺す事許多なれども、中村を知らざれば敵恐れず。中村遂に戦没す。茲によつて敵を殺すの多きを以て勝つに非ず。威を輝かして氣を奪ひ、勢を撓ますの理を曉るべし。

駿州わらしなと云ふ所の民仁左衛門と云ふ者あり。生質才器膽略ありけるが、日本の中にてはさせる立身も成りがたしと思ひ、しやむろうに渡りて國王に仕へぬ。國王の弟、謀反を起し王位を篡はんとして甚だ危急なる處に、仁左衛門義を唱へ亂を撥めて殘黨まで撃ち平げれば、其の功に由つて長臣となる。後には隣國を攻め取り、勢ひ漸く盛にして四方これを恐る。此の時謀をもつてろそん舟を乗り取りたる事數多なり。ろそん舟はかんはんと云ひて、四五寸ばかりの角木を用ひて格子に組み、舳に一面に敷き渡し、敵其の舟に乗り移る時は、かんはんをひたくとおろし、かけがねを以て之をしめ、其のかんはんの格子に組みたる間より矛を以てあげさまにこれを衝く。此によつ

て戦ひ利あらず。仁左衛門灰を器に入れ、手々に持たせ舟に乗ると均しく、其の灰を振り下せば、眼に入りて仰ぎ見る事あたはず。大斧を以て忽ちかんはんを伐り折る。是より大に利を得たり。仁左衛門しやむろうにては名をおつふらと改む。一度日本に歸朝の望みあり。銀千貫目の貯なければ能はずとて之を聚む。其の時は日本人しやむろうに渡海する者多し。生國の者なれば、なつかしとて對面するに、左右に衛士を置いて劔けんを持たせ、しやむろうの衣服を着て坐す。其の體嚴重なり。終に病死して、歸朝の志達せざりき。

久世三四郎は祿五千石、鐵炮百挺、與力三十騎の頭なり。本は榊原式部大輔康政の從者たりしが、旗本に召し出さる。大坂において榊原遠江守康勝が攻口の仕寄りはいかほどつけたる。向ひの土手はとらるべしや、見て歸れとて、御使に遣はさる。久世馳せ行きて、之を見るに家臣武功の者ども、久世が今直參に成りたるを心に妬みて、其の所は鐵炮稠ひそく候。危きに只疾く歸られよと云ふ。久世靜に乗り廻りて、昔は榊原家に城と寄手の旗先の行き逢ふ程仕寄候。是は其の間いまだ遠きにあやぶまれ候や。昨今まで貴殿など、肩を並べ、膝を組み親しみし時はさも無かりしを、臆病神おくびやうがみはいつの間につきたるや、旗本の者ども是ほどの事を何とか思はんと云ひけるに、答ふる者なし。

大坂陣の時、阿部四郎五郎先手に使して歸るに、竹束の外を通る。安藤對馬守重信入らざる所の

勇ゆうなり。合戦には勇め、用心には怯つたかれと云ふ諺、誠に理に當り候。何時も内を通られよと云へば、先手の者、是を道ぞと教へ候ひぬと答ふ。重信旗本より先手に來る者をば、かく其の心を試みる習ひなり。然れども、是れ乖戾くわいれいの兵の事にして、順和の師いの義にあらず。旗本と先手と相勵ますは、強みに成り候。相争ふは弱みに成りて敗れを取るの基に候。能く自ら戒めてかゝる事を似せらるな。主將の固き御軍令を先手は忘れたりやと申されき。

大坂陣の時、平野村に失火あり。旗本の面々馳せ聚まる。安藤治右衛門後れたり。皆問ふ、如何我等は先手を心もとなく存じ行き向ひて見て參り候。とく參るべきを旗本は別事あるべからず。若し變あらば先手なりと思ひ馳せ行き候ゆゑ、往還に時移りて、遅參に及び候といへば、皆其の心掛けを稱す。

源君、いつの事にか人衆押しの時、先手の士五人を召し、二人は野原を直ぐに來り、三人は通路つうろを來る者は、人馬道に塞がりて、二度まで馬を駐めて遅々したれども、野原を來る者よりは先き達つて到る。野原は道なきに依つて、澤水田切れなどありて、此方彼方に廻はりし故なり。

大坂陣の時、源君諸牧しよぼくを勞らひ、攻口々々を御巡見あり。本多佐渡守正信、同上野介正純、成瀬隼人正政等從へり。ある陣所に至る時、鉛子えんすの來る事荐りなり。佐渡守此の所は鐵炮きびしく候

と中せども、猶ほ外に出で給ひて御返答もなし。初鹿傳右衛門、横口甚右衛門も御供なりしが、二人相共に此殿は元來鐵炮のさきを好ませ玉ふと見えたり。此よりも船場の陣には、大筒を揃へて放ちかくる處なり。いざ御供申さん。然るべしとて、御馬の口を牽き向け、れば、源君即ち船場の陣に赴き給ふ。是は阿波の手の役所にて、城より遠ければ鉛子の稀に來る所なり。源君、初鹿、横田が勇士の法を知りたる事を感じおぼしたる御氣色なり。二士の慮り尤も善し。

源君、遠州天方において天野宮内左衛門に遇うて危ふかりし時、近習僅に六七人、無類の働きをして窮難を免れさせたまへり。此の時より諸士の二男、三男、壯力の者を召し出され、軍陣にては御馬廻りに相従ふ。是を小十人と名づく。信玄も隨兵三十人、謙信も二十人あり。古は正成、義貞皆然り。

參州一向宗逆亂の時、參州の士民此の宗門多きに由つて、大半源君を叛きて國中二つに分る。源君、戦ひ危き所に、土屋長吉是も一應叛賊に與みせしが、自ら忍びずして黨を離れて源君に降る。明日の合戦に進み出で、君の恩は昭々として近く、佛の罰は冥々として遠し。よしや死後には紅蓮焦熱の苦みを受くるとも、生前まのあたり君と仰ぎて其の危急を救はずば義において人倫にあらず。是れ畜生道に入りたると同じ。汝等此の理を曉らば、早く降りて罪を謝せよと鎗を提げてかゝ

りけるが、惜しかるべし、二十三歳にて鐵炮に中つて死せり。然れども、是より士衆其の義心に感發して、引き分れ、源君に降りしかば、賊遂に平夷す。

水野六左衛門勝成、武者修行をしたる時、佐々内藏助成政の備を借りて居れり。成政の家に阿波鳴門之介と云ふ壯士あり。度々戦功ある者なり。こすに越されぬと云ふ下心を以て付けたる名なり。何れの處の戦にか、勝成其の名の故を聞いて之をにくむ。其の陣に往きて鳴門之助に對面し、貴殿はこすに越されぬと云ふ下心を以つて名を付けられたると聞及び候。明日の合戦にこすやこさずや。我と貴殿と先を争ひ候はん。如何と云へば、鳴門之助、是は皆申す者の誤りに候。祖父よりの名なる故に、我等も付けたるに候。中々この義にあらず。其の上貴公の武勇、比類少く候へば、我等如きの者先きを争はん事及ぶべからず。只御免候へと卑下したるを、勝成、再三しひけれども鳴門之助固辭す。勝成此の上はとて、人に語りて鳴門之助をぞ嘲りける。鳴門之助は勝成が氣をゆるめて、其の夜の子の刻より出で立つて、勝成が陣屋に潜に人を付け置きて窺はするに、油斷したる體なり。鳴門之助悦びて明日戦ひ始らんとする時、敵陣に馬を一文字に乗り入れ、鎗を合はせ、多兵の中にとりまかれ、數ヶ所大創を被むり息きれて仆れたり。敵首を取らんとする時、成政の總軍鬨聲を擧げて、攻め近づきければ、首を取るに隙なくして引き取りけり。鳴門之助が従者、肩に掛け

て歸りければ、幸に蘇生しぬ。此の時勝成に使を立て、今日の先登は定めて貴公にてぞ候らんと云ひやりければ、勝成面目を失へり。是れ勝成一世の不覺と云へり。

雲州の尼子と藝州の毛利と相戦ふ。尼子が將山中鹿之助は勇類を抜き、力人に絶えたり。尾州に往きて救ひを請ふ。信長其の時、明智日向守が家士、野々口丹波いまだ彦助と云ひし比、山中が旅館に至りて、陪臣の身として申すは恐れ入つて候へども、あはれ茅屋の中に駕を枉げられ候はゞ、辱じけなかるべしと請ひ求む。山中過分に候。参るべしと許諾す。斯る處に、明智今日風呂を燒き候はんと云ひければ、山中御家禮野々口に先約仕りたりと打ち笑ひ、明智も又俱に笑つて、鴈一翅鮭一尾を以て、山中をもてなせとて野々口に與ふ。野々口山中に對して、小臣不肖に候へども、時の仕合にて男役を勤めたる事三度なり。然れども敵をつき留め、首を取りて後、夢の覺めたるが如し。其の場に於て目に見る所、朦朧として首尾分明ならず。一度心ばせある者も、敵の働き、自分のかせぎ、其の次第を一々詳に語り候は生得の勇にや、不審に候と問ふ。山中感じて御邊は偽りなき人かな。詞を飾りて虚名をとる者ふみつめたる處少なき物に候。御邊の志にては尤も末たのもしく候。我今までに首供養したる事二度なり。始め鎗を合はせ首を斬る事四五度の間は我も亦御邊に同じ。七八度に及びて夜の明けたるが如し。十度に餘りては平生に違はず、敵の内胃つきよく見えて

兒戯に均しく候ゆゑ、挺をもつても打ち僵しつべし。御邊いまだ壯年なり。首數累ならば我が言ふ所を思ひ合はせられんとぞ語りける。

佐竹右京大夫義宣の家に忠野左文と云ふ士あり。戰場に臨むごとに斬首、捕虜、先登、後殿の武功其の限りなし。差物に一足去らすの忠野左文と、白き布に墨をもつて書き付けて、終に押付けを敵に見せざる大剛の者なり。ある時負軍に遭うて隊々悉く崩るれば、人蹈みとめても救ふべき味方はなし。入らざる處の犬死ぞと思ひ、引き取つて息を繼ぐ。細谷川に至つて水を飲むに差物の影水に移れり。左文自ら之を見て黒く逃げたるにはあらねど、一足去らすはいかにと人にいはれん時、答へん詞なしと、それより引き返す。敵は是を味方の歸り來るとや思ひけん、油斷したる處を真中に切つて入る。さきの躁ぎはあとに何事ぞ、後の躁ぎはさきに何事ぞとのみ云ひて、敵とも知らざる紛亂の中に、向ふ者を斬りて首を取る。折ふし日は暮れはて、敵身方とも分かざれば、そこを切りぬけて無事に歸り、朋友に其の首を見せて、右の首尾を語りければ、皆無類の勇強を嗟嘆す。是れほどの者なれども、平生の作法とる所もなし。一生の間、終に髪を結はず。わらにても手にかゝる物を以て、括り付けて置くまでなり。常に酒を好んで飲む。醉狂多し。酒肆の手形を刀にも脇差にも下緒のあき處なく結び付け、如何なる禮儀の座にも出づる體なれば、身を終るまで、何方にて

も祿二百石より上は與へられざりき。

筒井順慶の家人松倉權助、臆病者なりと人に云ひたてらるゝ故あり。松倉去つて後、蒲生飛騨守氏郷の家に來りて、臆病の者も良將の下に用ひらるゝ道あらば、御扶持を蒙り候はゞやと望みければ、氏郷思ふ子細ありとて、即ち呼び出されたり。戰國の時なるに由りて、程なく合戦あり。松倉、是において鎧を合はせ首を取る。氏郷見る所に違はずとて、祿二千石を與へて物頭とせらる。松倉、其の後の合戦に衆人に拙き出でたるはたらし、敵味方の目を驚かし、深入りして討死す。されば士卒の勇怯は生質のみに非ず。主將の士卒を帥ゐるに、道を得ると、得ざるとにある事を知るべし。松倉撃死の後、氏郷近習の者に向ひて、松倉は剛果にして大志あり。人の下に立つ者に非ず。是の故に早く取り立てたり。今之を思ふに、取り立つる事三年遅くば、無理なる撃死はすまじきを、我が過ちに由りて、あたら武士を失うたりとて、後悔せられぬ。

長岡兵部大輔藤孝は丹後を領す。其の家來下津權内助とて數度の譽ある大剛の者あり。信長の時、元龜四年七月廿八日、城州淀の城を攻めらるゝに、成將岩成主稅助、大力の聞えあり。岩成打つて出でたるを、下津之を見てわざと引き受け、橋の上にて組むと均しく橋より下に落ちたり。下津は河内そだちにて川所に住み馴れ、水練の名を得たる者なれば、水中にて岩成をつき放しては息を繼

ぎ、一刀さしてはつき放ち、三刀まで刺して首を取り、浮び出で、藤孝に見するに、急ぎ信長に獻ぜよとて、其の首を江州高橋に持參す。信長、將の首と云ひ比類なき働きなりとて、感牒並に百金を賜はりぬ。岩成常々の詞に敵と戦ひて勝負を決する時、むげに手も負はずして死するは口惜しきことならん。若し鎧刀をもつて、かなはざる時は、嚙み付いても、相手に創を付けんと云ひたりしが、下津が右の手の小指より嚙み切りたり。ある時、下津青じないの差物をさし、山の麓にて衆を抜きて、鎧を合はせ敵を追つ立つる。信長杳に之を見て、何者ぞとて軍使をもつて之を召す。下津來りて信長の前に候す。あはれ剛の武者かな。之に效はんと欲する者は、下津が計算を戴け。是れ若き者の心がけなりと下津を稱せらる。此の時褒美として腰刀を賜ふ。下津が青じないとて、他にさす者なく、名高き士なり。

小松の城主丹羽長重の將、江口三郎右衛門が從者出口と云ふ者あり。度々の手柄を顯したれども、我がまゝ者なるに由つて人之を用ひず。江口知行二百石を與へて置きたりしが、關ヶ原合戦の前、金澤の前田利長兵を發して、山口玄蕃允宗長が籠りたる大聖寺の城を攻め落し、引き取らんとする時、長重其のあとを付け慕ふ。出口眞先きに進み、首を取りたりけれども、六十有餘の武者なれば、力疲れ息喘ぎて、暫し休める處に、何者とも知らず、十四五人走り寄りて其の首を奪ひ取る。出口

大に怒りけれどもかひぞなき。出口が妻も、出口が風ありければ、半白の髪を頭上に結びあげて、自ら織りたる麻衣を着、腰に短刀をさし、片手に酒瓢を提げ、江口が陣所にゆく處を出口見て、我に得さするぞと心得て、敵の中を通りて來る事、げに淺からぬ志かな。手に提げたるは、定めて我が好物の酒なるべし。一盃酌みて喉を潤し、又首取らんと心中に悦び、妻をさしまねきて、出口は此にあり。見まがふなと呼びかけけれども、見むきもせずして過ぎにけり。其の邊にある者ども、あれ聞かれずやといへば、あの男は我が夫にて候。殿は山下にましますものを、よし首一つばかり取りたりとも、晝寝して居る者に酒のまする者や候ふべき。和殿達も、いのち限りに戦はれよと云ひ捨て、ほどなく淺井山に攀ちのぼり、酒迎ひに参りたり。それ、申し繼がせ給へと云へば、江口悦びて、南部武右衛門と云ふ剛の者と一瓢の酒を飲み盡くす。出口は妻に恥ぢしめられ、さらば首をとり、手に持ちて淺井山に上り、姫是を見よと云ひければ、妻打ち笑ひて其の首は和主の功名に非ず。此の酒こそ取りたれとて、已にあきたる瓢を打ち傾けて、見せければ、出口あの古姫に誑かされて、あだ骨を折りつる事よと、後悔の氣色を見て、江口も南部も大に之を笑ふ。

直家其の君浦上宗景を弑して、備前を篡へり。毛利家の臣、三村紀伊の守、美作備中を切り従へて、勢ひ備前を呑まんとす。直家力の敵しがたき事を憂へて、遠藤河内をして三村を殺さしめんと

謀るに、遠藤輒く領掌す。直家、大に悦びて、事成らば備前の中豊沃の地、望みに任すべしと約す。遠藤、足輕となりて三村が陣中に雜居して、其の隙を窺ふ處に、三村、夜燭を乗りて陣事を辨す。遠藤忍び寄りて見れば、家臣一人其の前にあり。仰ぐ時は隠れ、俯すときは顯る。唾をもつて穴を障子紙に穿ち、たゞ中をねらひ鐵炮を放つ。即ち胸に中りて死す。上下躁動する間、三町ばかり逃げたりけるが、心や臆したりけん、鐵炮を落したり。後の誘り免れがたしと思ひ、立ち歸りて鐵炮を取つて備前に逃れ得たり。

松平筑前守忠之の曰く、武具の輕重長短は其の力量に従ふべし。又其の好む所によれり。加藤肥後守清正は壯力の人なり。重鎧を著重ね、厚く寸延びたる刀をさし、腰にも色々の軍用の物付けられたり。加藤左馬助嘉明は小男にて力もなし。革具足を著、二尺一二寸の細き刀にて、なるほど手輕き出立なり。俱に武將の名を得られたれば、力量に従ふべき處なり。信州の士、赤井又左衛門は走り者を追ひかけ、長く重き刀にて延べかけて、左の肩さきより右の股まで斬り付けたり。赤井はしかも人並より力もなき者なり。謙信家の士中村但馬は張貫の鎧、細柄の鎗、度々の功名して終にさせる手も負はず。中村は大男にて力普通に超えたる者なり。是れ好む所によるの理なり。然れども我が心に覺悟なくしては不可なり。我が思ひ入れに妙あり。鎗刀、鉞鉞自己の信を本とす。是れ

古人の物語りを聞きて之を論る。

瀧川左近將監一益、武藏野合戦に撃ち負けて、退口に、極暑の比なれば、馬甚だ疲れて、遍身汗にひたれり。川を乗り渉す時、水を飼ふ者あり、飼はざる者あり。水を飼ふ者の馬は十町ばかりにて皆行き仆れたれども、飼はざる者の馬は別事なかりしと云へり。

大坂の役に、源君、上杉景勝をして佐竹義宣を援はしむ。景勝其の臣杉原常陸に令す。杉原相圖を定めて、のり出したり。義宣追ひ立てらるゝ處に、杉原堤の上に馬を乗り上げ、輪を三返かけたり。景勝之を見て、總軍一同は横さまに撃ちて利を得たり。堤のあなたを心もとなく思ひ、大軍進みて可なる時は、輪をかけんと約せし故なり。是れを相圖の物見と云ふ。其の品は約に由りていかやうにもあるべし。

大須賀五郎左衛門尉康政、遠州横須賀の城を守る。勝頼其の地をふみこえて、高天神に壘を構へて戍兵をおく。横須賀と其の間遠からず。勝頼の兵、横須賀の地にはたらき入りて、五十騎許りにて引きとる時、横須賀より百五十許り出でたれども跡を付けず。勝頼の兵笑つて懦弱なりと思ひて、皆追ひちらさんと云ふ。横田甚五郎是れ敵伏兵を置きて待つ者ならん。其の地を直ぐに行けば一里なり。まはれば三里なり。我先づ窺はん。すぐに乗り通らば、伏兵ありと知つて三里まはれよとい

へば、皆實に伏兵あらば、貴殿危からずやと云ふ。横田五十騎を討たん爲めに設けたる伏兵を、我れ一人に起すべからず。其の間には乗り通るに別儀あらじとて、のり出しけるが、すぐに乗り通りたり。衆皆三里をまはる。是も相圖の物見なり。

大坂の役に松平上總介忠輝、陣を取りたる處に、敵又大軍にて來つて陣をとる。忠輝戦はんと欲す。ある人諫めて曰く、我れ客兵にて未だ地形を諳んせず。且つ敵の師幾ばくとも云ふ事を知りがたし。粗忽の戦は不可なり。諸部能く謀を合せて、危からずして勝つに如かずと。忠輝之に従ふ。其の夜の内に、敵引き取りて、忠輝手を空しうす。是れ敵の陣を取りしくと、早く引き退くとの形を辨へざるに依つてなり。常に斥候の功者を用ふべし。

大坂の役に、源君、本多出雲守忠朝をして河水の増るや否やを見せしむ。歸りて曰く、水勢夥し渡るべからず。源君汝は父の子に非ず。水勢の夥しきは女童も見て之を知る。汝が目をからんや。我れ見ずしても、これを料り知る。汝をやるに心あり。これを曉らさば愚なりと仰せらる。物見使番、主將の心を察し、士卒の氣を測りて實を言はざる事あり。

大坂の役に、源君、渡邊圖書に加州の陣場を見て參れとて、御使に遣はさる。渡邊竹東の竹一本、抜きて三尺二寸五分に切り、陸際までの間を打ちて、委細に言上す。城より矢玉を飛ばすれども中

らず。後に源君與力卅騎同心百人を預け玉へり。

伊達政宗奥州にて敵と相戦ふ時、家臣茂庭周防、物見に出で、塚の上に馬を乗りあぐる時、伏兵俄に出で、周防を撃ち取りたり。引かば引くべけれども、引かざるは周防が勇なりと、これを譽むる者あり。ある人之をきゝて物見に出でたる者、敵を見て引き取るをば本より恇しとせず。物見は軍の勝負にかゝる大役なればなり。伊達家此の法なきにや、周防ほどの者、伏兵あるや否やの形を察するの道を解かず、君臣共に失なりと云へり。

豊臣秀頼、大坂籠城の時、福島左衛門大夫正則は武州江戸にあり。藝州には嫡子備後守正勝を留め置き、家臣福島丹波、尾關石見が方に使者を以て、我れ秀吉の恩厚き事世に隠れなし。汝等兩人の覺悟に由つて、備後守が武將の譽れあるべくば吾れを捨て殺せ。是れ本望なり。必ず疑ひを残されと自筆の書を與へられぬ。是において二臣、備州の前にいで、丹波今度大坂に與力せば、其の勢をもつて秀頼に服歸する者多からん。大坂方勝利においては、福島家の榮昌勿論なり。又大坂方撃ち負けて自害すと云へども、武名後昆に傳はらん。關東に一味したりとも、定めて本意とは思はれじ。世間の誹謗も口をしかるべし。石見はいかにと云へば、石見尤もなり。されども眼前に父公を捨て殺し玉はん事、天命の絶つ所、人情の惡む所、あるべくもなき事なり。只時勢を慮りて、

家を立て身を存せんこそ宜しかるべけれ。天下の大軍を引き受けて、大坂方の勝利にならん事、主の道、將の能を比ぶるに千に一理もあるべからずと云ふ。此によつて石見が議に任せて關東にぞ與みせられける。

淺野但馬守長晟、師を出して泉州榎井に至れば、大野主馬助治房大坂より出張す。兩陣相臨みて、未だ兵を交へざる處、長晟蒐りてや敵を撃たん。待つてや戦ひを決せんと、功者の異見を問はるゝに、種村澄水寺、十死一生の合戦は今日にあるべし。敵兵多く、勢ひ強からば、兵を合せずして引き取らんとするも、後より追ひかけ候はんに、身方枇杷が岨を踰え得んや。敵兵少く、勢ひ弱からば、戦を決せん事勿論に候と申せば、長晟之に従ふ。然れ共、先手の將淺野左衛門佐、同右近等可かざるに由つて、一手二手の迫合ひにて、さて止みぬ。其の時治房は貝塚に陣せしが、衆亂れて備固からず。長晟蒐りて戦はれば、敵足をもためじ、治房を討ち捕る事もあるべきに、主と將と心一ならず、謀愾はす、あたら圖をはづされたり。

大坂の時、長曾我部宮内少輔盛親は木村長門守重成が後軍として若江に向ふ。曉天に矢尾を過ぐる。藤堂和泉守高虎は千塚の堤より道明寺に赴かんとす。自分は源君に調せんため、打ち出でける道にて、之を見て引き返す。道明寺の堤下、左右深田なれば、人衆の進退自由ならず。盛親士卒を

下知して、堤の陰に引きおろし、手々に鎗を取つて、堤に傍うて伏したり。高虎の左の先、藤堂仁右衛門、桑名彌次兵衛之を見て、敵は逃ぐるぞと云ひて、備を亂して平蒐りにかゝる。盛親が兵起き立たんとする處を、起き立つ者は手打にするぞとて、馳せ廻つて之を制し、高虎の兵堤下に至る時、こゝぞと云ふまゝに、白旄を振るとぞ見えし、一同に起き立ちて、大に呼んで切り靡け突き崩し、仁右衛門、彌次兵衛を始めとして八十三騎、立ちどころに討ち捕り、急に北ぐるを追ひつむる。右の先藤堂新七郎、同玄蕃之を救ふ處を、重成、盛親挟みて又新七郎、玄蕃をも討ち捕りたり。其の手の將うたるれば、士卒の死傷は數を知らず。渡邊勘兵衛は中備なりしが、身方の敗軍をも救はず、矢尾の明神の脇に部曲を整へて居たり。敵の戦ひて疲れ追うて亂れたる處を横合に進み之を撃つ。盛親遂に敗走す。盛親堤の陰に伏したるは良策なれども、兵を分けて二手許り残し、備を立ち固めて、二の合戦を持つ事を辨へず。此によつて敗走して渡邊が名をなせり。高虎、渡邊が仁右衛門、新七郎等を見殺したりとて、責め怒られければ、渡邊は臣彼等と共に漫りに蒐らば、同じく敗れて益あるべからず。敵の亂れたる虚に乗つて二の勝を得たり。是れ古よりの兵法なり。臣なかりせば君も亦危ふからん。御感にこそ預るべけれ。却つて責めらるゝ事所存の外なりと云ふ。高虎忿恚さるに解けず、遂に渡邊を逐斥せらる。

大坂陣の時、森豊前守勝永が家士岩村清右衛門、佐治内膳鐵炮頭たり。秋田河内守俊季が鐵炮頭と堤を隔て、せり合ひけるが、勝永漫りに放つ事なかれ。放つ時は心を靜めて下げて放せと下知す。敵は堤の上に登つて透間なく放せども、放つより早く堤の下に屈伏すれば、鉛子は虚空に飛びて更に人に中らず。佐治は若武者にて、岩村は老功の者なれば、佐治常に岩村を以て目當とす。岩村鐵炮を取つて立ち上り、二放し放つ。佐治も亦然す。岩村鎗を提げて堤を走りおり、鎗を合はせんと思ふ者はこゝぞと云ひて駈け出づる。佐治も岩村と並び進む處に、敵四人鎗さきを揃へて相向ふ。佐治は岩村より先だゝんとし、岩村は佐治が後に居らず、二士競ひかゝり、却て四人を撞き御ける事十歩ばかり、敵よわめに成りたれば、堤の上より投げづきにしたる鎗、岩村が鎧の胸板に中りて、道より下に斃れたり。佐治是をも顧みず、敵をまくり立てて追ひつむる。敵短刀を抜いて、岩村が首を取らんとする時、勝永が旗本より一同に聲を揚げて、進み來れば、堤の上の俊季が兵むらくと引き退く。佐治、岩村が首をとらんとする者を撞き伏せ、抑へて首を取りにけり。

大坂陣の時、東師の將誰れと云ふ事を知らず。其の従士三人、進退の足場を見に出づ。流水、人の腰に及ぶほどの小川あり。向ふの岸に石佛あり。城兵も三人初めより川端に出で、居たり。東兵三人の中、二人は鎗、一人は鐵炮を持ちたりしが、城兵鐵炮を恐るゝと見えて、石佛を楯に取りて

其の陰に伏す。鐵炮を持ちたる者、川上に上り横筋遠に放ちかくれども、間遠きによりて中らず。是に於て鐵炮をやめ、刀を抜きて川に颯と打ち入る時、一人の者、直涉して城兵と鎗を合はす。總軍之を見て、味方討たすなとて競ひかゝる。城兵此によつて引き退く處を、二人之を追へども及ばず。終に追ひ捨て、歸る。鐵炮を持ちたる者は、一番に川を渡すといへども、敵と間遠きゆゑに、鎗を合はさず。大坂没落の後、三人の武功を賞して鐵炮を持ちたる者には五百石、鎗を合はせたる者には三百石の加増を與ふ。二人、臣等は已に鎗を合はせたる事隠れなし。勝負を付けざる事は、總軍の競ひかゝるを見て、城兵早く引き退きしに由つてなり。何ぞや、彼者川上より遠々と危ふげもなく放ちたるばかりにて、鎗をも合はせざるに、加祿の差別ある事心得がたしといへば、其の主入、石佛の陰に伏したるは鐵炮を恐れてなり。川上に上り、鐵炮を放ちたるまでは二人川を渉る事なし。鐵炮を放ち聲を揚げて、一番に川上より涉せし詞の再拜を後楯にして、川を涉せしは彼者の下知に付きたるに非ずや。川上より涉せしゆゑ、間遠にて其の内に敵引き退けば、太刀打ちにも及ばざるなり。又總軍競ひかゝらずば、二人も勝負の驗あるべし。彼者も刃を接へざらんや。彼者川上に上り鐵炮を放ちて敵のかさをとり、一番に川水に打ち入れて渉るは武功のはたばりあり。武功は強みの味ひを專とする者なり。二人の訴へ僻事と謂ふべし。二人の働も勝れざるには非ず。堪忍

するに於ては満悦たるべしとて、右の次第を書き付けて見せられ、三人共に酒飯を玉はり、其の上

に各々陣羽織を與へて慰勞せらる。大坂陣の時、阿波の手に夜撃す。蜂須賀は代々武功の家なれども、未だ軍術に練習せざる所あるか、敵橋を引きたる時、阿波の手ばかり残せり。夜撃せんためなりと、心を付けざるは不覺に似たり。橋の上に足輕十人許り番に置きたり。城兵盡く切り捨て、通るに之を知らず。其の頭の戒め嚴ならば、豈に此の如くならんや。皆熟睡してこそ居つらめと、怠惰のほど推測しぬ。又干振、烽燧等の法あらざりしか、尤も審かし。

此の夜撃は慶長十九年十二月三日子の刻ばかりの事なり。米田監物、塙團右衛門將たり。米田は米田監物と漆にて書き付けたる矢をあまた射させ、塙は夜撃の將塙團右衛門と木札に書いて道に捨てたるに由つて、二士、人に知られたり。是れ名を取るの術なり。山田五郎右衛門留めの備なり。留めの備なくして夜撃する時は付け入りにあふ事あり。此の時、城兵石村六太夫阿兵と組み、已に弱めになりければ、此の邊に味方はなきか。石村六太夫敵と組みたるぞと呼ばはりけり。折りしも石村が知音梶原太郎兵衛其の聲を聞きつけ、梶原此にありとて走り寄る。石村は上か下かと問ふ。下と答ふる詞に就いて、即ち上の敵を刺し殺し、石村を救ひ、其の首をも石村にとらせたり。

大坂の冬陣に、加藤左馬之介嘉明は留主として江戸に残され、其の子式部少輔明成は、東師に従ひて上る。嘉明は故太閤の舊臣たるを以て、若し志を大坂に通すべきやうと獨り留められたるならん。明成は父子一所にあらざれば、縦ひ異心ありとも計略成りがたく、且つ質とするの心なるべし。明成、加賀山小左衛門をして斥候たらしむ。加賀山馳せ歸りて、川を涉して御陣をすゑられ然るべく候と申す。時に佃次郎兵衛、河村權七郎武功の士にて傍にあり。佃、加賀山が言ふ所を聞きて、今寒天にて而も夜に入りぬ。士卒川を涉り候はば、必ず凍え候はん。敵若し其の虚を撃たば、身方鎗の柄、刀の把を握り得ずして、戦ひ利なかるべし。川の此方にて夜を明し、翌早旦に涉させ候はん事、軍術の理に當りて覺え候ひぬと申しければ、皆此の義に同ず。其の川は神崎の川上なり。加賀山佃が方を見合せ、徐に河村に向ひて、我等不功にして事の意を辨へず候といへども、今夜、川を涉されて宜しかるべきかと存する旨あり。此の川の上下に打ち臨む者、此の一手に限らず候。はや涉すと見ゆる軍勢もあり、豫て涉さんと思はざる陣々も、一陣渡さば吾れ劣らじと涉すべし。諸陣皆涉し果て、如し明日朝合戦の候はば、此の手は人のあとに居て、敵にも遭はず、余所の見物は武家の名を穢すに非ずや。天下を身方に持つての軍なれば、あながち勝負にも拘はるべからず。後度の事をも慮るべからず。畢竟の縮りも料るべからず。只人に先き立つて事に遭ふを専とすべ

し。人に後れては軍を全うするも國危く候。天下分裂して隣國互に戦ふ時とは道理かはり候はずや。其の時は幾重にも深思遠圖ありて、必勝を見て、後兵を合はせらるべき事かと云ひければ、河村尤もなりと云ふ。佃少し思惟して、申されたるものかな。我等が及ばざる所なり。急がせ給へて、其の夜川を涉して向うに陣をぞ取りにける。加賀山若けれども、此の理を知るは才士なり。佃が其の言に従ひて相争はぬは善士なり。是れは席上の論、縦ひ相値はずとも匡救すべし。師旅第一の大患は正兵、奇兵、右軍、左軍の將、功を争ふは敗績の基なり。是を不忠とす。攻戦の時、士衆の先をかせぐとは同じからず。今世皆臂を振つて曰く、我他の備の力を借らじと。是れ何の言ぞや。然れども、主將の法令一定せざる時は、先づ合ひて敗るゝ者を毀り、後戦ひて勝つ者を譽むる風俗ならば、將と將と仇讐たらしむるなり。譬へば一身の如し。手の及ばざる所は、足行きて之を助け、足の疼ある處は手摩りて之を安んず。彼れ足らずとせず。此れ餘りあるとせず。此の如くなるを和軍と名づく。和軍には與に鋒を争ふべからずと云へり。國郡の主、豫て此の理を説きて、諸將に熟習せしめて可なり。

卷之五

信玄、海野口にて信虎に請うて後殿たるは、小田越前盛景が謀る所なり。盛景は信虎より信玄の傳に付せらたる者なり。信虎引き取りたまへば、諸方の援ひも引き取つて、城兵すくなく且つ怠らん。是一つなり、深雪道を埋めば、敵利を見るときも跡をしたふことあたはじ。是れ二つなり。信玄これによつて乗り取られたり。是を信玄みづからしたまふ如く甲軍に記したるは非なりと云へり。信玄、甘利藤藏に多田淡路を相副へて信濃の木曾小笠原に當らしむ。互ひに相持するとき、多田謀を以て郷民を近づけ、金銀をあたへ商賣人に作りて、ひそかに敵地に入れ置きたり。其の年も冬になれば、北國の習ひ堆雪馬の足もたゝす。朔風人の膚も裂けるに由つて共に引き取り、明る三月雪消え、風舒ろになりて又對陣す。多田はじめ間に入れたる郷民に敵の有様を一々具さに問ふ。郷民敵備の體は固く見え候。あたりの野山に出で馬を馳せ、弓を以て的を射、鐵炮を以て目當を打ち候と云ふ。多田これに聞いて敵を夜撃ちにすべき謀策の候。人數不足にさふらふあひだ、今少し加勢を下され候へと、羽書を飛ばせて信玄に告げたりければ、信玄すなはち栗原下曾根に令せらる。多田二士を待ち得て夜半過ぐるほどに、敵の營を斫つて亂れ入り、騎士九十許り雜兵三百餘り討ち取りたり。信玄今度の功を稱美して其の謀策の次第をたづねらる。多田右の子細を述べて、是れ敵の虚にて候、將の令嚴かにして軍の法正しく候はゞ、隙有りげなる業をば、専らとせざる道理にて候。

前の年對陣しながら、させる戦もなく、さて止み候へば、敵これに慣ひ、今春もさあらんと戦を心とせず、味方をあなどり候。足輕をかけ小利あるべきときも、知らざる體に仕たるは、大勝を存ぜしによつてなり。遂に怠弛の氣を見付けて夜撃にいたし候と申せば、信玄感ぜらるゝことすくなからず。

信玄、小笠原長時の地を侵すとき、長時の臣犬飼左衛門は勇智ある老将なり。足輕に郷民をかりくはへ、一二千許りひきゐて鹽尻の山中にさゝへ、峯々谷々より鐵炮を以てこれを拒ぐ。信玄手痛くあたれば、按内は知りたり。四方に分散して手にたまらず推し通らんとすれば、又峯々より俄かに出で打ちしります。信玄これに由つて鹽尻を踰ゆることを得ず。信玄みづから其の山中を覗ふに日影もいたらぬ幽溪あり。冷水石間より湧き出で、猪鹿のかよふ微徑に苔ふむ跡あり。信玄これを見て、下條九兵衛に令し、步者百許りをひきゐて、かの幽溪に伏さしむ。敵もし例のごとく分散するとき、此の幽溪より出づる者あらば、前後を引包み其の將とおぼしきを洩さず撃ちとれと、委細に計をぞ示されける。犬飼又信玄を拒ぐこと始めのごとし。信玄撃ち取りて推し通るに、按に違はず六十餘りの老武者從兵二三十人ばかりにて幽溪の微徑を下る。下條伏を起し、透間もなく引き包み、自ら鎗を以て先づ彼の老武者を撞き仆し、残る者も過半討ち捕つたり。老武者はすなはち犬

飼なり。此の後、犬飼にかはるものなし。是より鹽尻を越え、ながく馳せて桔梗ヶ原に入りたまふ。戦ふ毎にかならず勝ちて長時遂に降りたるは、險を失ひて守ることを得ざるが故なり。

長時と信玄と桔梗ヶ原に於て相戦ふ。日暮におよびければ、兩軍引き退きて陣をむすぶ。明日は先づ負の凶日なり、長時はさだめて信玄もこれを忌みて懸るべからずと思ひ、怠り有らんことを信玄察せられければ、其の不意を討ちて大勝を得たり。又信玄、飛驒に働らかるる時に、破軍返にあたりて身方沮惶の心あり。信玄その色を曉り、敵を撃ち取りて、後にかけて通つて後より又これを討てば、敵かへつて破軍返に當らずやと之を勵まし、直にすゝみてこれに克つ。信玄の占候に拘はりたまはざることかくの如し。

信玄氣を見るの法を學びてこれに通ず。然れども嘗てこれに拘攀したまはず。一日、信濃の師とたゝかふ時、惡氣あり、信玄すこしも憂なく備を固くし、列を整へてこれを待ち、敵の虚をうかゞひ討ちて勝利を得たり。歸つて馬場美濃を召して氣を見るの法を信すべからず。今日かくと語られるに、美濃其の惡氣は敵の爲か、味方の爲か、辨へがたかるべく候と申す。信玄師傳の趣は身方の爲めなり。美濃御方の爲めの惡氣と思召すに由つて、合戦常よりも戒慎を加へ玉ふ。是を以て危からずして全勝を得させられたるに候。軍旅は唯縮りあるを第一とすと、豫て御意なされしは此

にて候とぞ申しける。信玄、又信濃に發向の時、鳩一つ庭前の樹上に來る。衆見て口々に私語きて喜ぶ色あり。信玄そのゆゑを問はれければ、鳩此の樹の上に来るとき、合戦大勝にあらざることなし、御吉例に候と應ふ。信玄鐵炮を以て忽ち其の鳩を打ち落して、衆の惑ひを解きたまふ。鳩もし來らざる時は衆疑沮する心ありて、戦ひ危ふからんことを慮りたまふなり。

信玄遠江に入る時、參河の師敗れたり。本多平八郎長森にて返し合はせ、きほひかゝる敵を支へ得たり。長森の橋は引きたり。其の下は水深し。敵進むことを得ず、其より前一言坂の上にて還り闘ふ者あり。場所あしくして皆追ひたてられて利なし。本多が返すを譽むるにあらず。其の返す所をほむるなり。是れ物見の地形に心を付くべきの證なり。

信玄出陣の前に必ずならしあり。是れ孫武が七計、廟算の遺意なり。軍はてて後、諸將を召して其日の勝負の理を問ひたまふ。諸將各、其の旨を云ふ。信玄聞召し、可なる時はこれを稱し、不可なるときはこれを戒しむ。故に一陣々々に功者と成りて弓矢の味ひふかし。忠義の心を第一とし、武勇の業これにつぐ。人々力を勵まして進退左右の手を使ふがごとし。其の時代の國主に勝れたる處あり。

信玄、村上義清の領分佐久郡に入りて城を攻むる時、取出に人衆かさみたり。信玄これを見て敵

の謀を察するに善きしほあひを見て、にはかに突き出でんとするならん。味方の備立よろしからずとて、取出の前を避けて、左右に分れて陣せよと、飯富、板垣が手に三井、米田兩使を以つて下知せらる。米田竹束の内に行く。三井が曰く、何ぞ竹束の外を行かざるや。米田が曰く、鐵炮しげし。中りて益なきことなり。只内に行くにしかじと。三井聽かずして獨り外をゆく。三井鐵炮を打ちかすられ、小創をかうぶりたり。兩使いたりて命を告ぐれば、飯富、板垣すなはち備へを立て直す。兩使かへるに及んで、米田が曰く、外を行かん。三井が曰く、不可なり。鐵炮おもひしより稠し。是れ見られ候へとて、打ちかすられたる鎧の跡を示す。米田聽かずして外に行く。三井は初めに懲りて内に行く。三井歸りて右の事を以て米田に問ふ。米田が曰く、君の命を承けて使したる時、もし鐵炮に中りて死せば、大事の合戦前にて勝負の分るゝ所なるを、謀遅滞せば不忠の至りなり。何ぞあやふき外を行かんや。故に身を縮め鐵炮を避くるを道とす。既に命を告げたり。又命のごとく備へたり。御返事は別にかはりたる手段もなければ、歸りて申し上げずとも害なし。歸るに及んでは男夫の勇を顯はすところなり。なんぞ内を行きて見苦しく背を曲めて、死を怕れたる形をなさんやと。三井應ふるに辭なし。信玄これを聞きて大に米田を稱せらる。三井は勝頼滅亡の後、猶ほ甲斐に居残りたり。河尻肥前守は信長長篠に於て胃を賜はり、再拜を許され、軍令を司どるほどの者

なれば、甲斐に封ぜらる。河尻無道にして國民苛虐にくるしむ。此を以て一揆起る。河尻が逃るゝところを、三井追ひつめ鎗付けて首を捕る。其の勇敢もつとも米田に劣るには非されども、米田に比するに格別に見ゆるは、剛と柔とを以て論ぜされ、功と無功と理を辨ふると辨へざるとにあり。勝頼の代に至つて、武田の威おとろへたること、兵を用ふるの意味を解らざるによれり。下條越前をして信濃の飯田の城を守らしむ。士卒合はせて四五百の頭なり。信忠これを攻めらる。勝頼より小幡因幡に命じて加勢とす。因幡は尾張が嗣子にて五百騎の將なり。此の加勢の時も、二百騎あまり總軍二千ばかりの人衆なり。因幡は大身なるゆゑに越前が下知を受けず、越前は本城の成將たるゆゑに因幡が指圖をもちひす。互に不和にして、因幡は我が從兵を引き分けて、遂に城を出でければ、其の躁動によつて守備固からず。士卒半は戦はざるさきに離散せしかば、飯田の城陥ちたりける。

氏綱伊豆に攻め入る時、ある里の家ごとに二人三人病みふしける。其の故を問はせらるゝに、壯なる者は皆亂をさけて山林に逃れ竄れ候。我等疫癘を病み候によつて、起くる事も叶はずして敵の手に死ぬをも省みず候と云ふ。氏綱憫みて其の里を侵さず、一物をも掠めとらず。藥をあたへ、食を與へられぬ。民大に悦ぶ。是より衆人聞き傳へて志を歸す。氏綱伊豆を得るの基となる。

氏康常陸の岩井の城を攻む。佐竹義重出でてこれを拒ぐ。氏康著陣の夜、義重すなはち夜討ちにす。氏康測り知つて伏を置く。義重の兵多く死傷す。岩井の民に勇者あり。二人言ひ合はせ、氏康に請うて伏の中にあり。尤も功をぬきんす。一人は岩井兵庫と號して祿をうく。一人は其の地を作り取りにして岩井の長となる。

氏康安房の師と川をへだて、對陣す。撃つべきの虚なくして日暮れぬ。北條左衛門太夫奸細を以つて敵の形勢をうかゞふに、番兵警者おこたりあり。其の告を聞いて、別將上下の瀬を大に呼ばはつてわたる。左衛門太夫は中の瀬をひそかに涉りて、夜半ばかり俄に營を斫りて入る。安房の軍、大に敗れ走る。

謙信二の宮をして越後、越中の邊塞を守らしむ。越中の神保謀叛を企て、二の宮内應せんす。謙信これをしらす。越中を攻め撃つとき、神保、二の宮謀をあはせ、一陣二陣を遣り過して、挺兵三千餘、謙信の旗本に直ちに衝いてかゝる。卒然に出でたりければ、士卒驚くところに、謙信少しも躁がず、みづから再拜を取つて猛威を奮ひ、士卒を上げまし、神保、二の宮を手痛く當て、無二無三に駈け亂されければ、一陣は遊軍となり、二陣は後備となる。神保、二の宮塞に入らんと引き取るところを、北ぐるを逐うて付け入りにし、即時に攻め落されたり。孫子の所謂常山の蛇、中

を撃てば首尾俱に至る者なるべし。或曰く、君に叛く者、其の軍必ず固からず、士卒も我が主命なれば、勢にせまりて下知に隨ふといへども、義は人の本心たるに依つて、有るまじきことなりと思ひ、實に心服せず。是れすなはち敗形なり。如し緩くせば彼が謀成らん。沮猜の心いまだ止まざるさきに、強く當れば思ひの外に脆きものなり。又日來謙信の勇悍奮疾倍々の人衆にても破りがたきことを知りて、彼が従兵恐怖を懐かん。謙信の旗本みな精銳の士なれば、叛く者を悪んで殊に憤激り鬪撃つねよりまさらん。此れ虚實の理を知るが故に、謙信何の手もなく利をえられたり。強み一偏の義にあらず。明智謀叛を起し、信長をば討ち得たれど、諸軍勢心服せず。秀吉にかぎらず誰にてもあれ、義を唱へ兵を擧げば、必ず敗るべきの虚ありと、明智が家來、後に人と語りける。

謙信十二歳より諸國に巡遊すること三年、是の故に地理を知り、人情を察す。十四歳にして越後に歸る。舍兄三郎懦弱にして爲景の仇を報ゆるの志なし。越後の老臣これを思ふ。且つ謙信の勇才を了したひて、三郎十六歳の時、隠居せしめて、謙信ゆづりを受けたまふ。姉婿正景したがはず。其の勢七千を以て謙信を攻め圍む。謙信僅に二千騎にて能くこれを捍ぎ、正景利あらず引いて歸らんとす。宇佐美駿河これを見て城門をひらきて追ひ討たんと云ふ。謙信の曰く、いまだ可ならず。宇佐美他事は君命に従ひたてまつらん。軍事は當意まづ老臣に任せられ候へと云ひけれども、謙信、汝

が言は兵法の理にかなふべし。然れども、我れ若氣ながら思惟あり。我これを討つの時を待たれよとて、七千の兵半許り引き立て、還し戦ふの志なきを見て、今こそ縦ち撃つべき期なれと云ひて、自ら再拜を振り、城よりたゞちに突いて出で、正景を追ひ崩す。正景降を請うて謙信の前鋒となる。謙信、越中を攻むるとき、敵これを拒ぐことあたはずして、深く入つて引いて歸らんとす。敵方々より出で合ひて撃つて越後の師を敗る。謙信謂へらく、信濃を出づるときは、信玄と云ふ大將あり。締めて戦ふべし。越中は分國各將なり。つよく當り、疾く戦ふにしかじとて、又越中を攻む。兵を六手七手に分けて、たゞちに攻め入りて斬略す。向ふところ寇なし。遂に越中に克ちて國士服従す。私市の城は忍の成田が弟小田助三郎これを守る。謙信これを圍む。二三の丸は本丸に離れて長橋をかけたなり。回輪つゞかず相救ふの便なし。泥淖の堅固を恃みたるばかりなり。謙信巡見のとき、婦人の影の隍の水に移るを見て、本丸はみな人質なることを曉る。こゝにおいて夜半に火を長竿の先に掛けて、俄かに本城の邊、所々に指しあげ、大に聲を發して却す。婦女はなはだ驚き遯て、敵已に城に入りたりと思ひて、二の丸にはしる。三の丸の守兵は二の丸の躁動を聞きて、敵後より不意に攻め入りたりと思ひて、二の丸に赴く。謙信はじめより手當を定め置きて、其の虚に乗りて三の丸を乗取り、その競に、二の丸を急に攻めて、即時にこれを抜きたまふ。

上杉家の將士上野の邊塞を攻むることあり。信玄後援たるに、藤岡の下、桂川、折節霖雨にて大水漲ぎれり。在家を墮ちて筏を組み、渡して是を試るに、逆巻く水におし流さる。渡らざれば後援のかひなし。渡さんとすれば溺れ死なんことをあやぶむ。奈何せんと評議せらるゝ處に、川所の功者ありけるが、古より川を渡すに小勢は沈没すれども、大勢は沈没せずと申し傳へ候。宇治川兩度の例その證據にて候。昔は遠きこと、近き比賤臣度々わたりて見候に、馬は馬を力にし、人は人を使いにして、手と手を組み、鎗と鎗を取り、大勢の競をもつて、御自身乗り入れられ、總軍一同に渡されば、少しも危ふからじと申すにつき、信玄聞き受け、すなはち下知して渡さるゝに、雜兵小荷駄に至るまで難なく渡り得て、敵を追ひ拂ひ身方を拯はれたり。

謙信戰に臨んで、俄に人衆を分けんとおもふ時、馬を部隊の中に入り入れ、八字十字に分けらるるに、其の馬の行くなりに左右に分れて、自ら又部隊となる。もし鎗持あやまりて別部に紛れ入りて、そこに在りとは相見れども、主人も來れと云ふことあたはず。鎗持も行かんとする事あたはず。太刀打のはたらしきなり。其の法の嚴なること此のごとし。

原美濃虎胤、故ありて甲斐を出奔して北條家に仕へぬ。氏康すなはち足輕の將とす。氏康、今川武田兩大將と相戦ふとき、美濃をして武田の師に當らしむ。美濃、武田は目前我が古主なり。これ

に向つて弓を引き候事快からず候。願はくは今川の手を承はらんと申しければ、氏康其の義を感じてこれを許す。此の時美濃一つの謀を用ひて勝利を得たり。戰場は駿河の賀島と云ふ處なり。川を隔てて備へをたつる。美濃は笠原新三郎が千五百許りの人衆の中に加はりて、我が一手は別に相印を付けたり。豫て笠原に云ひ合はせ、川を涉りて戦ひ半なる時、其のしほあひを見て、笠原伴りて敗るゝまねす。美濃が一手は引き分けて、残る今川の兵これを追ふ。美濃すなはち横に討つて今川の兵大に潰え奔る。其の時今川の一部美濃が手にかゝらんとす。芳賀伯耆はとめの備にて、鼓をうちて徐かにすゝむ。今川の兵すくふことを得ずして引き退くところを、美濃追ひ撃ちて、首、數百級を得たり。これを陰の横鎗と云ふ。其の形をかくして顯さざるに由つて名づく。

小山田備中、及び日向大和、長坂左衛門、信濃の海尻に於て敵にかこまる。日向・長坂は城を避けてしりぞき去る。小山田ひとり残り留つて城を守る。是れ義を專にし命を輕んずるといへども、其の理一つにては士卒恐れて、こぼれ落つるものなり。強ひて押し留めても、氣撓みて敵に合はざる先より敗形あり。共に戦ひがたし。此の時小山田が従兵みな守禦に利なからんと云ふ。小山田士卒を會め、色を正して此の城棄てて逃れ、日向・長坂が如き弱き者と共に武名をうしなひ、今までの戦功を空しうせば、此後いかなる働きありとも、一世の間の玷また磨くべからず。人に笑はれても

只閉口する許りならん。我加勢をこはずとも日向・長坂甲府に逃れ歸らば、城の危急告げずして分明なり。板垣・飢富と年來相親みて、其の心底を察するに、我敵に圍まれて死せんとするを聞きながら、片時も延ばす者にあらず。即ち兵を發して必ず後卷をすべし。糧少しといへども今十五日は支へん。我が守具全し。士卒を一つにせば、敵の多勢も城を以て比すれば對當の理なり。只勇なる者勝たん。何なる鬼神にも攻められよ。十日二十日持ちこたへすと云ふ事あるべからず。其の間に後卷あらば、敵を内外より撃つて之を卻けなば、大なる武功ならずや。此の危厄に遭へることは却て幸と謂ひつべしと、理に當り義を勸めて激勵する處、尤も切なりければ、皆心服す。按のごとく板垣・飢富聞くと均しく兩將三千許りにてこれを救ふ。信玄も是に目覺めて五六千にて馳せ來る。小山田敵を外構への内へも入れ立てず、後卷を見て能き時分に、城門を開きて突いて出で、前後より挟みてこれを撃ち、つひに大勝を得たり。

謙信の一の先手、柿崎和泉越中に在城す。毎戦に強きを破り堅きを摧くの功、等倫すくなき猛將なり。一年、北國立の馬五つ尾張に遣して賣らしむ。信長反間の本を得たりと悦んで、すなはち買ひ取り、黄金數百兩并に虎皮を柿崎にあたへ、禮を厚くして此の後も駿馬あらば必ず送り輸されよと書牒を添へて云ひつかはさる。柿崎は利欲の誹りを恥ぢて匿して言はず。或る人謙信に讒して曰く、

信長へ内通せりと。謙信大に怒りて深く察し詳かに糺すに及ばず、柿崎を越中より呼びよせてこれを責む。柿崎無禮の詞を出す。謙信手双してこれを殺さる。信長の謀によつて謙信一將を失ひたまへり。

尾張の國主織田上總介信長は、美濃の國主齋藤山城守道三と地を争ひて相戦へども常に克たず。信長これを憂へて、道三の君臣を離すべき謀をぞ運らされける。先づ兩家老に就いて使者を遣し、我は道三の敵にあらず。道三の濃姫を我に許されば嫁娶を調へて旗下に屬し、難におもむき危きを救ふべしと云ひ送られければ、道三同心せらる。信長濃姫を迎へて後、一年ほど過ぎて濃姫の熟睡するを伺ひて、ひそかに興きて外に出で、曉に至りて歸ること一月許りなり。濃姫これを怪みて、君忍びて心を通はしたまふ者あらば、あらはにの玉へ。何ぞ身を棄して、深くつゝませ玉ふぞや。妾いさゝか妬む心は侍らぬ物を、此のごろの御氣色いぶかしくこそと恨み顔なれば、信長いや去ることにあらず。我一つの秘計あり。我のみ知りて人にしらすべきことにあらねば疑はるゝも理なりとて、又前の如くすること一月ばかり。濃姫怪みてこれを問うて止まず。信長夫婦の情は淺からねど、匿すべきを隠さざれば、事泄れて謀策調ふらず。されば口を喋むも、實に隔てあるに似たりと、打ちわびたる體なれば、濃姫是程に心置かれまゐらせんとも豫ては知らざりけるこそ、女心の愚さ

なれ。古されぬべきかごとぞと今思へども、云ひかひなし。御志の厚からん方を是にはすゑさせ玉へ。妾はいづ地にも出でていなばやと、涙を流してかこちかくれば、信長詮方なき體にもてなし、城州と我とは深き仇なり。一旦和團したるは我が本意にあらず。城州の兩家老我と心を合はせ城州を殺害し、子丑の間に火を揚ぐべしと固く約束したりしが、早や五十日に及んで、毎夜星をいたゞき霜を履みて、これを望めども、未だ揚らざるは、定めて其の便を得ざるならん。火の揚ると均しく軍兵を率して、美濃に亂れ入りて、其の地を取るべし。あなかしこ、口より出す事はさて置きぬ。心にも思ふべからずとて、濃姫の方よりの使も文も守者を付けて止められぬ。兩家老には屢々使をつかはし書を送りて人のうたがひを起さしむ。尾張の將士には深夜俄かに師あらん用意して下知をまてと令せらる。道三尾張に入れ置きたる間者これを告ぐ。道三何事ならんと思ふ處に、五七日すぎて守者いつはりて少しく緩弛す。濃姫その隙をうかゞひ、具さに右の事を書きて告げたりければ、道三怒りて三家老を斬罪に行はる。是より道三の鋒稍、衰へぬ。

松永彈正少弼久秀は三好修理大夫長慶に仕へて、右筆より經上りて、家老となる。信長久秀と入魂す。或る時信長、久秀に對して貴殿は知將勇士なり。然れども一つの疵ありと云ふ。久秀請ひ問へども信長言ひ給はず。久秀問ふ事頻なり。さらば人なき所にて云はんとて人を退け、貴殿大身に

なるの道に味しと云ふ。これより久秀異心をさしはさみて、遂に三好家を滅せり。

秋山伯耆は美濃水晶山岩村城の戌將たり。信長おそれて秋山を嫉妬とす。信玄逝去ありて後、勝頼の時に至つて、信長秋山を攻むれども屈せず、招けども降らず。此の時服部と云ふ者あり。始め勝頼に仕へたりしが、後に信長にしたがふ。信長服部を召して、秋山を滅すべき良策やあらんと尋ねらる。服部が曰く、城固く將勇なり。今別に良策なし。然れども心の表裏と申すことの候。まづ欺きて見候はんとて、攻守の士卒、城の内外にてたがひに詞だ、かひをする時、夜に入りて服部實際に往きて汝等何ぞ愚將の祿を食んで自ら愧ぢざるや、龜井善六は秋山が妻に密通す、秋山これを知らず、是れ主不明にして、下不義なりと云ふ。秋山これを聞きて詞だ、かひを制止す。龜井は秋山が寵臣にて驍勇ならびなき者なり。出で戦ふときは鎧を腰に付けて首を取つてこれを懸く。空しきことなし。其の寵に恐れ、其の勇に服して士卒よく法度をまもり、心を同じうす。服部が詞だ、かひより敵なれば訟へて是非を糺すべき相手もなし。秋山いかと思はれんと愧づる心出で來にけり。秋山が閨の奥、婦女の中にも晝夜となく出入るほどの昵近なりしかども、漸く遠ざかりぬ。秋山は却つて龜井が遠ざかるを疑ひて、顔色常ならず。龜井いよく鬱々として自ら安んぜず。一封の書を殘して曰く、臣罪を侵さずといへども、更に人口を閉づることあたはず。誤りなきことを死を以て

顯はすより外に道なしとて、深く敵軍に入りて鬪没す。是より秋山が家臣龜井に及ぶ者なし。互に威を争ひて二人別心し、秋山つひに亡びける。

鼻熊の城攻に安井仁王十六歳にて初陣なれ共勇知あり。市童餅を沽るが爲めに、時々陣中に来る。仁王私に市童を城に呼び入れ、錢などを與へて敵の陣に糧をば何れの所より運ぶやと問ひければ、某の所よりと具に告ぐ。仁王悦んで歩者四五人具して城を出で、その地の道の傍に伏す。夜半過ぐる程に糧を運ぶ者果して至る。仁王射て一人を殲す。殘る者ども多兵なりとや思ひけん。糧をすてて奔散す。仁王急にこれを告げて、ことごとく城中に取り入れたり。

信雄尾張の加賀江の城に戌兵を置いて保たせらる。天正十三年五月三日に秀吉これを攻む。細川越中守忠興の家人澤村才八助、後に、大學助と云うて度々の譽ある者、一番に乗り入れ、二の曲輪の門口にて城より突いて出づる敵と鎗を合はせ、組んで勝負を決するに、才八助が日笠の指物、竹の枝にかゝりて、既に組み伏せられけるが、短刀を以て下より敵をつきつらぬく所を、城より又一人はしり來り、敵味方を問はず、誤りて上なる敵を一鎗突いて、寄手次第にちかづけば、城中に引き返す。才八助はねかへし、首を取つて忠興に見せければ、一昨日小牧において鎗を合せて、今日加賀江に於て組みうちす。其の功衆人にすぐれたり。急ぎ秀吉の本陣に持參せよと申しければ、秀吉

小高き塚の上にましますに、才八助直に御目にかくる。秀吉の曰く、此の首は平井駿河守とて當城の大將分の者なり。其方いかなる者ぞ、細川越中守家禮に澤村才八助と名のる。秀吉の曰く、越中守小牧加賀江にて戦功たぐひなし。汝等も一方の將として我が先をさすべしとて、當座の褒美を賜るべしとありけれども、褒美の物いまだ來らざるに依つて覺書に載せられたり。秀吉は褒美のため金の厨計付の大小金銀などを毎陣長持二つに充て入れて持たせらる。此の者は秀吉、源君兩御代ともに忠興の先手としてたぐひあらざる武功の士なり。

信長美濃を取つて其の勇強智謀の名ある者を扶持せらる。美濃先鋒衆と云ふ。その中に稻葉、氏江、安藤を勝れたりとす。稻葉は又その最一と稱せり。信長、紀伊の雜賀孫一郎、同若左衛門兄弟に説きて降らしめんとす。使をやるに使歸らず。其の殺さるゝや、留めらるゝやの間いまだ分明ならず。信長かさねて稻葉伊豫守に命ず。稻葉即ち彼の地に往きて、孫一郎、若左衛門は信長にくだり、尾張に來りて幕下に屬するの禮をなす。此の時信長、孫一郎に問うて曰く、はじめの使いか。孫一郎が曰く、臣これを殺す。信長の曰く、何が故にこれを殺すや。孫一郎が曰く、其の人騎歩多くひきつれ、豫て案内をも通ぜず、馬に乗りながら俄かに城門を叩き、信長の使と稱して言誇り色驕れり。謀つて臣を擒殺せんとする者なりと思ひ、本丸と二丸の間に入るとき門を閉ぢ、前後

より取りこめてことごとく討ち果し候。信長の曰く、しからば何が故に稻葉を殺さざるや。孫一郎が曰く、稻葉は其の體はじめの使と大に異り、先づ五六里前より按内を慇懃に云ひ、信長の使として來る。臣櫓に上つてこれを見れば、馬鞍かさらず、出立質素にして歩士たゞ十人許りつれて、城門の外にて馬より下り立ち、人を残し、若黨二人、草履取一人具し、威儀を正しくして徐に歩み來る。臣大にこれを感じ、自身門を開き出で迎へ、内に招き入れて口牒を聞くに、義理明かにして而も恭敬なり。股引のはづれより見れば布の下帯をしたり。是れ便ち身を儉にして財を武事に用ふる志なるべし。良士の風あるに化せられて歸服すと。信長これを聞いて、且つ笑ひ且つ歎じたまふ。信長、明智光秀に令して、秀吉に力を合せて備中の高松城を攻めさしむ。既に軍旅を率ゐて大江坂に到る時、使番を以て諸手にふれて、馬の脊を披かせ、鞅を固めさす。皆これを怪むところに、桂川を涉りて、我年來信長に怨みあり。直に本能寺に赴きてこれを攻めよと下知すれば、衆皆色をうしなひて惘然たり。夜も明方に、俄に本能寺を十重廿重に圍みて屏重門より亂れ入る。信長白綾の單衣を著、弓を持ち、矢を挟みて、今此に寄せたる者は明智か、汝等此をされ、無道に與して不義を辨へざる奴原、一々射殺さんぞと、大聲を勵まして罵り怒られければ、其の氣勢に辟易して、亂れ入りたる者共も屏重門の外に逃げ出づ。其の中に安田作兵衛一人自ら名を呼んで鎗を横たへて

進みよる。信長挟むところの矢を放たれければ、安田が左の臂うでに中る。淺手あさてなれば、肩ものかたともせず。信長を目にかけ一鎗やぶに刺さんとすれば、信長障子しやうじをはたとさして内に入る。安田追つ付け障子しやうじ越しにこれを刺す。手ごたへして鎗やぶさき動きければ、中りたりと思ひ、障子しやうじをあけて推し込まんとするところに、信長の愛童あいどう森蘭丸もりらんまる、十文字もんじを提げて走り出で、安田を縁えりさきの溝みちにつきおとす。蘭丸上より臨のぞみかゝり、をがみ撞つきにつきたりけるが、股ももの間につき入れて陽根やうこんの半なかを突き切つたり。安田其の柄えをしかと執り、上よりひく勢いきほひに引き起されて、溝みちより出づる事を得たり。即ち佩刀はいたうを抜いて蘭丸らんまるを斬る。是を始めとして、四方より攻め入れば、内より火をはなちて忽ち焼滅す。安田は後に寺澤志摩守廣高に仕へて、平野源右衛門と云ふ。秀吉、肥前の唐津からつ八万石を以て廣高を封ぜらるゝ時、平野に八千石を與へぬ。平野始め廣高と友たり。常に交會かうわいのとき、今亂世なり。もし鎗やぶさきを以て國郡こくぐんの主ぬしとならば、互たがひに十分一ぶんを以て家老かろうとせんと堅く約せらるゝに由つて、平野を尋ねて呼び出し、約言やくげんの首尾しゆびを合はせられける。天草四萬石は後、源君より加へ賜はりし所なり。森蘭丸もりらんまる十六歳むいじゅう明敏めいびんなり。信長の前に出で、明智光秀は大なるたくみを仕る體ていに候。臣に仰せ付けられ候へ。斬つて捨て候はんと申す。信長問ふ、何の故ぞ。蘭丸、今朝明智飯はんを喫し候とき、口に入れたる飯をも嚙かまず、何やら案じ入つて、手に持ちたる箸を取り落したれども覺えず。頃しよらくあり

て驚き候。これ程は何によつて按じ入り候ふべきや。天下の一大事を思ひ立つものならん。其の思ひ立つべきことを察するに、必ず逆心ならん。日來ひごろ明智が怨うらみみたてまつるべき事條々じょうじょう有り。御油斷ごあぶらあるべからずと申せども、信長承引しょういんなく、遂ついに弒ころに遇ひたまへり。

信長の二男のふたご信雄のぶおは信長の弒ころに遇ひ給ふ事を聞かざる先に、鬼頭内藏助おにがしらを京都きょうとに使用つかひして信長の動定どうていを伺はる。鬼頭山科おにがしらに至る時、伊藤安仲いとうあんちゆうに逢へり。安仲は信長の笛ふえの役なり。安仲鬼頭を見て、是は何方いづかたへと云ふ。鬼頭は又安仲に今何の故ゆゑに此こゝに来るやと問ふ。安仲涙をながし貴方きほうは未だ知らずや、信長は今朝明智が謀反ぼうはんによつて弒ころせられ玉ひぬ。我等ごときのもも圖方とほうにくれて行ゆへも知らず迷ひ出でたりと云ふ。其の時朝日の山端やまのへにさし昇る比ひなり。鬼頭且つ驚き且つ疑ふ。安仲いつはりも事にこそよれ、今信長恙つかなくましくて我等かゝる大事の偽いつはりをいはゞ、豈いかでに日本の地に身を置く處ところあらんやと云ふ。鬼頭然らば此より立ち歸りて、其方そこの言ことばを以て信雄へ申し上ぐべしと云へば、安仲尤もつともに候。證據しやうこのため、信雄の御覽ごらんじ覺えられたる物なればとて、小刀こがたなをさし替へ、信雄の居城伊勢の長島ながしまに乗りもどる。其の日の晩景ばんけいに、三十里餘さんじゆりよを馳せ著きたり。然れども其の馬うまつかれず、希代きたいの駿足しゆんそくなり。さて其の趣おもむきを申せども、信雄信ぜられされば、小刀こがたなを出して證しるしとすれども、猶ほ信ぜられず、却つて狂氣きやうきとおもはるゝ顔色かおいろなり。鬼頭やがて註進候はんとて宅たくに歸る。信雄の伽がの者梅ものうめ

心をして、鬼頭を訪うて其の體を覘はしむ。鬼頭、浴衣を著ながら梅心に出で逢ひて、我狂氣したるかと思召すに依つて其方に、覘せらるゝならん。あはれ虚説になりて切腹せば大なる幸、まことに望むところなり。虚説にあらず。切腹に及ばざらんことを憂ふるのみと云ふ。外繫に立てたる馬の湯洗ひするに嘶きて前がきす。鬼頭、馬の健盛なるを梅心に自讃す。梅心歸りて此の由を申す。日暮より諸方の早飛脚、此の事を告げ來れり。弔合戦、今日よ明日よと云うて、出陣十餘日まで延引す。その間に秀吉、備中の高松より上つて、信長の讎を報ふ。是れ信雄の無勇なり。これによつて後秀吉の爲めに領地を没收せらる。秀吉其の制し易きを知つて害あるべからずと思はれければ、大和に於て五萬石を與へらる。

三好修理大夫長慶、四國を領し、五畿をしたがへて天下を支配せんとす。其の弟三好豊前守之康入道實休をして河内の若江に居らしむ。永祿五年三月五日に畠山尾張守高政、根來法師等と和泉の久米田に戦うて實休討死す。長慶は飯盛の城にて連歌を興行す。半なる時、前句あり。

薄にまじる蘆の一むら

人々附けわづらひ、長慶も續句を思ひめぐらす處に、實休撃死の告あり。封書を披きてこれを見る。ものいはずして其の書をかたはらに置き、目を閉ぢ、しばらく思按して、

古沼の淺き方より野となりて

満座大に感ず。附けをはりて曰く、實休敵の爲めにうたれぬ。今日の連歌、此の句にて止むべしとて、即時に兵を催し、弔合戦を遂げて、長慶も危ふかりしかども、終に大勝を得られたり。

萬喜入道は上總の小多木に在城す。領知十萬石許り、久しく郡邑水旱の憂ひ庶民の苦みをも聞かざるに依つて、巡撫の人衆千四五百にて國の境に至る。結城は下野の宇津宮に在城す。貴族の臣、應南、應北は聞ゆる猛將なり。兩將萬喜を撃たんとて師を出すに行き逢ひたり。軍兵七千餘人、萬喜自若として憂ふる色なし。芳野主計、馬の前にすゝみ寄つて、君公この大敵に當り玉はん奇策妙術や候と申せば、萬喜十死一生の備なり。主計又問ふ。十死一生の備は如何。萬喜これ備の形に非ず。主計の心にあり。衆に知らしめがたとしと云ひて、兵を二つにわけ、一方は主計、一方は萬喜自ら帥ゐて、しかも先手に在り。決然たる勇銳、大敵を見て却つてこれを侮る。會釋もなく突いてかかり、斬り崩して勝利を得たり。北ぐる敵を逐ひすて、軽く引きて、地の利によりて備へを立て固む。應南應北散卒をあつめて復た戦はんとするに、萬喜兵少なければども、將剛にして軍嚴なれば戦ふことあたはずして引き退きける。

安房の里見義高と、上總の土岐小弼と相敵す。土岐を萬喜と號す。萬喜戲跳を好んで軍事におこ

たる。是れ敵をあざむかんが爲めなり。居城の門を明けかへんとす。古門いまだ成らずして日數を經たり。義高その家臣正木大膳と謀つて舟師を作りて推し寄する。舟場もと嶮岨なりしを、萬喜これを平夷にす。正木よろこんで陸にあがる時、萬喜城に飾りたる紙旗を取り收めて絹旗を立てかふると均しく古門より出で、これを討てば、正木不意に逢うて大にやぶれたり。是より義高も萬喜に壓されて與に鋒を争ふことあたはず。

志賀太郎親次は大友の家臣たり。豊後の岡の城を守る。一年薩人豊後の諸壘を攻むるに、或は降りあるひは陥り、國中大に惶るゝところに、親次一人すこしも屈せず。ある人、親次に貴殿みづから勇氣を恃まるゝとも薩人目に餘るほどの大軍なれば、其の鋒ありがたし。身死すとも寸補あらじ。されば何の爲めぞや、速に降るにしかじと諫めければ、親次色を正しくして、年來の知因たれば、男夫の義をこそ勧めらるべきに、弱みの異見は心得ず候。主君の祿を受けたる者、只此の一身のみに非ず。妻子を心安く養ひて、今日に至る迄凍餒のうれへなし。無事のときは威を争ひ座を論じて、危難にのぞみて忠を忘れ節を改めなば、人とや申すべき。古より皆死せざるなし。義は千載朽ちざるところに候。我が息の絶えざらん内に、此の城を敵の泥足にふますべきや、唯死して君恩を九泉の下に報するばかりなりといへば、此の言に感じて親次に與力す。守禦の兵凡そ六百人餘、薩人

とたゝかふこと度々なり。豊後の地薩州のために掠めらるれども、親次は岡の城を全うす。親次薩人の來り攻むるに及んで、逆へ戦うて伴り敗する事三度、薩人親次を怯しとして軍備をととのへず。たゞ競ひに乗りてすゝみ撃つのみ。是に於て親次、兵三與をわけて、薩人の攻め來る通路の山隘樹林に伏せしむ。薩人破れはしらんととき、一與は前をさへぎり、一與に中を絶ち、一與は山の半に備へて、鼓を敲ち、聲を揚げ敵の氣をうばへと、つまびらかに令して已に熟す。一月ばかりありて薩人又攻め來る。本より親次を輕慢すれば、深く入りて猥に戦ふ。親次は部曲を固うして動かす。薩人撃つこと能はずして勇氣のたゆむ處を見て、こゝの民家、かしこの藪陰より足輕五十三十に、下知人の騎士をくはへ、方々より撃つて出づ。親次しづかに旗を進むれば、薩人忽ちうらくづれして引く所を、伏兵起きて前をさへぎる。此に當らんとすれば又伏兵起きて中を絶つ。山には鼓をうち聲をあぐれば、其の響おびたゞし。薩人大にやぶれて奔散し、後をかへりみず。親次首三百八十餘級を得たり。

豊後の大友と、薩摩の島津と相戦ふ。大友、島津の地に入つて剽掠す。島津これを拒ぎて軍は明日と定めたりしが、大友の兵士大鹿劔助とて其の時十八歳、而も初陣なりしが、家老に向つて身方の敗形あり。よく察して軍定め然るべく候と、證を引きて云ふ。家老、若輩の身として何をか知

らん、無禮なりといかる。劔助もまた怒つて御爲めなれば申すなり。われは戦死すべし。貴殿は多分やぶれ走りて還し戦ふことも有るべからず。此の若輩者に劣られたらば大恥如何。嗚呼命が二つ有るならば、一つを残して後を見て笑はんものと云うて、其の座を立つ。親しき友劔助を諫む。家老に向つていはれざる詞かな。何を目當に負とは見るやと問ふ。劔助、面々心を付けられずや、我陣中を巡るに合戦を勵むに心なく、財寶に目をかけ、亂取りして北ぐる覺悟と見得たり。家老としてかく軍法整はざるをも知らず怠緩を戒めぬさへあるに、何ぞや、又我を罵ること暗愚の至り也。ともあれ明日は一番に御用に立ちて、久しく不埒なる下知を受けじ。只今より以後を見て我が言を思ひ合せられよと云ひけるが、詞をたがへず衆人の目を驚すはたらきして遂に戦死したり。劔助が云ひしごとく大友の兵大に敗れたり。

筑前の立花道雪子なし。豊後の戸次從運の末子を養ひて嗣とす。道雪卒して後、立てて家を相續す。是を立花飛驒守宗茂と云ふ。一年薩摩の師、騎歩四萬許りにて立花の城を攻むることあり。此の時從運は筑前の名島城に在りて、をりふし兵少なりしかば、家臣を聚めて謀を問はるゝに、速に此の城を避けさせられて寶滿の嶽に御登り候へ。敵立花の城を圍み候はば後卷をするにも便りありぬと申しければ、從運敵もし人衆一萬を分けて寶滿の嶽を押へ、自ら三萬をひきゐて立花の城をせめ

ば、城を攻むるの兵猶ほ餘ありて、我士卒寶滿の嶽を下ることを得じ。是れ敵を恐るゝの毀りありて身方をすくふの實なし。今城を出でて戦はゞ、薩摩の師盛なりといへども、必ず一方はうちやぶらん。力盡きて鬪死し、敵に我家門の勇義を知らしめば、立花の城を攻むるに及んで沮み畏るの意あらん。是れ五百千の援兵より却つて強みあるにあらずや。我が墓所は此の城なり。汝等老親の立花にありて外に養ふべきの便なきは皆立花にかへし、兄弟共に此に在る者は一人歸りて父祖の姓を絶たざれと、下知せられければ、皆其の詞に感じ、三百餘人共に戦死を遂げて主恩に報する時なりと、奮發の氣色あられたり。遙に薩摩の師を望めば、馬烟天を掠めて推し來る。城兵恐るゝ色あれば、從運衆に向つて盛なる哉薩摩の師。我これを考ふるに、今師に従ひて此に來る者六十以下二十以上ならん。彼戦勝つて我悉く討死すとも、彼も亦三四十年を過ぎずして同じく原野の白骨とならん。人生は朝露の晞を待つがごとし。義心を以て後世にのこし、芳名永くたえざるは武士の願ふ所なりと、力を添へらるれば、城兵の勇氣十倍せり。從運其の勢をぬかさず三百人一手に成つて、敵の大軍にてひかへたる眞中を突きわり、左右に切りなびけ、縦横に駈け亂し、斬刺七八回、薩摩の師其の死傷幾何と云ふ數を知らず。從運始めより必死と思ひ定められければ、士卒誰か残るべき。或は敵と鎗を合はせ、共に貫かれたるもあり、或は首を膝の上にならべおき、重創を被りて、自ら喉を

截るもあり。三百人の者一人も逃げ走るは無かりけり。從運初め圍みを受くる時一人の兵士に命じて立花にかへし、此の事の急を告げさせらる。彼者唯今討たれんずる主を捨て行くべき心はなけれども、又當然の義の爲めに立花に至りて其の命を達す。あはれ卑臣、從運の御馬の前にて矢にあたり、双を踏んで死すべかりし者の、是まで参り候は、此の事を申さざれば不忠に候ゆゑ、暫くおくれ候ひぬ。皆まぬがる、者なき中に、卑臣獨りのこるに忍びずと云ふ詞の下より、忽に自害してうせけるを、なべて惜まざる人ぞなき。斯くて薩摩の師立花の城を取り巻きけれども、從運に強く當てられて手なみは知りつ。城堅く將勇なれば、圍を解きて兵をかへす。是れまことに從運の力なりと謂ひつべし。

大内左京大夫義隆は九州の管領に補し、七州の太守なり。(防・長・豊・筑・備・藝・石)其の家老陶尾張守隆房、三萬貫を領して威を張り權を専らにす。又老中に相良遠江守武任と云ふ者あり。文武の才藝人にすぐれ、智略雄道他に異なり。これによつて義隆の優寵尤も甚しく、遅々たる春の晨には花間に宴に侍り、清清たる秋の夕は殿上に文を奉つる。國中の事大小となく相良が門に出ですと云ふことなし。是によつて士庶人みな手をもみ膝を屈め敬せざるものなし。陶隆房、寵をねたみ、權をあらそひ、其の心を君に失することを憤り、不意に陰謀を企て、夜中に相良を襲ひ、急に討ち殺さ

んとす。相良のがれて筑前國花尾の城に楯籠り、陶が逆心を挟むよしを義隆へ告ぐ。義隆も陶が恣に相良を責め、君をないがしろにする事を怒るといへども、群臣にはかに志を變じ、昨日は相良が門に立ちしやからも、今日は隆房が庭に賀す、上となく下となく皆陶が猛威にしたがふ。爾より隆房、王莽董卓が威をふるひ、曹操が孤をさしはさむに齊し。忠臣も目を張り胸をさするといへども、如何ともすることなし、剩へ群兵を率し君を襲ふ。義隆一生萬死にのがれ長州に出走し、居を大寧寺に移さる。陶尾張守隆房、諸卒に下知して曰く、凡そ軍の法は北ぐるを追ひ急にとりひしぐにしくはなし。餘すな、漏すな、ものどもとて、大寧寺に押し寄せ、つひに義隆を弑す。こゝに侍臣笠井帶刀左衛門尉正盛は義隆の命を請けて公方義輝へ奉使す。中國のさわぎ陶が返逆のこと、早打を以て急をつけしかば、義輝に暇を乞ひ、日夜にうち下る。兩腋に翼を生ぜざることを恨み、飛ぶが如くにして防州山口へかへり、君の居所を見れば殿堂門廡みな煨燼となり、土荒人希にして咸陽阿房の三月の火、保元平治の亂後もかくやと思ふばかりなり。適々事とふものとは曉の風、殘月花清の舊跡を照すにひとし。正盛悲歎の泪を流し、あなあさまし、關西官領累代弓馬の名をあらはしたる名家、一朝一夕にかくならせ玉ふもの哉。此の日何んの日ぞや、嗚呼かなしいかな。天か命かとして手をかへ胸を打ち、天道ものしる事あらば、我が志をかながみ、逆臣を亡し、君の御憤をやす

め、冥土黄泉までも臣が忠功を感ぜしめ玉へとて歎くに、泪つき、嗷ぶに聲をうしなふ。且つは我が妻子の行末をさへきかねば、先づ我が領地をさして歸りぬ。毛利右馬頭元就これを聞いて密にまねき相かたらはれける。然れ共、正盛は元就と志を通じて、わざと毛利家に服せず。陶に従ひて元就に内通し、籌策を以て隆房を嚴島へおびき出し、元就大勝を得たまひ、陶氏を撃ち亡し、つひに主君の讐を報じける。

卷之六

毛利元就と、陶尾張守晴賢と、相争ひて戦止む時なし。元就の謀を晴賢先づこれを知る。是を以て元就利あらず。元就これを疑ふ。晴賢が家にゆかりある盲者あり。元就の家の子たれば常に憐みをつくはへて左右に置かれたり。不審なる者は、皆盲者なりと思はれければ、諸將を聚めて我れ多知比・氏那の間に戦はんと欲す。晴賢もし軍を分けて伏兵を嚴島に置き、わが歸路を遮りて前後より引き包みて撃たば我亡びぬべし。幸に晴賢此の謀を知らずと云ひて、密に精兵二千を撰んで嚴島の木陰山隘にかくし置きて敵を待たしむ。盲者晴賢が方へかくと告げ遣りければ、本庄融以下に令

し、三千ばかり舟に込み乗りて嚴島に漕ぎ渡り、半あがるとき、二千を三手に分け、かさより落しかけて、その不意を撃つ。晴賢方大に敗北して元就方首千餘級を獲たり。本庄融も鬪死す。本庄融は晴賢が棟梁の臣たり。故に晴賢、左右の手を失ひたるがごとし。元就是より戦ふ毎に、必ず勝つて遂に晴賢を亡ぼせり。謀は深く密し、二三の大臣ならでは評議の座に出されまじき事なるに、盲者に聞かして謀の泄れたる、是れ元就の短きところなり。反間を用ひて大利を得、禍を轉じて福となせる。是れ元就の大に長ずる所なり。

信虎、多田淡路が壯年の時、足輕を預けらるゝに、多田拜して曰く、一身さへやう／＼人並のはたらきを仕り候。未だ足輕を引き廻すべき武功もなし。首二つ三つ取つて鋒に血を付け候事も、身方勝に乗るの勢に由つて首尾を合せたと申すばかりに候へば、勝負の理魁殿の道をも辨へず候。足輕をあづけ下されたりとも、有餘不足のみにて候はん間、御用に立つべき覺悟なく、不忠の至りに候とて、固く辭して受けず。それより二三年ありて又之を強ひて足輕廿人の頭とせられければ、多田度々嚴命を違きがたし。然れども廿人は過分に候とて、八人を辭して十二人を預かれり。後信玄の世までに武功を積みて七十人の將となる。騎士これに副ふ。今時知行何百石鐵炮何十挺など云うて求め仕ふる者は理に非るなり。無事の世にて覺の者死にうせぬ。主君其の器を見て預けらるゝ

より外にすべきやうなれば、茲によつて辭する者詞なくして命に従ふのみ。然れども兵法軍讖をも解せずして、是を以て名に奢る者は是れ武の道の衰へたるが故なり。

信玄孫子の旗四本を作られぬ。其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山と云ふ語なり。其の第一の旗、其疾如風の四字を染め付けて寔に鮮かなり。内藤、馬場、高坂等に見せらるゝ時、馬場の臣文の意をも辨へず、君の慮りをも知らずして申すは恐れ多き事ながら、風の字を以て軍旅の道に比するは不審に存じ候。風の勢始め甚だ烈しといへども後漸く弱り候。朝の氣は鋭く、暮の氣は歸ると云ふに相はず候や。然らば危く覺え候と申せば、信玄寔に然り。されども其の旗は先鋒にあり、疾きを善とす。吾旗本を以て其の風を繼がんと云はれければ、馬場、君深く二の身勝ちを悟らせ玉ひぬと云ふ。此の間答味あり。他國の及ばざる所なり。

信玄はたゞ敵を挫き決戦に長するのみに非ず。國を鎮め民を安んずるに智あり。他國を切り取つては、其の地を將士の知行に與ふる事なし。甲信に於て民もありつき、地も肥えたる處を新知加増に與へて、新に得たる郡邑は青地助兵衛、小堀伊勢二人を郡代として賦税を寛うし、撫安を専らにせらる。一つには久しく戰場となりたる村里なれば、耕耘も力足らずして五穀登らじ。先づこれを恵みて、其の業を樂ましめんが爲めなり。二つには小身者僅かの知行をのみ頼むに埒田を與へては、妻子

の育み、鞍鐙の繕も成りがたからんが爲めなり。三つには人情皆昔を戀ひ、始めを慕ふ習なれば、今の政を本の領主に比べて、利害損益同じからば劣れりと思ひ、勝る事二三分ならば、同じものと思ひ、又勝る事五六分にして後よしと思はんが爲めなり。是の故にや、他國には一揆を企つる者あり。信玄一代の間、手に入れたる國民の二度叛きたる事終になかりき。主將心を此に用ふべし。

福島左衛門大夫正則、尾州清洲廿萬石を領す。關ヶ原の時、源君に従つて關東に赴く。大悪日に出陣す。其の言に曰く、出でて二度歸らずと。家臣これを以て之を諫む。事の急なるに非ず、出陣何ぞ今日に限るべきやと云ふ。正則聞きて、然り、我本意實に二度歸る事なからんと欲す。我が所領少分に於て兵多からず。徒に人の尾に附くのみ。關東にて武功を拔んで大國を賜りて往かん。若し然らずば剛敵に當り堅陣を衝いて目を驚す戦死を遂げん。此の二つの者天運に任すべしと云ひて打ち立たれしが、果して軍功他に異なるを以て、安藝・備後五十餘萬石に封ぜらる。

秀吉北條氏政を伐つ時、馬船を小田原にまはさるるに、遠州の御前崎は昔より馬の事は言ふに及ばず、馬道具をも船にのせず、若し誤りて馬の皮にてしたる器さへ船中があれば、必ず破損する事度々なり。されば謹んで口に馬と云ふ事をも忌むと言ひ傳へ候と申す者あり。秀吉、自筆の牒を書きて船頭に渡し、是を龍宮に達せば、難あるべからずとて、舟ども乗り出し、彼所に至れば俄に風

雨雷電して、日中忽ち暗となる。右の牒を海に投げ入れれば風雨しづまりて船恙なし。其の狀に云はく、今度北條を誅伐するに就いて予船をして相州小田原に赴かしむ。難無くこれを通さるべきものなり。龍宮殿太閤と書かれたり。是は偶然なるべけれども、此の類の事凡民の惑より言ひ傳へて其の理なき者多し。秀吉學問の力なしといへども、生質明敏なる故にこれを識破す。然れども愚昧の船頭ども聽に慣ひて、大に恐るべき事を慮り、其の心を安んぜんが爲めなり。又災殃は氣を以てこれを迎へて、自ら招くの理を見る者歟。

源君怒つて侍臣を罵り玉ふ時、本多正信之を聞きて御前に出で、殿は何にか腹立せらるゝといへば、源君御口に沫を噴ませられて斯々の事有りと仰せらるゝに、正信誠に殿の理なり。やあ汝何ぞ此の如きの破家を盡すやと云うて傍より之を罵ること源君より甚し。正信は源君も老祖と稱せられて、名を稱せられぬ程の人なれば、首を低れてとかくを言はず。源君卻つて詞もなく、笑止に思召す御心出で来て、火氣も稍しづまりし時、やあ汝不心得にて罵せらるゝとな思ひそ。是れ汝に御教訓なり。如何となればたはことを言ひて巷を過ぐる者は心にもかゝらず、是れ本より疎きが故なり。其のたは言の半分、我が甥子にあらば、怒り責むる事少からん。是れ本より親しきが故なり。されば汝を人がましくも召し使はれんとの御心にて、斯くは仰せらるゝぞ。汝が祖父その合戦に斯様の武功あり。

汝が父その城攻にかやうの忠義あり。殿此の事御失念あるべきやと、祖父のはたらきを云ひ立つれば、源君聞し召して實にもと思召し當る色を察して、やあ汝一旦の御意に違きたるを憚るべからず、怒れば火氣のぼる。火氣のぼれば咽乾く者なり。御茶を點じて持ち参りて奉れといへば、彼者御茶を奉る。源君取つて召し上がらる。やあ汝今日より愈進んで奉公を勤めよ。少しも氣を屈せざれ。殿さ思し召すぞといへば、源君怒りおのづから解けぬ。正信世を終ふるまで、御前を黜けられ閉門したる近習の士なし。

源君同じく召使はれたる人皆一萬石を賜りたる中に、安藤帶刀直次のみ横須賀五千石を賜りぬ。源君均しく是れ一萬石なりと思し召し誤りての事なり。十年餘を過ぎて、成瀬、安藤等御前に伺候する次でに、汝等面々一萬石の領知を與へぬ。仕置、法度いかゞするぞと御尋ねあり。成瀬、臣等皆一萬石なり、安藤はたゞ五千石なりと白す。源君驚せ玉ひて、余横須賀は實に一萬石と思へり。汝成瀬等と俱に扈從勤仕し武功を累ねて與ふる所の祿なり。何ぞ多少を分たんや。汝色にも顯はさず、詞にも出さず、怨みず慍らずして今日に至る。奥深く恥しき心底なり。篤厚の至り忠義の誠と謂ひつべしとて、此に於て五千石十餘年の米穀を積んで一度に下し賜はりぬ。總べて之を筭ふれば納むるところ四五萬石に及べり。茲に由つて直次の家豊饒なり。

天正十年六月二日明智日向守光秀、信長を弑す。秀吉、備中高松に於て計を聞いて、毛利家と和を調へ、播州姫路に歸り、一日人馬を休めて京都に攻め上らるゝに、川を渉る時、水上より、木佛流れ来る。馬副是を取り上ぐるを秀吉何佛ぞと問はるゝに、大黒と答ふ。秀吉其の大黒を取りて鞍の前輪におし當て、短刀を抜いて二つに切りわりて、大黒は只千人を育む佛なりと聞けば、門出悪しと云うて捨てられたり。此の時より天下を望むの大志ありと見えたり。

池田三左衛門尉輝政、其の寵臣若原右京、中村主殿に令して諸國の浪人、武名才器ある者に、或は米穀、或は金銀を與へて扶助する者數百人、思慮ありて其の米穀、金銀の出納を問はず。是れ若し大阪に變あらば關東の御出馬をも待たず、播・備・淡の兵士に浪人を加へ自ら督して獨り之に當らんと欲するにあり。殊遇あるに由りて殊忠を致さんと思へるなるべし。されば一人にても育まんとする志第一たる故に、婦女の愛、器物の玩、此等の費を禁じて二三萬石の領主に俸し。常に人に謂ひて曰く、大國に封ぜらるゝ者禮遇篤しといへども、手足の勞を以て仕へぬべきことなし。唯多士を育み天下の干城となるのみなり。是を以て自分の娛樂を抑損して財を武備に散すと、輝政の言忠盡の將と謂つべし。

福島左衛門大夫正則、安藝・備後を召し放たれ、信濃の川中島四萬石にて左遷せらるゝ時、正則江

戸の屋敷の四方を透間なく圍みて、若し異儀に及ば、忽ちつぶさんとす。此の時巷説區々なれば、かけ落ちしたる者多し。恥ある士だに此の如くなれば、下僕は皆行方しらすなりぬ。後藤木工兵衛、熊澤半右衛門等吸炊を務めて膳を具ふ。正則齒を切みて鬪死せんと欲す。熊澤諫めて曰く、臣等御供申して突いて出でたりとも、よき敵にも遭ひがたからん。たゞ雜卒の手にかゝりて見苦しき死をせさせられれば、武將没後の玳たるべし、臣等直膚にて腹切るより外に道あるべからずと。正則怒を抑へて之に従ふ。然る所に墨付を以て廣島の城を子細なく渡さるゝに由て死を宥められぬ。林新右衛門と云ふ者あり。正則の息女の傳なり。正則の前に出でて、圍む者亂れ入り候はゞ、早く御自害然るべく候。拙臣此に候へば、奥方の事は御心を煩はさるべからず。御介借仕り皺腹を割きて殿閣に火を放ち、跡まで人口に毀られざるやうに仕るべく候と云ふ。後京師の傍に幽居す。右の義を高しとして豊祿を以て招く大名あり。林承引せず。我年七旬に餘り候へば、今は世に望みなし。殊に召し出されんとは正則身上相果て候時の一事に由てなり。さして義を守りたると申すほどのことに非ず。縦ひ拔群の功にもせよ、老體、手足進退不自由の身にて一本鎗の者、明日何事ありとも若武者どもには遙の劣りにて候。然るに高知を貪つて徵命に従はゞ、我が心を欺くにて候とて終に仕を求めず。友人之を諫めて、言ふ所は尤もなれ共、一つは子息の爲をも顧みられよと云ふ。林

我れ子共の爲めを顧みる事人に異なり。身に應ぜぬ高知を取るは恥を招くの本なり。人の禍是より生ずる事あり、位牌知行を取らせて分に過ぎたりなど人の口にかけんは子を愛するの道と云ふべからず。其の上我浪人ゆゑ子供小知にて各、主君あり。立身の爲に暇を請はせんも大なる貪欲なり。人皆命分あり。禍福は人意を以て奈何ともすべからずと云うて従はず。林たゞ危きを見て命を致すのみならず、能く義理に通ぜり。誠に此を俊傑の士と謂はざるべけんや。

秀吉奥州發向の時、佐藤忠信の冑を獻る者あり。此の冑を著るに耐へて而も忠信の名に恥ぢざる者は本多中務大輔忠勝なりとて、召してこれを賜ふ。

秀吉薩州征伐の後、軍功を以て小早川左衛門佐隆景を筑前全州に封ぜられたり。隆景恩を受くる事分に過ぐる時は、卻つて禍を招く端とならん。榮枯時あれば取捨宜しきをはかるべしと思惟して、懇に秀吉に請うて、秀吉の甥秀詮を養ひて筑前を譲る。是を筑前中納言と號す。隆景自ら欲を制して身を存す。日域の風、勇悍才略の名ある人は多し。此の如きの行跡は稀なるべし。

藤堂佐渡守高虎一つの箱を造りて書院に置き、領國伊賀、伊勢の士殉死せんと欲する者は姓名を記して此の箱の中に入れよとありけるに、簡を箱の中に入る者四十餘人あり。其の後駿府にても亦此の如くするに三十餘人あり。高虎此の簡を持ちて登城し、臣が家人皆かやうに候。是れ臣が子孫

の代までも御先を承らん時、御用に立つ者共に候。願はくは上意を以てさし止め候はんとて、源君の御目につけ、宿所に歸つて、かく思ひ入りたる上は殉死も同じ事なり。源君の嚴命違きがたし。必ず思ひ止れと堅く制せられけるに、一人右の腕に手を負ひて不具なる者あり。此の如くなる身に候間、臣は別義を以て御免を蒙るべしと云ふ。源君聞召され、和泉我が世々の先手なり。下知に忤うて強ひて殉死せんといはゞ、和泉が先手を取りあぐべしとの上意に依つて、彼の者此上はとて止りぬ。高虎の先手此の事より始れり。ある時高虎源君の御坐ありける所の障子を隔て、土井大炊頭利勝に對して、我れ年老いぬ。我死せば我が子大學頭不肖なり。大事の地にて候間、速に國替を仰せ付けられて然る可く候とぞ語られける。利勝即ち臺聽に達せらる。源君高虎を召して其の故を御尋ねあり。高虎伊賀は上國にて而も國人勇氣なり。舟に乗りて大和川を下れば、夜中に人知れずして大阪に到る。伊勢は近江、山城に鄰りて是れ又大阪に師を出すに便ある地なり。かゝる國を不肖の子に傳へ候はん事、心もとなく候。上意を承りて死せば安堵仕る可しとて、國の繪圖を出されけるを、源君具に御覽せられて、是れ他人を封ぜん國に非らず、彼の殉死せんと謂ひし二心なき者共に守らせば、何ぞ思ひを勞する事あらん。代々伊勢を易ふ可からずと仰せらる。

上野に重長と云ふ郡主あり。六萬石を領す。上杉憲政の師と相戦ふ。衆寡敵しがたき故に降參す。

憲政重長を春日門の内に固く閉ぢこめて國に歸さず。重長落髮して自ら雲林院と號す。憲政これを聞いて、雲林は其の高くして及ぶべからざるの義をふくむ者ならんと云うて大にこれを怒る。重長嘆息して付き従ふ者共に對し、あゝ吾此の門に死なんか、豫てかゝるべしとしらば、大軍に向つて戦場の白骨となり、降虜の恥をば受けじ者を、千悔速ぶなしと云うて涙を流さる。月岡左門と云ふ者、美童の時より寵せられて、此の時三十歳ばかり、斯る處まで離れざりしが、君公一度遁げ歸りて今の鬱憤を散ぜんとだにおぼしめさば、臣に一つの謀の候。御承引候はんや否やといへば、重長何なる妙策ぞと問はるゝに、月岡自殺仕るべし。首をさきに持たせ、尸骸と稱して君公藥蕙の中に入らせたまひて、血を滴て藥蕙に注ぎ、御使ひを立てられて門監に示し、君公閉鋼の中、憂苦の餘りに氣狂じ神亂れ、罪なきに侍臣月岡左門を手刃して斬り殺し候ひぬ。屍骸を山野に埋み候はんと申さば、君公輒く此の門を遁れ出でさせられて御本意を達せらるべしと、重長打笑ひて、否吾徒に戲言のみあるべくもなしとて、復た言に出されず。其の夜月岡一封の書を殘して自殺しぬ。緘を開いて之を見れば、勇士は詞を違へぬ習ひに候。御止め候ひて止まるほどならば、何ぞ言に出し候はんや。今自殺仕る。志敵に遇ひ刃を蹈みて死すると忠義異ならず候。迂濶に似候へども、通例の事にて遁れ出でさせらるべき道なし。此の上は枉げて臣が謀を御用ひ候へとぞ書きにける。重長讀み

も果さず涕泣して、鐵石の士とは斯る者をぞ云ふべき。是れを捨ておかば其の志を空しうするなり。いざさらばとて月岡が謀に任せ、老臣を使者としてかくと理りけるに、門監東條左近、老臣に向ひて常に月岡氏の高義を承り及び候。試に藥蕙の中を一鎗撞いて後門を出し候ふべし。然らずばえこそ出し申すまじけれ。藥蕙の中は是れ重長殿ならん。月岡氏の死骸にあらじと云ひければ、老臣大に氣色をかへ、是れは御詞とも覺えぬ事を承る者かな。月岡死せりといへども、眼前我等が傍輩に候。何ぞ鎗をもつて撞かせ申すべきや。貴殿斯くの如くならん時、人に撞く事を許さるべきや、出されずば出だされざるにて已むべしと怒りければ、左近笑つて貴殿は寔に器量辯才を兼ねたる人なり。月岡氏の勇、貴殿の智を以て臣として其の君此の極に遭はせられたる事は豈に天にあらずや。貴殿の言尤も理に服し候へども、聊か思慮する所の候間、叶ふまじく候とて出さざりければ、老臣空しく歸れり。左近夜に入つて、潜に來りて老臣に對面して、今日の事は各、其當る所の義に候へば、俱に怨みあるべからず。然れども月岡氏無類の忠盡を徒になし果てんも、黄泉の憤りさぞ解けがたからんと愴ましく候。明朝別人と番を代はり候間、又前の謀を用ひて御覽あれといへば、老臣何の謀か候ふべき。月岡が死骸は御門の中に葬るべき理なし。腐臭は猶ほ見るに忍ぶべからず候。出さるゝに於ては野原、山陰に埋まん存するなりと、さりげなく云ひなしけるを、左近、吾等腹心を顯

し候に貴殿何ぞ度され候や、されども貴殿に在つては、此の如くなるべきのみと云ひ捨てて歸る。老臣明日又前日の如くして、重長終に春日門を遁れ出でて國に歸る事を得たり。

稻葉内匠は備前中納言宇喜多秀家の長臣なり。怨みありて出奔せんとす。然れども笹地兵庫が武名を憚る。笹地騎士將にて某與下の士多く剛果人に超えたる者なり。稻葉年來笹地と相好からず。然れ共笹地與力せずは、欲する所遂げがたからんと思ひ、使を遣はして、我れ當家を出奔せんとす。我が存亡は貴殿の向背にありと偏に頼みたりければ、笹地則ち承引して稻葉が宅に来る。稻葉笹地が恩を荷へりと云ひて禮謝斜ならず。稻葉を來り訪ふ者あれば玄關に出で迎へて書院に請じ入れ、其の姓名を記して強ひて稻葉に與みして同じく出奔せしむ。皆脅して之に従ふ。従ふ者八人を其の家に遣はして質とす。上田土佐は鐵炮頭なり。かゝる事とも知らず、稻葉が宅に行きければ、頼母しくも訪はるゝ者かな、定めて稻葉と浮沈を共にせらるべしとの意ならんとて姓名を記さんとす。否といはゞ忽ち打ち果すべき氣勢にて、壯士七八人膝もと近く居寄りたり。上田これを罵りて曰く、御邊達の爲る所さらに心得ず、友を喧ふは一旦の禮なり。君に事ふるは終身の義なり。友を助けて君に倍く理を知らず、御邊達自ら不義に陥る事を愧ぢざるのみに非ず。却て人の義を守るを害せんとや。況んや威武をもつて我を屈服せしめんとの仕形惡逆の至りなり。我が元は喪ふとも我が

節は奪はるべからず。稻葉此の座にあらば、刺しちがへて主恩に報すべきを、出で逢はされば力なしと云ひて、刀の把を握り、座中をはたと睨んで立ち歸るに、其の猛勇にや壓されけん、又義理にや服しけん、皆手をさす者も無かりけり。

大内義隆は周防・長門・豊前全州を領す。安藝・石見の國士皆これに屬す。太宰の大貳を兼ねたる故に筑前其の令に従へり。周防の山口城に居て、威を西國に振ふ。其の比類少き大家にて懼るべき者無かりければ、漸く武備に怠りて遊宴を事とす。茶の湯、歌の會に目を送り、文道を好みて弓馬に疎く、軍事悉く大内家の元臣陶尾張守晴賢に任せられければ、晴賢異心をいだくの萌しあり。毛利元就之を察して、ある時、間を求めて、義隆の前に出で、古より國を篡ひ候事、皆其の家の大臣にて候。小身者は望みありてもならざる勢に候。然る故に明君は能く將士を帥ゐて威を下にかさず候。下にかす時は職を授け、祿を與へても、是れを君より出でたりとせず。大臣の云ひなしに由れりと思ふが故に、其の君は無きが如くにして大臣の權勢日に盛なり。されば國中の士、恩を得、心を通ずる者多くして後動し難きに至る。大臣も始めより私意あらば信用せらるべからず。始めは然らされども、君味うして己に任せられるれば、政事の是非、諸士の黜陟、皆我意を恣にして君を憚からず候。今の體甚だ危く候間、御心を付けられ、下情を審にし、細務を知り、皆自ら之をな

して、長久の謀を定められ候へと諫めけれども、義隆驚かず。遂に晴賢が爲めに弑せられたり。(陶尾張守始めは隆房と號す。後義隆を弑して晴賢と改む)

本多中務少輔忠勝、病んで卒する時、家老松下河内に書置を渡し、美濃守忠政は嫡子なれば、遺跡を嗣ぐ事公方の命の儘なり。武具・馬具・茶具等に至るまで盡く是を美濃に譲る。我黄金一萬五千兩を儲へおきぬ。次子出雲守忠朝は小身なれば此の黄金を與ふべしとの遺言なり。河内此の事を忠政に白す。忠政氣色をかへて親の遺跡は嫡子の嗣ぐ所勿論なり。親の遺物も亦嫡子の有つ所古今同じ。縦ひ書き置きたりとも何ぞ非理を用ひんやとて、黄金を封じて忠朝に與へず。河内又書置の趣を忠朝に白す。忠朝我は小身なり。金銀の用廣からず。濃州は多く士を扶持し民を賑濟す。世の變ある時は軍情の費え許多ぞや。中務我を愛し給ふが故に此の如くなれども、義において受くる所にあらずと云ひて、黄金を取る心なし。河内此の言をもつて忠政に告ぐ。忠政之を恥ぢて皆忠朝に與へたれども忠朝固く辭す。忠政は父の書置違くべからずと云ふ。忠朝は次子其の家の財を専らにすべからずと云ひて、兄弟互に相讓らる。一門の人々之を感じて、黄金を二つに分けて半を忠政、半を忠朝にと定められければ、忠朝まづ其の裁判に任せながら、急用あらば時に當りて申し請くべしとて、封を解かず。忠政の倉に置いて、身を終はるまで一金をも取らず。

寺澤志摩守廣高は肥前の唐津、肥後の天草兩城十二萬石を領す。毎日寅に起きて卯に至つて朝を見る。朝を見畢りて飯前には必ず馬場に出でて自ら一二匹をのる。飯後には鎗刀等の術を學ぶ。冬は寒三十日射を能くする者を召して、若き者共の師範として習はしむ。先づ自身卷藥を射て、各次第に之を射せしむ。夏は土用の中、鐵炮の稽古も亦此れに類す。此の時は一汁一菜の飯を廣高も共に喰うて別に美味を喰はず。夜武藝に遊ぶときは粥糝の類是れ又士と共にす。公用國政の急務なき時は西後臥床につく。曰く、夜は寐ぬべきの理なり。無用の夜話に精神疲れ、明日の勤に倦む事甚だ不可なり。近習の者も、夜早く休息せば、晝の勞働に耐ふべしとなり。在國の年ごとに、國中を巡りて、民の艱苦を問ふ。普請方、郡方の奉行に命じて、豫め水旱の憂を防がしめ、賦税、徭役の不正を正す。曰く、休暇を賜はりて領國に歸るは遊山玩水の爲めに非ず。一年江戸に在りて自身領國の政をし、訟へを聞く事なければ、法度・判斷も非理ありて士民怨み謗る者あらんか、亂の端なれば公方もそこを思召すならん。鷹野よ、川狩よ、茶の湯よ、連歌の會よとて讌樂を先とし、政令を後にするは公方の御心にも忤ひ、自己の先務にも怠るなり。國郡を巡らざる時は、其の奉行に云はせて聞くのみ。只聞くのみにて、見ぬ事は利害損益必ず盡さざる所あらんとなり。唐津は畑所にて麥多し。夏五月六月は家中の下僕、皆麥飯を食はしむ。曰く、下僕に喰はしめば其の主も喰ひて

可なり。我も諸士に下知する上はとて、右兩月は麥飯たり。又衣類木綿たるべしとて儉約を守らしむ。自分も木綿衣たり。曰く、下に令する所自ら是れに先だつを善とす。身をもつて教ふれば口ばねを折らずして下僕よく従ふとなり。凡そ廣高の行跡皆此の如し。

池田備中守長吉は輝政の弟なり。因幡鳥取六萬石を領す。長吉卒して其の子長幸家督を嗣ぐ。又備中守と云ふ。時に長吉を故備中と號し長幸を中備中と號す。長幸の時、鳥取より備中の松山に移さる。長幸卒して其の子長常家督を嗣ぐ。生質勇敢なり。士を愛し武を講ず。常に長吉以來の老將を近づけて、政事を論じ軍術を談ず。ある時、長常、我が高祖勝入は勇將なり。吾之に効はんと欲す。今もし天下の爲めに義兵を擧ぐる事あらば、我必ず士卒に先だちて自ら堅陣に當らん。汝の徒老功あり。我に代りて士卒を下知せよ。我他人の下に出なば、さらに生がひなしと語られければ、坐にある者、皆其の壯志を感ず。水野善左衛門年八旬餘、一人とかく云はざりしが、やゝありて唯今御出語清くは候へども、道理において宜しからず候。勝入公輕々しき御はたらきは領知未だ一萬石に及ばざる時の事に候。後地愈、廣く任愈、重きに至つてはさもなく候。主將は士卒の司命にて候ゆゑ、よく進退するを譽め申し候。進まんとすれども不可なる時は師を全うして退き守る事、兵法の常に候。かやうの時、退き守らせられれば、君公言を食むの毀りあらん。如し必ず其の言を信ぜんと思召

さば、君公理に忤ふの死あらん。此の如くならば、士卒誰か君公を前に置きて後に屈り居る者候はんや。矢石を冒し鎗刀に觸て、尸を累ねて撃死仕り候は、兵弱り國奪はれて、代々の御武功も君公に至りて空しくなり候べし。是れ剛に似て剛ならず候。今君公の言、臣等が聞く所はなほ改め玉ふべし。江戸において諸大名交會の中にて、御忘れ候うても、御口より出させたまふな。君公騎士二三百騎御手につけられぬ。可を見て進む時は大水の出づるが如く、不可を見て退く時は高山を遷すが如く、柔を以て剛を制するの術を得る者、此を良將と申し候。漫りに士卒に先だちて匹夫の勇に效ふを善とは申さず候。君公壯年にましますゆゑ、血氣つよきに任せ、古の良將の兵を用ふる奥意を深く察し給はず、臣が申す處、定めて御耳に逆らふべく候へ共、正をもつて對へざるは自ら欺くに候。此をもつて諫めたてまつると云ひて、左右を顧みて、各は如何と問ふ。皆尤も至極せり。水野御爲めに憚をも忘れ候と申す。長常喜ぶ色あり。何れも退出の時、獨り水野をとゞめ引いて便殿に入りて、汝の言ふ所、誠に我病門の鍼鉞なり。汝の徒と與に語る事は金言を聞いて知らざる所を知らんが爲めなり。然るに口を閉ぢば益なかるべきに、怒りに觸るるも省みずして、直言をもつて争ふは眞の忠臣、我が家の社なり。今より後、愈々所存を残さざれ。我未だ軍陣を見ず、故に大に不鍛鍊の誤なり。汝が言、武備において大益を得たり。又血つけ馬に汗さするの微功に比すべからず

とて、盃を出して此の満悦の餘りに、汝先づ飲みて我に擬せと所望せらる。水野涙を垂れて、君公は名大將なり。臣が諫め君公の明朗なるに由りて、偶々小補あるに似たり。臣何ぞ之が爲めに殘盃を奉らんやと固く辭すれば、長常之を強ふ。水野平伏して敢てせず。長常辭する事なかれ、汝の武功と壽命とに效ふべしとて許されず。水野已むことを得ずして先づ酌んで長常に獻る。其の盃を飲みて水野に酬ふ。金一掬を以つて肴とす。退いてこれを算ふ。百許り。三十二歳にして卒す。其の偉才違はず。其の行業終へず、惜しい哉長常。

時へだたり世遠くして、今は陪臣の勢益、微なり。秀吉醍醐の花見の時に、諸大名來會せらる。刀持玄關の上にあり。横目職の人、刀持を玄關よりおろすに、皆おりたり。前田利家の從者戸田越後、其の時はいまだ廿ばかりの扈從なりしが、久しく坐せるゆゑ足痿痺れて速に立たれず。とかくする所を、何者ぞ不敬なり。おりすば打擲せよと云ふ。戸田大に怒つて、士は本より高下なし。眼前にかゝる恥辱を受くべき理あらんや。身を裂かれ頭を碎かるゝとも、此の所を立ちさらじ。おろさんとならば、此の刀の勝負にありとて、把を撫で、目を瞋らして、思ひ切つたる氣色なり。横目以下是をおろさんと動擾す。利家何事ぞとて走り出でられければ、秀吉も刀を取つて出でたまへり。利家戸田を見て訶りて立ちさらしむ。秀吉彼は誰ぞと問ひ給へば、臣が扈從なり。其の故は爾々と申

されけり。秀吉座に復つて、戸田は壯士なり。用に立つべき者なれば寵任せられよとて、さらに無禮の尤はなし。

溝口外記は祿五千石、秀吉の使番たり。ある時榊原式部大輔康政と同座す。溝口は直參たるに、座上に就いて甚だ驕る色あり。康政は十萬石を領すといへども、末席に居て禮敬す。溝口縮帽子を著て我は病氣なりと云ふ。康政常に彼が無禮を惡めば、各々秀吉公の恩を荷ふ事厚し。就中渥きは溝口殿なりと云ふ。其の座にある人々誰か恩を荷はざらん。獨り溝口殿をさゝるゝは故ありやと問ふ。康政我は家康の家臣なれども、溝口殿の如きは扶持すべし。又戦功を論ぜば、溝口殿我が片手にも及ばれじ。然るに今上座して傍若無人なる體は、偏に秀吉の威を借りての事なれば、其の恩取り分け渥きに非ずやと云ふに、返答する者なし。

寺澤廣高の家に池田市郎兵衛と云ふ者あり。度々の戦功を累ねて、首供養したるほどの武士なりしが、浪人にて困窮に及びたる處を、廣高招きて、茶の代とて四百石の一村を役なしに與へらる。鐵炮廿人は并の足輕に非ず。人すくなにて不如意なるべし。使はれよとて預けらる。黒田細川家より其の池田いづくに在りとも知らずして、廣高に尋ねとられたる、残念なりと云ひて、竊に三千石を以て招かるれども行かず。臣已に饑寒に及ぶ時、廣高の恵を蒙り、今に至りて妻子を豊かに育み

候。豊祿にひかれて他家に參らん事非義に候とて承引せず。廣高此の事を泄れ聞きて、人高知を與へんといへ共、池田利を貪らずして潔白の志を存す。然るを我知らぬ體にて捨て置かんは道に違けりと思ひて、三千石を與へんとす。池田臣は元より祿の多少を論ぜず、只君の眷遇の淺からざるに由つて、今賜ふ所の一村、衣食の用に足りて歲月を送り候。毛頭此の外を求むる心なし。身上不足に存せば、餓死するとも始めより枉げては召命に應ずべからず候。當家に來りてより何の功勞もなく、剩へ御懇意のみ積り候へども、聊か報いん時知らず、今さら過分の御加増申し請けて快からず候。若し臣が武功に應じてと思召され候はゞ、御家の一老平野源右衛門八千石下され候へども、臣と同座に武者雜談はなり申さず候。茲によつて臣には一萬石下されても猶ほ十分なりとは申しがたく候が、中々手を御つけ候へば、臣が仕り置きたる男役に疵つき申候間、却て此のまゝなるが忝く候とて、固く辭して終に受けず。池田いづれの所の戦にか後殿をして引き取る事あり。見知りたる者、田の畔に腰かけて居たりけるが、池田を見て、そこを御通り候は池田殿か。重手を負うて退く事ならず候。助けて賜はらんやと詞をかくる。池田心得たりとて、我が馬に抱きのせ、馬の口を取つて引き退く處に、敵三人追つかけたり。池田踏み留まつて一人を撞き斃し、二人を追ひ拂ふ。其の後付き慕ふ者もなく、本陣に歸る。此士武名あるに由つて後黒田甲斐守長政に仕へぬ。長政件の事を聞

いて大に感稱す。長政一日廣高を訪うて閑話に及ぶ。池田を呼び出し、かやうに強きはたらきをしたる人なり。御存じかと問はるゝに、廣高拔群の戦功をも常に自ら街ふ事を仕らざる者ゆる承らず候。よくこそ語り出されたれとて悦ばれけるに、池田仰せに就いて恥ぢ入り候。其の時助けんや否やと申す聲を聞いて、こは難儀なる事かなと、まづ驚き候。敵は跡を慕ひ身方は續かず、捨て殺したりとも知る人はあるまじ。聞かぬ體にて打ち過ぎんとは存じながら我こそ後殿と思へ。萬一我よりあとに残りたる士ありて、此の者を助けたらば、二たび男は立てられまじと思ひ返し、是非なく助け申候と云ふ。長政蓋藏なき心中、百人の首を斬るより卻つて難しと讚美せらる。池田次の間へ出でたりければ、人々餘りありの儘なる返答かな。其の時の貴殿の胸中誰か知る人の候べきやと云ふ。池田我若き時より一つのたしなみの候。假初にも表裏なる言行あるまじきとの念願たるに由つて、口に虚を言はず、身に偽りを行はず候。只今兩將の御前にて少しも欺き申さば、心に恥づる處に候と云ふ。其の高義正操、世人の及ばざる所なり。池田常に隣家に行くにも鎖具足と二三日の糧とを挾箱に入れて持たせたり。夜臥す時は上より糸をさげ、鎗を其の糸に懸けて枕邊におく。取つて出づるに及んでは、糸断えてさはりなきが爲めなり。凡そ平生の覺悟皆此の類の如し。板倉伊賀守勝重は京都の諸司代たり。其の近侍の者松平太郎作よく諫む。勝重彼が律義なる事を

知つて信用せらる。一年賄方の人、ふち方升を小にす。太郎作諫めんと思つて勝重の前に出る。勝重何ぞめづらしき事はなきかと詞をかけるに、此の比狂歌をよめる者ありと申す。勝重それは汝が作意か。太郎作、臣文盲なり。何としてよみ申すべきや。

ほそき物、戀の心に、琴の糸、三郎が脚、扶持方の升。

と世上の者がよみたる狂歌に候と云ふ。其の比、三郎とて脚瘦せて細きをのこあればなり。勝重これを悟りて、其の升を改めさせられぬ。太郎作が諫め、皆此に類す。

源君、三河にて毎歳夏中は麥飯たり。近侍の人潜に白米の飯を椀の底に入れ、上に麥飯少許を蓋うて出しければ、源君御覽ありて、汝等予が心を曉らす、予を吝なると思へるか。今戦國の時にて兵役動かぬ年なし。士卒煩擾にして寢食を安んぜず。予獨り何ぞ飽き足るに忍びんや。且つ我れ一身の奉養を儉約にして、以て軍用に給せんとす。百姓を勞して自ら豊なる事をせじと仰せられれば、聞く者皆悦服せり。

源君の背に癰發す。蛤の貝を以て挟みて血をしぼり出させ玉へるに由つて、是をとがめて大に腫れ痛みて療治驗なし。時に明醫に上手あり。諸臣是に見せんと申せども、我死すとも何ぞ異域の醫に逢はんやとて御承引なし。本多作左衛門重次の曰く、殿今臣を棄てさせらるゝや。源君の曰く、

何の言ぞ。重次、殿もし此の癰癒えざる時は、臣は瞎目跛足、誰か臣が如き者に懸命の地を與へ候はんや。さすが路頭に食を乞ふには忍びずして、只自害を致さんのみ。殿御覽ぜられずや、武田亡びて甲信の士を召し出されけるに、武功拔群なるも皆臣等が末座に就て臣等を敬す。殿、臣等を慰ませたまはゞ明醫を忌ませらるべき理なしと申せば、源君御承引ありて、癰ほどなく癒えたり。景勝家、志ある士、源君癰を病で癒ゆ可らずと聞きて、信玄謙信兩大將卒して後は獨り家康のみ武將の器量あり。此の人さへ無くば、天下の弓矢は廢れんとて歎きあへり。源君傳へ聞きたまひて、謙信は信玄の死を惜めり。其の遺風今にありと深く感じまし／＼けり。

卷之七

秀吉伏見に於て源君・利家・氏郷を享せらる。此れより聚樂に往きて共に遊遊し、歸路に徳川殿の所に立ちよるべしとの事なれば、源君忝なしとて宅に歸り、聚樂にて美食の上なれば、只茶を奉るべしと云うて堂を拂ひ、庭に洒ぎ、自ら壺の口を切り、茶一袋を茶道朱齋に令して挽かしむ。明日源君聚樂の座を早く立つて歸り玉ひて、茶を御覽するに減少なり。朱齋を召して大に怒り責めさ

せらるゝ。朱齋水野監物は是をたべ候ひぬ。上への御茶なりと制し候ひつれども聞き入れ候はずと申す。監物は御寵愛の美童なり。又新に童の口を切つて別に一袋を取り出し、茶道休閑に挽かしむ。加々爪隼人、上は早や御成と申す。唯今挽き候ひては遅々仕るべし。初の御茶減少なりとも侷め奉るほどは有るべしと申せば、源君や、隼人汝は近習にて、予が口眞似をする者の、かやうの心得なきか。縦ひ茶を挽きいださずして太閤徒に販らせられて無興になるとも、已に人の飲みたる餘りを侷むる道やある。其の志ならば汝が奉公正しからじと戒められ玉へり。源君の律義なる事此の類なり。

一年大樹駿府の二の丸に一月ばかり御座けるに、源君阿茶の局を召して、將軍は壯年なり。旅すまひ既に一月なれば、枕席定めて徒然ならん。花が容貌美なり。是を使にして菓子を持たせ、うら道より忍びやかにやれ、將軍幸せられれば心をも慰めよといへ。我が命といはゞ隔あらん。汝が心得にて能くはからへと仰せらる。阿茶局さぞ候はん。御心の付きたる仰せかなとて、花時に十七八、紅粉を飾らせ、粧ひことに出で立ち、下女に菓子を持たせて、初夜の比うら道より潜かに参れり。豫て阿茶より斯くと申したりければ、大樹上下をめされて、花を待ちたまふ處に花妻戸を音づるれば、大樹自ら立つて戸をあけさせられ、花を上坐におき、菓子を戴き手をつきて御返答を仰せられ、

花とく歸られよとて、先に立つて戸口まで送らせらる。威儀正しく言詞嚴なるに由つて、花顔を赧めて立ち歸れり。其のありさまを阿茶に申せば、源君早や歸されたるか、將軍元より律義第一の人なり。我梯しても及ぶ所にあらずと仰せられける。

宇喜多直家病厚くして自ら癒ゆべからずと思へり。侍臣を呼んで殉死すべきや否やを尋ねらるゝに、皆君恩を受くること多年少からず。願はくは黄泉の下迄御供申さんと云ふ。直家悦んで約束の證にとて面々盃をさし、其の姓名を簡に書いて、我れ死せば、即ち棺の中に收めよとぞ云ひ置かれける。又戸川肥後守秀安を呼びて彼等皆殉死せんと欲す。汝は如何すべきと問はれければ、秀安、人には各能あり不能あり。臣若輩ながら戦に臨みて、堅を破り鋭を挫き候事は常に此の座中の者に劣り申さず候。是れ臣が能なり。殉死に於ては中々成り難く候。是れ臣が不能なり。君もし殉死の者を求め給はゞ、思ふに日比御歸依の法華宗の僧にしかじ。冥途は誠に此の界に異なり。僧引導するも猶ほ成佛を遂ぐと云へり。況んや殉死して直に君を導き候はゞ、必ず天堂に至らせたまふべし。臣等は武士なり。多くは修羅道に赴き候べし。僧にしかざること其の理分明に候。まして僧は元を喪ふの危きにも遭はずして、君の尊敬寵賜、臣等に十倍す。臣等矢石の難を冒し、萬死の中に一生を得たれども、却つて僧に逮ばず。君の恩遇の渥きを以つて殉死を致さば、僧尤も最一なる

べしと申せば、直家我れ惑へり。汝が言是なりとて、此より殉死を強ひられず。

越前の大守松平伊豫守忠昌病篤し。嬖臣を召して誰か殉死すべきと問はるゝに、皆殊遇を忝うして榮貴此の身に餘れり。後れ奉りては安からず、殉死仕る可しと申す者三十人に及べり。忠昌さこそあらんと悦びて盃を賜ふ。水野左膳年十七、傍に伺候す。忠昌汝は奈何。左膳賤臣は能はずと云ふ。忠昌怒つて故あらばいへ、故無くば汝を殺すべしと氣色かはりけるに、左膳今殉死仕らんと申す者は皆過分の寵幸を得るゆゑに候。美童は淫慾の愛を以て祿功臣より踰え、佞者は諂諛の事を以て君恩善士よりも勝れり。此等は別に國家の爲めになる才能もなく候へども、君の威を偷みて自ら驕奢を恣にして人禮敬を致し候。さあるに殉死仕らずば大罪人なり。必ず重刑に行はるべし。賤臣は亡父の遺跡を嗣ぎ候。寔に君の恵みには候へども、夙に興き夜に寐ね五年が間は一飯の暇少なく、勤勞彼等に倍して力を盡し忠を存じ候。然れども、爵進まず、祿加はらず、何を以てか殉死仕るべきやと申しければ、忠昌忿恚甚しく再び汝を見じとて、越府にぞ逐ひ歸されける。左膳屈せず、人御つて之を譽む。

寺澤志摩守廣高其の嫡子紀伊守が爲めに、松平大隅守家久の女を迎へんとす。之に依り、家久の家人伊勢平左衛門と云ふ者嫁娶の事に依つて唐津に使ひす。志州伊勢を馳走結構せらる。酒已に酣

に及ぶ時、醉狂にやありけん、又は志州は尾張の地土、寺澤越中守廣正が子にて、其の本微賤なればこれを侮りてにやありけん、寺澤殿を以て島津が婿とする事は、家と云ひ身上と云ひ、大に不相應の配偶哉とぞおとしめける。其の座にあり合ふ者悪き詞と思へども、兵刃に及ばんことは事の壞なれば憤を抑へて居たり。高畑新助は天艸の城代たり。祿三千石を食む。即座に刺し殺さんと思ひしが、唐津の城にて打ち果さば、君の憂となりて不忠たるべしと、其の期をのぼし、天草にて饗應して其の事を云ひ出して、これを詰るに屈服せばゆるすべけれども、猶ほ居長高に成つて前言をかへす。生けて歸さば伊勢荒言を吐きて唐津に人なしと云はんと、刀を抜いて伊勢が頭を二つに斬り割り、所存を書き置き腹切つて死す。家久これを聞いて、伊勢が非義無禮たとひ高畑これを斬らずして、國に販りたりとも死を宥むべからず。高畑が手を借りて幸に伊勢を斬りたるは尤も我が志に適ふ所なり。必ず高畑が命を助け置かれよと、早使を以て云ひ遣はしけれども、高畑已に腹切りたる上は力なし。只勇義を悼惜す。

松平豊後守重正は辱を萬乗の君にも褐夫にも受けざる人なり。日比無心なる事に相手を擇ぶは非强者なり。奴僕にも堪忍ならぬ道理あらば、乍ち打ち果して死を快くせんとぞ語られける。足輕頭に松田權六と云ふ者あり。祿八百石をうく。豊州花園をとり立て、百間厩を造り、弓鐵炮の場を築

き、池には瀧をおとし、石をたて、庭には草木の花を植ゑらる。權六奉行たり。常に私曲ありて足輕の俸米を掠めとり、撫で惠むの意なし。豊州聞きてこれを惡む。一日夙に興きて直に花園に到る。權六が従弟松田兵右衛門も相奉行たり。兩人ともに出で迎へて豊州の前に候す。豊州懷中より目安を取り出し、權六これを讀めとて投げ與へらる。手に取りてこれを讀めば、己が惡事をかぞへ擧げたる目安なり。豊州汝私曲無くば陳ぜよと云はれければ、陳じ候道なきに非らず。君命と申しながら片おちなる事に候。重ねて徐かに讒者を糺され候へと申す。豊州陳すべきの理なくば汝今腹切るべし。陳すべきの理あらば、我自ら聽かん。徐かに讒者を糺すに及ばず。汝が罪なき事を聽き得ば、讒者を戮して汝に謝せんとぞ謹められける。無理なる事ながら腹きれならば切り候べし。然れども士たる者の死するに何ぞ犬猫の如くなるべきや、沐浴の暇を賜はり候へ。其の後檢使をうけて切腹仕らんと請へども、豊州刀に手をかけ、汝自ら心を以つて犬猫とせり。何ぞ犬猫の如く死する事を厭はんや。檢使は即ち吾なり。遅々せば手うちにせんと、怒れる眼にてはたと睨まれければ、此の上は是非に及ばずとて、短刀を抜き白刃を其のまゝ握り腹をかき切る處を、兵右衛門をして介錯せさせて歸られけり。老臣大名の御身にて餘り輕々しく候と諫めければ、豊州權六は勇士なり。仕手を遣はして放し討ちにするとも、容易く討たるべき者に非らず。若しこれを曉りて己が宅に取りこ

もらば、人多くそこなはれん。これを慮りて若氣を出したり。汝が諫言は理に中れりと云ひて便ち殿に入る。

源君藤森の屋敷の厩破損に及びければ、加々爪隼人をして新造せしむ。源君雨もらば其の所ばかり茸きかへよ。壁崩るれば其のひまばかりに土つけよ。此の外は略せよと仰せらる。隼人今上方の諸大名、夏は蚊帳をつり、冬は蒲團を着せて馬を愛せらるゝ事大方ならず候。君の御厩には戸口にわらむしろを掛け、常に糶を飼はせらる。是は餘り糶相に候と申す。源君武士の馬を養ふは用に立つ處を専らにして外見を飾らず。予がわらむしろを掛け糶を飼ふ馬と、他家の蚊帳をつり、ふとんをきする馬と、事の變ある時に何れがよく險山に登り、激川を渡り、堀切を飛び踰え、深田を躍り出で、極寒酷暑を凌がん。汝必ず厩を造り馬を養ふに、上方風を效はされと堅く制し玉へり。

堀久太郎秀政旅行の時、止宿せられたる夜、村邑に失火あり。即ち人多く馳せ集まりて消しとめたり。秀政其の所の頭人呼び寄せ、人を改め一物も掠め取らざる證を見せて還されければ、其の所の商賈大にこれを感じ。其の後上總介忠輝卿の旅宿に失火あり。消しとめける事は秀政に同じけれども、人を改められず、是を以て忠輝卿は秀政に似ぬ人なり。火をばけされたれども雜人共の盜にあへり。貨財を失ひたる事、火と盜と名は異にして實は同じとぞ毀りける。あながち貨財を掠め取

りたるにもあらねど、作法正しからざるに由つて、一物を失ひたる者は十百の如く云ひなして人口の毀りを免かれず。

米村權右衛門は大野修理亮治長が草履取なりしが、大阪一亂の前にとり立てて士となしたる者なり。才器勇力ありければ、治長が恩顧よのつねならず。大阪没落の後、米村、治長が遺言を受けて、密かに其の小女を養育して匿れ居たりしを囚へて江戸に到る。殿中に於て大阪の金銀財寶を問はるゝに知らずと對ふ。汝修理が寵士なり。何ぞ知らずと謂はんや、知らずと云はゞ、責めて問へと云ふを聞きて、米村額を地に付けてありしが、頭をあげて、是は御奉行衆の御詞とも覺えず候。拙夫は鄙賤なりしを、今は士の數に入り候。修理大阪に在つて、軍陣の成敗を司り、運命の存亡をこそ且晡に計り候へ。嘗て金銀財寶を心とせず候。是を以て修理が部下も亦敵を撃ち首を取らんとのみ思うて他の慮をなすに違あらず候。理を以て申候に、城中戦に負くる時は、首領をも保たず、千萬の財寶ありとも何にか用ひ候はん。如し勝軍ならば兩將軍の御腰物まで、皆我儕が有なり。財寶を求めずして財寶にあきみち候はん。且つ申す可きの義あらば即座に申さん。申すべきの理なくば口を裂かれ舌を抜かれても申すべきや。責めて問ふとは何事ぞと、憚る氣色もなく申しければ、源君聞召し、かれは無類の剛の者なり。彼が如き者を兵衛常陸にも付け置きたき事なりとて、則ち

御赦免あり。米村、後、淺野因幡守長治に仕へぬ。衣服、飲食を賤しくして武具をきらびやかにす。治長が小女を京師に置いて育むこと懇情を盡せり。因州の祿を受けたるはこれが爲めとぞ。

江戸石垣普請の時、淺野但馬守長晟の町場深泥なるに依つて、大木を底に敷きたれども、普請半に石垣崩れたり。公儀の沙汰、長晟の身上危ふかるべしと人口聒すし。淺野采女正長重は長晟の弟なり。普請奉行に腹切らせて公儀に陳謝したまへと諫めらる。長晟聽かず。長重數諫めかねて、御爲めを存すれども用ひられずと云うて恨める色あり。長晟徐かにこれを諭して曰く、我淺野左衛門佐に令して名代とす。普請奉行は左衛門佐が下知をうくれば、石垣の崩れたる事、其の罪普請奉行一人にあらず。罪あらば先づ我に歸し、其の次は左衛門佐なり。身の難を免れんとて、辜無きを戮する事は不義なり。我これをするに忍びず。其の方此の如きの心なるが故に庶を以て嫡を襲はん事を謀る。義は上下とゞもに武士の守る所なり。義を捨て、利を取るは商賈の風なり。今試に武士を指して商賈の風ありといはゞ、必ず怒りて惡聲を復し、猶ほ止まざる時は相刃殺せん。其の名を外に恥ぢて其の實を内に省みざらんやと、長重應ふるに詞なくして止みぬ。

板倉周防守重宗は京都の所司代にて政を爲し訟を聽くに、凡慮の及ばざる所多し。此を以て名を揚げたり。本より萬事に心ある人なり。一時牧野攝津守防州の宅に詣る。防州出で逢うて談話の次

でに、貴殿馬上にて脇差のさしやう知られたるかと問はるゝに、知らずと答へければ、わろき武士哉といはれたり。又ある時、防州の宅に詣る。防州貴殿刀のねたばの付けやう鍛錬かと問はるゝに、不鍛錬なりと答へければ、わろき武士哉といはれたり。出入の者にはかく心を付けて勵まされぬ。防州、家光公に藁履一足作りて獻り、是は家康公の、軍陣には此の如きがよきと、仰せられたる藁履にて御座候。習ひ候て覺え居り候間、自身作りて指し上げ候。もし御用に御座候はゞ、いかほども調進仕る可しと申されたり。家康公御小身の時、かゝる鄙事をも御存じにて業を肇め、天下に主とならせ玉へば、成を守るの君も下々の上まで、よくしろしめさでは叶はぬ義ぞと、言はずして暗に藁履に託せて諫め奉るの心なるべし。本多内記政勝長劔を好んでこれを佩ぶ。親しき人は皆異見せばやと思ふ處に、防州政勝に對談の時、我が家禮に引肌の上手の候。勝れたる手際に候間、御望ならば贈進すべしと申されければ、政勝忝なく候。申し受くべしとの事なり。翌日二尺五寸と一尺八寸と大小二つ遣はして、是より短きは手前に仕置きたるが多く候。御用ならば又承るべしと申しおくられたり。政勝重ねて此ひきはだに合ふ寸の大小をさして防州に見せらる。防州一覽して是にて大小の寸一位短く見えて得ありと申さるれば、政勝も防州の下心を察せられたり。能き異見のしやうと謂ふべし。是皆牧野氏物語なり。

加藤左馬介嘉明の曰く、氣さきの勇なる者は、目を驚かす程のはたらきをするといへども、つめたる武功は律義なる者にあり。敵地の中に援ひなき孤城を守りて、屈撓の意なく、主人の威名おとろへ、皆、二心を懷けども獨り節を正して遷らざる、此等は律義なる者にあらずば難しと覺ゆ。又諛者は一旦拔群の勇ありとも恃むべからず。諛ひて寵を偷み、祿を得るを後指をさゝれんとは己も能くこれを知る。知つて自ら欺くは恥を省みぬ者なり。恥を省みぬ者は主人を弑しても自ら利する事をすべし。偽りと貪りと品かはれども、心の落著は同じ類なるべし。近來武名を賣るのわたり者根本の忠義少しと見えたり。此れに高知を與へて家の飾とするの説ありといへども、良將は卻つて其の家を薄く思ふべし、いかにとなれば虚の實に勝つ故なり。

氏康隱居し、國を民政に譲りて、政令を任せ試みらる。其の後氏康、氏政對話の時、氏康國の譲りを得て、今何を以て樂みとするやと問はれけるに、氏政答へて曰く、吏士を揀みて其の能否を分つ事を尤もこれを樂むと、應へらる。氏康の曰く、よし、然れども主將の吏士を揀むは是れ常なり。又吏士の主將を揀む時あり。隣國相戦ふに及んで日來吏士を愛せず、庶民を惠まざれば、去つて他邦に往きて明主良將を求めてこれに事ふ。故に吏士を愛し、庶民を惠むは主將の職分なれば、主將自らなして家の長臣にも必ず任すべからず。富貴の家に生れ、飽煖の中に長りて下情に達せず、功

を積めども擧げられず、勞を盡せども賞せられず、皆恨を懷き人心己に離れたる時、變あるに及んで、俄に甘言を加ふるとも豈に悦服せんや。さるに由つて寸功をも忘れず、一勞をも捨てず、時に褒美して愈々勵み進ましむるを事とせよ、是を調議と名づけて嫌ふ者あるは大に心得の誤りなり。平生下の功勞を偷まされと、家訓を示されたり。

秀忠公、御近習の人を召して事の次でに、道理論き者多くは道理を盡さず。是れ其の才智に馳せて事の根源をよく察せざるの誤なり。是れより外はあるべからずと思ふ事をも人に問ひ、自ら省る時は、此の碍り彼の患あり。汝等常に此の理を思はゞ、事を行ふに過失少なるべし。武士の自ら決斷して人口を憚らざるは各別の義ぞと仰せらる。

觀世左近は諺に名を得たる者なり。後剃髮して安休と號す。諺に三病あり。聲のよきと、覺のつよきと、拍子のきゝたると、此の三事備れる者多分諺に成らずして止むと、人に教へぬ。是れ何れの道にもあるべき事なり。器用を頼む者は自ら滿てりとす。自ら滿てりとする者は工夫を積まず、工夫を積まざる者は、諸藝の奥意を曉り難し。

戸川肥後守安達が家臣、寺尾作左衛門は其の比稀なる大力なり。一年江戸に行く時、僕と馬子と爭論をし出して、僕、馬子をたゝき倒しければ、其の驛の馬子ども百許り相聚り、棒を振り、礫を飛

ばせ、寺尾を中に取りこめて怒り旬しる處を、寺尾持鎗の秘の二間餘り七寸廻りばかりなるが、もし馬子を傷けたれば、後難あらんと思ひ、身の方を片手にとり、秘を以て脚を拂ひけるに、一拂ひ十人ばかり打僵す。其の氣勢に恐れて逃げ散りけり。寺尾戯れに拳を握り腕をさし出せば、力拮出でて筋は篠をふせたるが如し。細き裏刺のとき立てたるを、三尺ほど上より落しかくるに飛びかへりて腕にたたす。又縁の端に踵をかけて立ちたる所を、走りかゝりて背を撞くに、磐石を立てたる如くにて其の身少しも動かす。弟を七兵衛と云ふ。五斗入の俵一つを口にくはへて、兩の脇に挟み、二つを足にはきて歩み行くに、力を出す體に非ず。いかにも安らかなり。作左衛門が力は七兵衛に倍す。

肥前龍造寺の住人勝山左近は其の力九國に雙ぶ者なし。常に鐵杖をつく。入る時は厨のたゝき庭にゆり立つるに、土に入る事二尺許り、二三十人して之を抜け共抜けす。出づる時は片手にて引きぬくに、歩みながらにして足をも止めず。身四尺、秘一丈の雑刀を傍に置き、燈臺の上下二所に火をともし、指二つにて雑刀の鐔を持ち、下の燈心を切先に向け、上の燈心と一つにして挑ぐる事を慰とせり。その比國中にかくれなき口つよき馬あり。之に乗るに平みて駈け出づる。これを引いて口裂け血流るれども留らず、城門のくゞりを馳せ入らんとす。額くゞりの上の横木にあたらば

たまらじと思ひ、手綱を放ち兩手をくゞりの上の横木にかけ、股を以て乗りたる馬をひとしめ締めければ、四足を縮めて締め揚げられ、物を縋りたる形の如し。見る者舌を振ふ。

正木大膳は里見家の家老なり。里見家亡びて因幡、鳥取にあり。預人なるを以て國主少將光政善くこれを遇す。長大壯力、其の比等倫すべき者なし。昔をいはゞ畠山重忠などや斯くはあらんと沙汰するほどの男なり。寂寞の慰に新身の眉尖刀をうたせたり。長さ三尺許り、幅廣くかさね厚し。これを擧ぐるも容易すからず。鐙を右の指三つかけてこれを持ち、前後左右を物を斬るまねして五十も百も振る事、細き竹を振ふが如く輕げなり。人其の力の程を見んとすれども、今の身に在つては然るべからずとや思ひけん、力わざをする事少なし。房州に居たる時、六月ばかり壯年の朋友を誘ひて納涼の爲めに河邊に逍遙す。晩に及んで戯れに乳だけほどの早瀬におり立ち、あたりの民家より板戸を取りよせ、水にさかうてこれを推す。板戸半より折れたれば、水勢に堪へずと云うて、板戸三つ重ね川下より推し上ぐる。水波左右に分れて川上に往く事一二町、見る者驚嘆すと云へり。

寺澤志州の家に千賀五助と云ふ士あり。力人に勝れたり。正月二日志州唐津の城下に於て、馬揃をして見物せらる。何とかしたりけん。人喰馬轡を脱して駈け來る。千賀これを見て袴のもゝだち

を高くとり、馬場の中に走り向つて片膝をついて待つ。此の馬千賀を見て眼をひからせ牙を叩き飛びかゝる所を、立さまに平頭をいだし、推しふせて膝にて平頭をしき、手を擧げて馬副を招き、口をわりて轡をはめさせたり。

同家に遠山六兵衛と云ふ者、騎士廿人の頭にて祿千石を受く。其の力近國に聞えたり。一尺二寸の大竹を兩手にて握り、一しめしむれば乍ちわるゝを、半分ばかり割りて、それより末は片手にて皆推しわりたり。ある時筑前より反橋と云ふ相撲の上手唐津に來る。力も甚だ強く手も能く取りぬ。足輕水手などは云ふに及ばず、若手の士中にも、此の反橋に一番も勝ちたる者なし。遠山其の組の馬廻隣家の人、身近き者を宅に招き請うて相撲を興行す。反橋又三番名のりを度々し打ち笑ひて引き入る。座中より無念なる事に候。筑前に歸りて唐津には人もなきやうに申すべし。是非一番取られよと所望す。遠山さらばとて、其の場に出で、兩手を擧げて立ち向ふ。反橋潜り入る處を右手を以て、反橋が下帯の三結を取りてさし延べて振り立つれば、手足地に著かず。二ふり三ふり振つて引き擧げてゑいと云ふ聲と共に打ちつけたるに、蛙を踏みつぶしたる形の如し。鼻血流れ出でて絶え入りたるを、面に水をそゞぎ、氣付藥を興へて、半時許りの後息出でたれども左の手折れ、骨くひちがひて不具になれり。

美作の太守森内記長繼の士、高木右馬介は髻目の下より胸の毛まで聯り、長六尺許りにて力數人を兼ねたり。指先にて錢を柱にあて、四五文づつ推し込みたり。ある時ためし者を切るに目釘穴窄く、目釘竹は穴一倍大なりけるに、目釘竹を取りて目釘穴にあて、指を以てこれを推すに、目釘竹のめぐり削るが如くにかけて、目釘穴の裏迄透りたり。鐵槌を以て打てども、入るべき物にあらず。力の程、分限をなし難しと、其の友塚田新介之を語る。

松平讃岐守頼重の下に光顯寺と云ふ眞言の僧あり。日本無雙の大力なり。修行の爲めに東國に赴く時、行方を急げば、夜深に旅宿を出でて里離れになりければ、道の傍に健かなる男四五人立ち並びてさゝやく聲聞ゆ。其の年饑饉なれば追剝ならんと思へども、ゆかはやむべきにあらねば用心して過ぎんとす。かの男、やゝ御僧路錢賜はれと呼びかけて、前後より遮る。光顯寺かの男どもを人礫に打つて投げ殺さん事は安けれども、出家の慈心かけぬべし。只追ひ拂ふにしかじと思ひ、並木の松の一尺まはり程なるを走りかゝり、ゑいと云うて根引にすれば、其の邊一間許り土さけて、ぬけ出でたるを手に提げて打ち振ふに、松の枝葉大に鳴りて外には吹かぬ飄風生ず。汝等盜賊一々微塵にせんと旬しければ、是はよも人間にあらず、天狗の所爲なるべしとて、四方に逃げちりぬ。ある時馬上より行きなりに、七寸廻り程の竹を片手を以て根ながら抜くに、馬の足竝常の如くにして力

を出す體にあらず。一日或禪寺に珍客を請くるとて、新に石の手水鉢をすゑたり。光顯寺見廻に來てこれを見るに手水鉢うらおもてなり。据ゑ替へられよといへ共、はや亭午の時分なり。三十人して終日すゑたる巨石なれば、いかゞせんと云ふ時、さらば愚僧すゑ直して見候はんとて、黒衣の上にたすきをかけ、庭におりて石に手をそへ、きり／＼と推しまはすに、始め三十人してすゑたるよりも自由に見えて、八分許り入れたる水、少しも覆れず直し得たり。光顯寺座に歸りければ、禪僧かねて聞きしよりも今見て驚かるゝ力なり。さりながら諸大名祿千石二千石を與へん、還俗せられよと所望あるも、佛道の障碍なり。今日手水鉢をすゑ直さんといはるゝより顔色大に變りて常の光顯寺の面相に非ず。全く力を出さんと氣勢すさまじき體なり。是れ又佛心にそむけり。一たび出家となる上は其の用にあらず。今より後止めらるべしやと云ひければ、光顯寺尤もなりと聞きうけて、此れより身を終るまで力を出さず。

卷之八

三村紀伊守は備中半國を保ちて成岩に在城す。富民の女、容色豔麗なるを、物の便に紀州一たび

見て、其の姿目にあるが如くにて更に忘れず、文通はさん傳もがな。かゝる心を知らせばやと思ひ煩はるゝ處に、いかなるしるべにか、深夜人静まりて参り初めしより、暮れを待ち明くるを恨みて、まれの夜がれもなし。紀州精神憫々たり。此の比鬱氣したりとて出でて城外に遊ぶ。暮れ過ぐるに及んで、迢に山上を見れば、鞠の大なる光り物、飛び來りて城中に入つて屋宇の間に藏る。家老怪みて近侍の士にこれを詰り問ふ。近侍の士密通の事を告げて、かの女の來る所歸る所を知らずと云ふ。家老入つて諫めんとす。近侍の士此の事深く忍ばせらるれども、相談の爲め申したるに候。小臣まづ諫め申すべし。猶ほ御承引なくば其の時宜しく御はからひ候へと云へば、家老尤も同す。近侍の士、紀州の前に出で、昨暮山上の光物飛び來りて御城に入り候を御覽せられ候や。此の比の御惱み魘魅の祟あるか。色々不審しき事ども御座候。古へもさる例なきに非ず。御氣を付けられ候へかすと申せば、紀州心得たりと、其の夜鉗を以て竊にかの女の髪を少し許り斷りて懷中に入れ置き、明日取り出でて之を見れば、毛髮銀針の如し。紀州大に驚いて近侍の士を呼びて之を示す。近侍の士此の事猶豫すべからず。小臣今夜閨閣の外に待ちて、執へて刺し殺し候べしと云へば、紀勢不可なり。かの女臥床に就かざる前氣ゆるまるべからず。萬一仕損ぜば悔ゆとも何ぞ及ばん。前夜髪を斷たれて自らおぼえば必ず疑ふ心あらん。我れ溫語をもつて其の情を解きて後汝にも

知らせんぞ。汝早まるなと制せらる。夜半過ぐるほどに閨中俄に躁動す。近侍宿衛の者ども起き合はせ、戸を推し破りて入つて見れば、紀州氣絶えて頃くありて目を見聞き、我れ絶入せし事無念なり。されどもかの女よも活きじ。戸外に立つて、今宵は心常ならず。此れより皈らんと云ひしを、なだめて呼び入れ、いつより懇にかたらひ、かの女の少し睡るを待ちて則ち胸にのりかゝり、三刀まで刺したる處に、我を脇に挟みて天井に飛び上る。我堅く捉へて手を放たず、天井より落ちたりしが、夢のやうにて覺えずとぞ語られける。天井破れ、それより血流れて避くるに所なし。夜明けて光物の來る所の山に人を遣はして、血を印に尋ねさせられければ、三里餘り深山に入つて巖穴あり。血此の巖の口に至つて止まる。怕れて入る者なし。壯力の士一人腰に繩を付けて這ひ入る事二三十間、内暗くして何とはしらず死したる體なれば、其の足に繩を付けて出で、後、是を引き出して見れば、老嫗の長六尺餘り、白髪は一丈許りにて面背に覆へり。胸に大なる創三つありて死せり。其の後紀州病癒えぬ。

慶長の比、成田治左衛門と云ふ者あり。京師にて妻を迎へて情意殊に厚かりしが、三年にして妻病んで死せり。死期に臨みて成田が手を取りて涙を流し、形は煙ともなれ土ともなれ、魂は君邊を立ちはなれじと云ひけるが、死して數日の後深夜に亡妻來りて、成田が枕もとに居よりて打ちしをれた

る姿なり。成田信ぜず、死したる者の二たび来るべき理なし。汝は定めて妖魔ならん。然れども妻の形なれば斬るには忍びずと云ひければ、今はの時申せし詞を忘れさせたまふや、殿を慕ひまわらする魂の参るなり。無き形は斬り給ふとも創つかじとて、三年の間の契り深かりし事ども言ひ出して泣きかこち、明方近く成りて立ち歸る。此より毎夜甚雨疾風にも来りければ、後には馴々れて厭ふ心もうせ、存生の時の如く枕並べて打ちかたらふ。されども心根さらに解けがたくて、俄に駿府に下りて之を避く。翌夜妻又来りて生を隔つれども心を隔てず、何とて嫌ひたまふやと執心愈々深ければ、成田一月ばかり斯くてありしが、さらば海路を隔てんと思ひ、早馬にて大坂に上り、船に乗りて中川修理大夫秀重の城下に赴く。折ふし順風にて六七日にて下り著きぬ。未だ三日も過ぎざるに、妻又来りて縦ひ千萬里の大海なりとても、思ひ入つたる魂の通はぬ方はなき物を、心盡しに所なかへたまひそ。秋津洲の中はまだ近し、高麗唐土の果までも、殿の住みたまはん方にまゐるべしと云ふ。成田力に及ばず、此に一兩年を送れり。成田生資愛敬ある者にて相親む人多かりしが、成田夜話を好まず。強ひて止むれば止まりながら、亥の時になれば睡り入つて何事も覚えぬ體なり。其の故を問へども笑ひて言はず。成田閨中に入れば誰ともなくさゝやく聲、外に聞ゆなど云ふ者あれば、大に之を怪みて、毛利内膳、舟橋半左衛門、石田半右衛門、尾關源右衛門、村井津右衛門、五人

云ひ合せて日暮れより成田が宅に行く。成田出で合ひて例の如く早く夜食を出す。五士今夜此に来る事は、常々貴殿に不審する事を見届けん爲めなり。明くるとも歸るべからずといへば、成田其の座に居たるが、夜の更け行くに隨ひて睡り入るを、推し動かせば驚きしが、後に横に仆れて鼻息ばかりはありながら死人の如し。小袖を引き被けて傍におき、五士相向ひて坐せり。夜半過ぐる比、身の毛立ち、ふるひわなゝきて齒もあはず。互に拳を握り膝に當て、目と目を見合はすれども、相手なければ、こはいかにと云ふばかりなり。半時ほどありて漸く胸もをさまりけるに、外より障子をあくる音あり。之を見れば十七八には過ぎじと見ゆる女の、色白く髪長きが閨の中に歩み入る。舟橋、石田後に付きて走り入つてまづ戸を閉づる。毛利、尾關、村井燈を持ちて、つゞら挾箱のくまぐ、迄搜り求むるに、衣服器物の外は何もなし。五士さらば是れまでぞとて、各、家に歸れば已に鶏鳴に至る。明旦五士ともに成田を訪うて見る所を語り、今は庾されそ、其の故を聞かばやと云へば、成田亡妻の事を始終具に語る。亡妻其の事を洩さざれ、洩さば命を縮めんと申せしが、さもあらんと覺ゆ。我れ死なば、日來の好みを思ひ出でて慍まれよと云ふ。かく弱き心よりこそ亡魂も見入りけれ。殿に思ひ絶えなば何事あらんとて歸りけり。其の夜より後、妻来らず。成田惘然として夢ともなく、現ともなくて居たりけるが、十日許りありて俄に死す。奇怪なりける事なり。

池田備中守長幸の家禮佐治頼母が僕、罪ありて出奔す。後豆州三島にて他家の人に從つて旅宿の向ひに居るを見付け、其の主人に理りて受取り、既に斬斷せんとするを、神官等此は明神の鎮座したまふ地なれば、怒りを抑へられて彼が一命を助けられよと、強ひて請ひ止まず。これに依つて一旦望みに隨ひ、道に出でて斬つて棄てぬ。其の日よりの僕頼母が現に見えて、暫くも離るゝ事なし。頼母之が爲め故に氣も亂れぬべく覺えければ、備前城下の景福寺に參禪して後止みぬ。始め自ら欺きたる事を知つて自ら快らず、且つ明神の祟りを心中に危ぶみ疑ふ故に、僕が形顯れぬ。參禪して心此に専らなれば物の爲めに奪はるゝ氣なし。故に僕が形消えぬ。同じく是れ頼母が身、其の妖怪の有無は一心の趣によれり。

淺野彈正少弼長政の歩士、伊勢に使用して道に墓原ある所を夜半に過ぎりけるが、變化の者出でたり。身に火焰ありて不動明王の形の如し。火光の中に其の面を見れば、にかりくと打笑ひて來る。歩士刀を抜いて走りかゝりて之を斬る。火光忽ちにきえて暗夜となりぬ。それより伊勢に往きて、明日歸路に右の所を見れば、苦むしたる石佛の頭より血流れ出で、切先きはづれに斬りたる跡あり。是を取りて歸り、人に云はんも誠しからねば、親しき友に密に語り、その刀を見せけるに、刀に血つき石のひきめあれども刃かけず。淺野長政之を聞きて秀吉の聽に達す。秀吉彼の刀を召しよ

せ一覽あるに、備中青江の作にて二尺五寸あり。是れ名物なりと云ひて、にかりと異名をつけて秘藏せらる。其の後京極若狹守忠高に傳はれり。

中川修理大夫秀重の家禮赤座七郎兵衛は鐵炮頭なり。赤座が妻の弟村井津右衛門浪人にて赤座が所にをれり。岡の城は地理嶮岨にして諸士の居宅爰かしこにありて相續かず。十町許り家離れの所に墓原あり。いつのほどよりか此の墓原に雨風の夜、物の羽たたきして鳴く聲あり。ばけ物出で來たりと云ひふれて、農商女童大に之を恐る。斯くて五七日過ぎて、村井ある方に行き夜に入つて歸らんと云ふ折ふし、雨風烈しく夜もふけたり。其の座中の人々歸路かの墓原を過ぐる所なれば、此の比の化物出でぬべし。たゞ此に宿せられよと止めける。村井何の思慮もなく、鹿忽の詞かな、さいはれては宿せらるべきかと、心中には思ひけれども、さあらぬ體にて赤座に必ず歸らんと申しつれば、寐ねずして待ち居候べしとて歸りけるが、墓原近くなり羽たゞきして鳴く聲聞ゆ。されば實なりと思ひ、其の聲に就いて歩みよる。風の絶え間に聲又やむ。此の邊ならんと聲せし所に近づくと、風吹き來ると均しく、はた／＼ひやう／＼と云ひて頭の上にかゝる。豫て斬る處にあらず捕ふべしと覺悟したれば、これを捕へて手探りにして見るに、竹の子笠を墓原の竹垣に掛け置きたるにてぞありける。是れをばづせば風吹けども聲なし。此の竹の子笠を取り歸つて、赤座はとく寝ねたる

を起し、我今夜かの化物を斬りとめ候と云ふ。赤座奇怪の事かなとて、其の事を問ふ。村井人を退けてかうく首尾に候といへば、赤座實ないひそ。ただ斬り留めたるにせよとて、明日人に逢うて之れを語る。はたくとは笠の垣にあたる音、ひやうくとは竹の穴に風の笠にさへられて激する聲なり。其の後羽たきも鳴く聲も無かりければ、人村井が斬り留めたる事を信ず。世上妖魔など云ひ傳ふる者、其の實を正さば、皆竹の子笠の類なるべし。

筑前の博多に富み榮えたる商家の女子殊色あり。十四五歳の比より三尺ばかりの蛇來りて其の傍を離れず。之を殺して捨つれば、其の者の歸らざるさきに蛇又來る。坐する時は前に輪つくりて女の方を見て舌を出し、身を動す事なし。行く時は一尺ばかりあとより這うて、遅速は女の歩むに隨へり。父母深く之を憂ふれどもせん方なし。女はこれを苦みてあをみ瘦せぬ。十七八に成れども嫁すべきやうなし。時に道元和尙入唐の志にて博多に到りて風まちする間に、かの商家、崇とき僧なりと聞きて、其の旅亭に往きて爾々の事の候。あはれ御覽ぜられて法力をもつてやめらるゝ道も候はば、御慈悲を仰ぎ候といへば、道元法力をもつてやむべき覚えはなし。されども稀有の事なる間、見おかばやと思ふはいかにと問はれけるに、元より望む所なりと云ひて、頓て其の母かの女とともに來る。聞きしに違はず。道元つらく見て長座は入らざる事なり。此の僧が前の柵をこえて歸

られよ、子細ありといはれければ、其の母承りぬとて、さきに立てば、女其の次に歩み、蛇女に隨ひて行く。蛇柵をこす時、道元扇の要を以て蛇の尾を痛むほど強く押へらるれば、首にて尾を押へたる要を喰はんともどる處を、黒衣の下より髮剃を以て蛇の首を斬つて之を殺す。母も女も驚きければ、道元徐に蛇二度來らじ。此の後は心安かれと云はれければ、按の如く蛇終に復來らず。蛇の念を別物にうつして、女につく心を轉ぜしが故なり。

阿波の三好、阿波・土佐・淡路三州を切取り、讃岐は已に旗下に屬す。其の武威五畿に奮へり。梶原、菅、舟越、安宅、皆其の同姓なり。舟越は三好が三男にて、淡路の周本に在城して年々播磨、紀伊と相戦ふ。播磨より福浦には三里、紀伊より牟島には九里、海上近ければ漕ぎ渡りて淡路の地を侵す。舟越五郎左衛門能く拒ぎて、度々播磨、紀伊の兵を挫く。ある時、紀伊より牟島のわき大石が鼻と云ふ所に兵船をよせて戦ふ時、舟越強弓なればわたり四寸八分の大雁俣を以て、一陣に進みたる敵を、胃の吹返のきはより眉を掛けて臙を横に射切つて、臙は海上に墮ち、胴は舟中に僵るゝ。それより矢つぎ早に放ちければ、敵、弓一張に射立てられて遙に引退く。舟越が勇力にて終に侵し掠められず。然るに三年つゞけて大雨洪水の後、必ず早魃して、國疲れ民饑死せり。是はしどりの池にすむ大蛇のわざなりと云ふ。舟越口をしき事かな。倍々の敵をさへ拒ぐ者の、大蛇に困めらるべき

やと云ひて、弓矢を持つてかのしどりの池に往きて馬を池の汀にのり留め、此の池に大蛇すめりと聞きぬ。三年の洪水大旱も汝が所爲なりと云へり。汝今形を顯して出でよと呼ばはりける處に、舟越が將、納氏・加治氏等斯くと聞きてあとより駈け付けたり。頃くありて池水の上に一尺ばかりの小蛇浮み出づ。舟越これを見て、其の形にて舟越に見えんとは事をかし。何ぞ大蛇の形を顯さざるやと言ふ詞の下より、水底に沈みけるが、乍ち急雨一通りして風烈しく浪さかまきて、箕を二つ合せたるが如きの巨口の中より、火焰かと思ゆる舌を振りて舟越に打ち向ふ。舟越常に好む大かりまたを以て口の中に射込みければ、倒にかへると見えしが、起き直りて舟越を追ふ。舟越、納・加治とよもに馬に鞭うちて馳せて去る。大蛇之を追ふ。草木の上を走る音疾風の如し。しどりの池より周本の城までは一里半の所なり。其の半路にあまと云ふ所あり。其の所に大楠の森あり。此の森の陰にのり入りければ、大蛇舟越を見失ひて森の梢にのぼり見おろす所を、舟越ふり返りて二の矢を射る。其の矢喉に中りて大蛇よわり、逐ふ事急ならず。それより舟越馬をのり付さぬ程に引きのけば、大蛇も亦それに隨ひてこれを追ふ。城に至りて門を開かせ馬をのり入れ、門を閉づれば、大蛇門の上をのぼり踰ゆる所を、納持ちたる眉尖刀にて其の首を斬り放つ。其の時息をふきかくるに身に熱湯をあびるが如し。納も加治も毒氣に舐れて甚だ煩熱して其の日に死す。門番の足輕五六人、舟越、納、

加治が乗りたる馬三頭は立ちどころに斃れ死す。舟越も三四日過ぎて皮膚赤く爛れて卒す。

正親町院の御宇に王威日に衰へ、諸侯各、其の國に據つて天子の命を用ひず。遞に彼れは此れを并吞せんと欲す。美濃、尾張の間盜賊殊に甚し。是れ剽殺を以て事とし、徒に財を貪るのみに非ず。此に依て人の剛柔を試みると云ふ風俗なれば、盜賊等、其の黨を相率ゐて村里を掠め女童を劫かす。ある草廬に到つて竊に内の體を覗へば、一婦人の粥を煮るあり。其の粥の熟したるや否やを試みるに、之を食はずして箸にて粥をはさみあげ、釜の蓋に置きて指を以て是を押す。未だ熟さずと云ひて又これを煮る。盜賊等之を見て、其の禮儀、人知らざれども、猶ほ亂れぬ事を感じて、敢て侵し掠めずとなん。又、一廬に至る。媼女の聲にて、今夜は雨荒く風烈し、盜賊あるべし。汝等いざとくして怠る事なかれ。鎗の鞘をはづせ、弓に弦かけよ。此の鎗はよく透るぞとて、投げ出す音あり。壁のすき間よりこれを見れば、絹を張るの具なり。廬中を覗ふに、媼女と婢一人との外は寂として人なし。盜賊等其の謀ありて只者にあらざる事を感じて、兵刃を加へずして去ると云ひ傳へたり。

大坂の役に木村長門守重成が兵士松浦彌右衛門、堀田圖書勝嘉が従士淺部清兵衛、共に敵を斬つて首を得たり。秀頼卿の右筆白井甚右衛門、其の日首帖の役たり。松浦早く首を持ち來つて一番と書かしむ。白井首一つ松浦彌右衛門と書きて一番と書かず。松浦怒れども白井聞き入れざる處に、

淺部又首を持ち來る。白井之を正すに、淺部は松浦より先に首を取りたれども、其の場遠ければ遅參せり。其の證分明なれば、淺部を一番と書き、松浦を二番と書いて、白井松浦に向ひて、二の首を待つて、一つの首を記す事首帖の古實に候と云へり。

松平阿波守忠英の家老増田豊後、忠英に怨みありて江戸に訟へたり。是れを匡さるゝに忠英罪なし。其の後増田が一類、黨を結びて訴狀をさゝぐ。忠英公儀を憚りて閉門せらる。恐れて賄賂を行ふに江戸にある金銀稍盡きぬ。國は遠し、取りよするも人に疑はるべし。此の危きに臨みて之を貸す者なし。井伊掃部頭直孝は忠英の外族なるを以て、使を井伊家に遣はして恩借を求む。家老猜ひ沮みてかす事なからんと云ふ。獨り岡本半助、人の急を救ふは義なり。如しこれを救はずば難をおそれ、親を棄つるの誇りあらん。是れ井伊家の恥にあらずや。皆曰く、是れを君に白せ。岡本可かず、もし貸し救ふを以て、公儀より逆に黨ぜりとの御尤めあらば井伊家危ふからん。是れ不忠なり。然るに於ては我れ出で、掃部頭は努々存ぜず候。盡く臣が所爲なりと云ひて、腹切つて君の難を解かん。又譽れあるに至つては君の名とせんと云ひて、遂に心を決して倉を開き、千金を出して之を救ふ。後に直孝之を聞いて大に其の才器義心を感じず。

永井信濃守尙政の家臣坂和田喜六は里村昌琢法眼に伴ひて連歌の道にも長じ、林道春法印に親み

て仁義の理をも學び、尤も武家なれば孫吳の書を読み、射御の藝に遊びて日を空しく送らず。其の比政を興り聞きしが、信州江戸の留主に家中の士逼迫して喜六に因つて倉銀を借らん事を願ふ。喜六信州に申さずして、年來貯へ置きたる倉銀を取出して千貫目かして家中の士を救へり。信州江戸より歸りて喜六かくと云ふ。信州怒りて、かすとも何ぞ我に告げずして、汝恣にかしつるぞと責められければ、唯今臣を責めさせらるゝ御志にて候故、申さば、とても御許容あるまじきと豫て存じ候。申して御許容なきをかし候へば、御意に戻るの恐れあり。又御意を守りてかし候はずば諸士彌逼迫仕らん。京銀を借りて過分の息を與へ、商人に利をとらせては益なき事に候。御倉銀を貯へ置かれ候は軍用公用の爲めに候。諸士の逼迫を救ひ、人馬をも減さず知行役の格を立て候事、軍用の基に候。是れ公方の御爲めに忠義を御務め候の專一なれば、公用之に過ぎたるはなく候。且つ御倉銀を取り出し候ひても分厘も減り候に非ず。十年の間には本の如く返し納め候。是れ上に小損なくして下に大益あり。下に大益ありて諸士忝しと存ずるは畢竟上の大益に候。此を以てたとひ身の科を蒙るともと存じ、かし申したるに候。外の御用人はさらに存ぜず候。臣一人の所爲に候間、いかなる罪にも仰せ付けられ候へといへば、信州も此の理にをれて怒りをふくみながらさて已みぬ。

松平筑前守忠之の家老栗山大膳、三萬石の領地を取りて國政を専らにす。時に寺田傳右衛門争訟の

事あり。理ながら卻つて非に落ちんとす。馬爪源右衛門栗山と親し。栗山に説いて曰く、今度の争訟は理寺田にあり。然るに非とせらる。我れ寺田と面友のみ、知音にあらず。又寺田に恃まれたるにあらず。争訟を聴きて不明不直ならば是れ貴公の恥なり。願はくは詳に察せられよ。栗山これに由つて曲直を正して終に寺田が理となる。寺田これを知る。然れども馬爪に一禮をも言はず。本栗山が爲めにするの故か、馬爪心中に寺田を以て恩を知らざる者とす。其の後栗山倉鉢十太夫が新に寵を得るを悪んで、其の君主忠之と郷あり。是において栗山江戸に訟ふ。栗山罪ありて遠流せらる。倉鉢益々威を一國に振へり。馬爪は栗山と同じく、鐵炮の傳を榊氏に受けたるが故に、日來昵を結ぶを以て、禁獄にあへり。其の黨十餘人。寺田倉鉢と好し、倉鉢に謂つて曰く、栗山が惡逆に馬爪與みするに非ず。然るを其の罪馬爪に逮ぶは不正なり。是を殺さば貴公無道の謗あらん、誰か貴公に心服せんや。倉鉢が曰く、子黙せよ。事已に決せり。死を免るべからず。寺田色を作して膝もとに近く寄りて、巽爾々の故ありて我れ馬爪が恩を得たり。此の時に報ぜずんば、又何れの時をか期せんや。馬爪救ふべきの理を以て之を救ふ。姦曲ある事なし。馬爪元來罪なし。我れよくこれを知る。是の故に又報すべきの理を以て之を報す。且つ貴公私の怒に由つて、不辜有藝の士を殺さんとするの非を規す。是れ貴公の爲には争友なり。我れ義達せずば常々交情の渥きも何にかせん。寔に

聞き入られんや否やと云ふ。氣色を見るに、聴き容れざる時は乍ち刃殺すべき者の如し。且つ其の言の正しきに屈す。是に於て倉鉢乃ち笑つて曰く、諾しぬ。此によつて馬爪一人免れて餘は皆戮せらる。馬爪人に語つて曰く、寺田は庸人に非ず。人の善惡は死後に論ぜよと云ふは眞なるかな。

加藤肥後守清正母衣の者廿人を撰び定めんとて、國中の士に命じて入簡をせさせらる。箱を作りて廣間に置き、各簡を箱の中に投ず。坂川忠兵衛と云ふ者あり。自ら姓名を書きて入れ置きたり。清正箱を開きてこれを見て大に是れを異む。坂川を書院に召して家老皆左右に候じ、其の意を詰り問はるゝに、人の心は知るべからず候。臣が父御眼前にて二三度鎗に血つけたる事候へ共、明日の首尾は又計ひがたく候。父子より親しきはなく、又手に逢ひたる證據も御座ありながら、此の身體別なる故に、子として猶ほ父が心底を存ぜず候。况んや他人の上を母衣の者に宜しからんとは申さるゝ道理に非ず。臣自ら省みるに、吾が心なれば吾れとよく知りて候。母衣を預け下され、其の數に入り候とも、其の名を辱しむ可からず候。此の故に自身を申し上ぐるにて候と、色をも變ぜず云ひたりければ、清正汝が言ふ所、尋常の者に非ずとて、即ち一倍の加増を與へ、六百石になして母衣を許されたり。

稻葉一徹信長に隨従すといへども、其の心服にあらずして後患あらん事を疑はれければ、一日こ

れを享す。數寄屋にて茶を賜り之を殺すべしとの謀なり。一徹數寄屋に入る時、相伴ふ人三士、挨拶に懸物の繪讃を讀ましむ。一徹少し文學あり。即ち其の讃を讀む。三士其の意奈何と問ふ。一徹之を説く。信長壁を隔て、之を聞き、戸を開いて入つて曰く、客はあら勝負をする勇士とのみ思へり。今讃を讀むを聞くに文書にも達せり。我れ人朝夕鎗を握り、馬を馳せ隙なき時に、奇特の事感するに勝へたり。今日の享は客を賞するに非ず。其の二心を疑ひて殺さんとするにあり。相伴の三士に皆懷劍をさしむ。今客が文書の爲めに之を赦す。是より永く我が謀臣となれと云ひて、三士の懷劍を出さしめて一徹に示す。一徹拜して死を宥めらるゝ條誠に忝し。臣も内々之を存すと雖、せん方なきに由つて隨從す。定めて數寄屋にて殺さるべし。一人は是非相手をとらんと存じ、帶ぶる所なりとて、懷中より短劍を取り出して信長の前にさしおけば、信長又其の用意をぞ譽められる。

伏見彦太夫は源君の歩士なり。久しく仕へて勤勞すれども、祿を得ざるに由つて松平右衛門大夫正綱に就いて歎訴すれども、御耳に達せず。ある時、源君外に出でたまふ時、伏見後より御服折の袖を引く。源君顧みたまひて、何をするやと御尋ねあり。其の詞の下より右の段々を申し上ぐれば理を聽き得たり。汝憂へされとて打ち過ぎ給へり。是れ多くは上を輕んずると云ひて責めらるべ

し。源君士卒を子の如くして悦服せしむるは、武威是れより重きはなき道理を辨へたまへる故に、よくこれを容れて妨ぎ玉はず。其の後、源君田獵の御供に伏見三尺五寸の刀、二尺三寸の脇指を十文字に打違へ、山を走る事平地の如し。源君御覽ありて、汝は壯力の若者なり。其の刀をぬけと仰せられければ、即ち抜いて片手を以て打ちふるに、其の音風を生ず。刀を鞘に收めたる時、汝尺の延びたる刀の利を知るやと御尋ねありければ、伏見唯のべかけて一薙ぎにと存するばかりにて、利は辨へ候はずと申す。難に臨みては鎗に用ひんが爲めなり。汝必ず忘れされと仰せらる。一村を指して汝にあの村を與へん。多少は汝が仕合によらんとてこれを賜ふ。是れ五百石の村なり。松平甚兵衛は源君の従弟なり。駿州において田獵に従ふ時、其の形粧伏見に類す。源君御覽ありて汝は大家なり。威儀正しく禮讓ありて身を輕々しくすべからず。今の形粧は鎗持馬取に等し。何ぞ相將の器とするに足らん。汝自ら其の身を賤す。汝匹夫となれ。是れ汝が好む所なりとて黜けたまへり。

松平宮内少輔忠雄、歩士の健勁なる者を擇びて八人を得たり。出づる時は馬廻りにつれて是れを八人衆と號す。遠山行合、河合が僕を斬りとめたり。此の時新知百石を與へらる。其の後江戸の長屋に取り籠る者あり。遠山一番にかけ入りはたらきたるに由つて、五十石の加増を與へらる。年へて忠雄の嗣松平相模守光仲に至りて因幡、伯耆に國がはりあり。耶蘇一揆の時、湊五左衛門、遠山才

兵衛、使者として有馬に下る。陣中において板倉内膳正重昌、此より向うの柵際まで何十間あらんと尋ねられける中に、遠山聞くより早くつと立つて、何の慮りもなくまづ柵際に抵り、それよりなたに向つて靜に歩みをかぞへて歸り、何十何間と申す。神妙なる仕形とて重昌黄羅紗の羽織を賜ふ。其の外少々働きあり。歸陣の後、湊に新知二百石、遠山に加増五十石、本知を合せて二百石與へらる。遠山肯て命に従はず。湊は新知なり。又有馬においてさせる功名はあらざれども、湊に比すれば少仕たる事も候か。更に知行を貪るには非ず。武士の習ひ戦場の事は黙止しがたく候と云ひて出奔す。江戸の上野に浪人にて居たる時、隣の寺に盗人入りたる時、何方に匿れけん、捕へ得ずして事畢りぬ。夜半ばかりに盗人遠山が寝ねたる近所の屏を踰えて行くとして、誤りて溝に落ちたり。遠山其の音を聞きて走り出で、執へてこれを刺し殺す。後保科肥後守正之、遠山が人たるを聞き及び、毘沙門堂門跡を頼みて相州にことわり、祿五百石、足輕廿人にてかゝへらる。會津に封ぜられたる時、總並の加増を與へられて六百石になる。又耶蘇一揆に付きて松平伊豆守信綱、御名代として下らるる時、相州重ねて佐分利九之丞、石丸七兵衛、著け使者として下る。佐分利は有馬において鬪死す。石丸は本知四百石の上に二百石の加増を與へらる。石丸、臣させるはたらきもなくて加祿拜受仕る事心に快からず候。榊原飛州の手にて城乗り一番の供を仕り候へども、城上より轉ばし候石に中

りて仆れ、又起き直りて乗り入れ候時は、早や後より餘人もつゞいて臣一人が力にあらず。是れほどの事は元來男役に候へば、あながち功名とも申されずとて固辭して受けず。加祿猶ほ輕しとて申すかと、知音を以ていさめさするに、石丸更に挟む所なしと云ふ。此によつて重ねて永々の在陣苦勞たるに付いて與へらるゝ事なれば、此の上はとて拜受す。同家の武士ながら遠山が志と大に異なり。寔に人の好む所、各々主意あるか。利を以て之を誘うて志變すべき者は最も恃むべからず。然れども勇者たらば將之を御するに道あり。唯義を守りて遷らざるを善士とす。

源君の兵士垣見助兵衛五百石を知行す。ある時京都に使用して歸路に宿を取りて休む處に、秀吉の直參衆其所を過ぎけるが、垣見が鎗持はもと彼の家にて罪ありし者なれば、是を見付けて執へんとて、垣見が旅宿に追ひ込みたり。垣見何事ぞ狼藉なりとて出で向へば、爾々の子細ぞ。速に彼の者を出さるべしと、匂りて亂れ入るべき氣色なり。垣見天下に定法あり。敢て違ふべからず。士は禮をもつて立つ者なり。一應の届けもなくして漫りに追ひ込まるゝ條、禮にあらず。我れ今他疆の使を務めて、半路より鎗持なくば、奪ひとられたるの毀りあらん。願はくは是を宥められよ。必ず命を傳へて後違變なく出さんと云ひて、手書をもつて證據に残せども聽き入れず。遅く出さば打ち果せと云ふ程こそあれ。宿をひし／＼と取巻きたり。垣見大に怒つて、十文字の鞘を脱し、理不